御資部經濟說明

原文ニハ金額ヲ記載スベキ財本額ニ基キ御資部經濟ノ實況ヲ說明スレバ其繰越總額ハ二十八年度ヨリ二十九年度ニ繰越スベキ財本額ニ基キ御資部經濟ノ實況ヲ說明スレバ其繰越總額ハ二千七百四十七萬三千八百四十二圓五十一錢一厘

內借入金六百四十萬圓

ニシテ其內譯ヲ擧グレバ

公債證書五百二十五萬三千八百二十圓二十一錢四厘

此券面五百三十五萬六千八百四十圓

株券一千四百二十萬千二百二十五圓

此株券及拂込額一千二百二萬三千二百七十圓

會社々債券二十九萬五千圓

此券面二十九萬五千圓

地金銀三萬八千六百七十九圓六錢二厘

現金五十六萬九千四百七十二圓八十三錢七厘

御料部分置基金九十七萬七千二百七十九圓六十三錢

皇族家世襲財產準備百三十九萬三千四百三十二圓七十六錢六厘

舊堂上華族惠恤金百九十九萬圓

牧場分置資本一萬四千九百三十三圓二厘

御料部超年繰替貸六十八萬圓

預ケ金百六萬圓

ナリ。然ルニ此內借入金六百四十萬圓ニ對スル所在ノ證券ハ御資部ノ有ニ非ザル故之ヲ除算スレバ御資部財本ノ總額ハ

二千百七萬三千八百四十二圓五十一錢一厘

ナリ。然ルニ此內皇族家世襲財產準備百三十九萬三千四百三十二圓七十六錢六厘ハ追テ皇族家ヘ分與セラルヽカ、若クハ宮內省ヘ別途ニ積置カルベキモノトナルベク、又舊堂上華族惠恤金百九十九萬圓ハ則チ其惠恤ノ資金ニシテ十五ケ年ノ後ハ下賜セラルベキモノナリ。又宮內大臣預ケ金ノ內ニ含有スル東宮御所建築準備金二百萬圓ハ、國庫ヨリ特ニ引入タルモノニシテ、後年東宮御所建設ノ場合ニ至レバ拂出サヾルヲ得ズ。此三口ハ假ニ籍ヲ御資部ニ置クモノナレバ、到底御資部ノ有ニ

アラザルナリ。依テ之ヲ除算シテ視ルトキハ全ク御資部ノ有ハ

一千五百六十九萬四百九圓七十四錢五厘

ナリ。然ルニ又此内地金銀ハ利益ヲ生ゼズ。御料部分置基金牧場分置資本ハ御料部又ハ牧場經濟ニ於テ其利益ヲ收メ、又預ケ金ノ内六萬圓ハ其利益ヲ宮内大臣機密費ニ充ルノ特許アルガ故ニ、此四廉ノ金額百九萬八百九十一圓六十九錢四厘ハ無利資本トナルナリ。依テ又之ヲ除算スルトキハ全ク有利ノ資本トナルモノハ

一千四百五十九萬九千五百十八圓五錢一厘

ナリ。但此資本中ニアル公債證書株券ヲ其券面又ハ拂込現額ヲ以テ計算スルトキハ一千二百五十二萬四千五百八十二圓八十三錢七厘（借入金ニ對スル六百四十萬圓ハ除キタル高ナリ）ニシテ本額ニ比シ二百七萬四千九百三十五圓二十一錢四厘差額アルガ如シト雖ドモ、二十八年十月中ノ平均市價ニ據テ計算スルトキハ三千六百七萬四千二百九十六圓二十二錢九厘トナリ、本額ニ比シ反テ二千百四十七萬四千七百七十八圓十七錢八厘ノ差額ヲ孕ミ居ルナリ。而シテ其有利資本ニ生ズベキ一ケ年ノ收利ヲ勘定スレバ百五十八萬五千七百七十八圓五十錢アリト雖ドモ、其内ヨリ借入金利子三十二萬八千九百七十四圓二十四錢七厘ヲ除算スルヲ以テ全クノ收利見込ハ

百二十五萬六千八百四圓二十五錢三厘

トナルナリ。此收利額ヲ以テ前記ノ有利資本額ニ對算スルトキハ平均一ケ年八分六厘餘ノ利益割合ニ相當ス。但此收利見込タル株券ニ係ル分ハ其會社營業ノ實況ヲ勘量シテ其利益ヲ輕減シタルアリ又利益皆無ト見タルモノアレバ、若シ其會社ノ業務整理シ繁榮ニ赴ケバ尚此收利額ヲ增加スベク、又此收利ハ引入ルヽニ從ヒ之ヲ財本ニ組入更ニ有利ノ資本ニ換置スル順序ナレバ、其年度内ニ在テモ利ニ利ヲ重ネ此收利額ヲ增スコトアルベキナリ。

今茲ニ參考ノ爲メ既往二十一年度ヨリ二十八年度ニ至ル收利ノ員額ヲ揭グレバ

二十一年度九十八萬千四百七十四圓九十五錢八厘
二十二年度九十萬八千五百五十二圓四十五錢五厘
二十三年度百萬千百一圓一錢四厘
二十四年度五十六萬四千百十二圓十六錢
但此年度ハ年度改正ニテ九ケ月ノ勘定トナリ且ツ二季配賦ノ利益ハ一季ヨリ收入セザル爲メ減ジタルナリ
二十五年度百四萬八千二百二十五圓八十七錢七厘
二十六年度百十三萬二千五百三十五圓二十一錢九厘
二十七年度百十二萬六千五百七十二圓四十一錢六厘

二十八年度百十五萬六千二百七十六圓七十七錢九厘

但此年度ハ未決算ノ員額ナリ又日本銀行株五萬株ニ對シ一株五十圓宛二百五十萬圓ノ配當ア
リシモ右ハ特殊ノ利益ニ付之ヲ除キ尚ホ又日本銀行借入金利子九萬四千二百四圓十一錢ヲ除
算セシ高ナリ

ニシテ、二十一年度ノ員額ニ對比スレバ實ニ十七萬四千八百一圓八十二錢一厘ヲ增加セリ。又二
十一年度ヘ繰越員額ヲ始メトシ爾後每年度末ノ財本在額ヲ揭グレバ

二十一年度ヘ繰越八百十萬九千四百二十七圓五十七錢三厘
同年度末日九百十八萬九千二百六十八圓八十九錢三厘
二十二年度末日九百七十四萬七千五百十七圓七十錢
二十三年度末日千二百九十五萬七千八百二十九圓五十四錢一厘
二十四年度末日一千三百六十二萬九千二百九十二圓二十二錢五厘
二十五年度末日一千五百二十七萬三千百十二圓九十六錢六厘
二十六年度末日一千六百五十九萬三千百四十九圓七十錢九厘
二十七年度末日一千七百七十三萬六千五百十四圓六十二錢六厘
二十八年度末日二千百七萬三千八百四十二圓五十一錢一厘

但此分未決算

ニシテ、二十一年度ヘ繰越ノ員額ヲ二十八年度末日ノ員額ニ對比スレバ實ニ一千二百九十六萬四千
四百十四圓九十三錢八厘ヲ增加セリ。此金額タル則チ八ケ年間ノ增減出入ヲ乘除シタル上ノ增額ナ
リ。其增減內譯ヲ揭グレバ

增之部

收利　一千八十萬九千九百九十三圓三十五錢九厘
常用部ヨリ移入二百四十萬四千十三圓八十八錢六厘
別段挿入三百八十一萬六千三百二十六圓四十錢五厘
合計一千七百三萬三百三十三圓六十五錢

減之部

御料部ヘ移入百五十一萬七千三百九十八圓二十八錢三厘
常用部ヘ移入二十八萬二千百三十二圓八十四錢四厘
贈進賜與百八十七萬六千四百八十七圓三十六錢三厘
雜費　三百四十五圓六十五錢
御料部基金誤謬訂正拂二十五萬千四百九十六圓六十一錢一厘

損失　四萬二千二百圓四十八錢八厘

內

皇族家世襲財產準備損失二萬二千五百六圓四十四錢八厘

舊堂上華族補給利子千四百五十三圓三十六錢三厘

借入金利子九萬四千四百四圓十一錢

合計四百六萬五千九百十八圓七十一錢二厘

ナリ。尤モ右ノ內挿入額ノ內ニアル二百五十萬圓及賜與額ノ內五十萬圓ハ東宮御所建築準備金ノ出入ニシテ、假ニ籍ヲ御資部ニ置クモノナレバ之ヲ除クトキハ全ク御資部ノ增額ハ一千九十六萬四千四百十四圓九十三錢八厘ナリ（皇族家世襲財產準備金及舊堂上華族惠恤金ハ御資部財本中ニ置キ計算セシ額ナリ）

以上說述スル處ハ御資部大體ノ經濟實況ナリ。又二十九年度ノ財本出入豫算ニ就テ說明センニ同年度ヘ繰越ノ財本額ハ前ニ揭グルト同ジク

二千百七萬三千八百四十二圓五十一錢一厘

ニシテ之ニ歲入歲出差引剩餘額

百三十二萬六千六百八十四圓四十二錢七厘

ヲ加ヘ尙ホ皇族家世襲財產準備ニ充テ常用部ヨリ移入スベキ豫算額

二十八萬五千圓

ヲ加算スルトキハ二十九年度末ノ財本額ハ

二千二百六十八萬五千五百二十六圓九十三錢八厘

トナリ、二十八年度ヨリ繰越額ニ對比シ百六十一萬千六百八十四圓四十二錢七厘ヲ增加ス。尤モ右財本額ヨリ更ニ又前述ノ如キ假籍ニアル皇族家世襲財產準備百七十四萬七千七百三十圓九十四錢六厘竝ニ舊堂上華族惠恤金百九十九萬圓東宮御所建築準備金二百萬圓ヲ除クトキハ全ク御資部ノ有ハ

一千六百九十四萬七千七百九十五圓九十九錢二厘

トナリ、又其內ヨリ無利資本ニ係ル地金銀御料部分置基金牧場分置資本宮內大臣特任預ケ金（六萬圓ノ內）等四廉ノ合金百九萬八百九十一圓六十九錢四厘ヲ除クトキハ有利ノ資本ハ二十九年度末ニ

一千五百八十五萬六千九百四圓二十九錢八厘

トナリ、二十八年度ヨリ繰越ノ有利資本額ニ比シ百二十五萬七千三百八十六圓二十四錢七厘ヲ增加スベキナリ。

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所公賣ニ付スル件

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所ハ公賣ニ附スベキモノトシ、其公賣ニ附スベキ鑛區及土地ノ面積豫定價格、其他公賣ニ關スル條件ハ成按ノ上更ニ議定可相成旨曩ニ皇室經濟會議ノ決議ニ依リ、今般右拂下方法取調委員長ヨリ提出ノ拂下規程竝賣買契約書案鑛區土地及反別坪數取調書等御下付ニ付猶調査ヲ遂候處、會計ノ法規ニ抵觸スル所ナク適當ノ成案ト被認候間更ニ皇室經濟會議ヘ御提出可相成哉

但シ豫定價格取調書ノ儀ハ宮内大臣ヨリ別ニ御提出可相成哉

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所拂下規程竝ニ拂下契約書案取調ニ付報告

前ニ佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所拂下方法取調ノ義被命候ニ付首トシテ公賣方法ノ取調ニ著手シ御料局起草ノ拂下規程及契約書案ニ基キ數次會議ヲ開キ各委員反覆討論ノ末別冊甲乙丙號ノ通議定仕候ニ付乃及進呈候尤拂下グベキ土地段別及鑛區面積ノ義ハ御料局ノ取調ニ依レバ別冊丁號ノ通ニ候處其内土地ノ段別ハ目下猶精査中ニ係ル分モ有之候ヘバ拂下實行マデニハ多少異動ヲ生ズベキモ大體右取調書ニ據リ御決定相成可然ト議決仕候此段及報告候也

明治廿九年七月七日

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所
拂下方法取調委員長
宮内次官子爵　田　中　光　顯

宮内大臣伯爵　土　方　久　元　殿

追テ拂下豫定價格ノ義モ此際議定上申スベキ筈候處目下御料局ニ於テ材料蒐集中ニ付先以本文議定ノ分進呈仕候此段申添候也

（甲號）

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所拂下規程告示案

第一條　佐渡生野兩鑛山及大阪製煉所ノ拂下ハ本年十月三十一日ノ現形ヲ以テス。

第二條　拂下グベキ鑛山及土地物件ノ種類ハ左ノ如シ。

佐渡鑛山

一　相川百枚二鑛區及附屬油戸鑛區ノ採掘權

一　營造物、諸器械、器具、用地竝ニ鑛山備林

生野鑛山

一　太盛、金个瀨、神兒畑、明延、中瀨五鑛區ノ採掘權

一　營造物、諸器械、器具、用地竝ニ鑛山備林

大坂製煉所

一　營造物、諸器械、器具、用地

第三條　拂受望人ハ佐渡生野兩鑛山及大阪製煉所ノ實況竝ニ左ノ書類デ各所管ノ廳所ニ就テ熟覽シタル上入札ヲ爲スベシ。

一　拂下土地物件ノ明細書

一　營造物敷地其他使用ノ圖面

一　鑛山備林ノ圖面

一　鑛區面積表及圖面竝ニ坑內實測圖

一　廿二年度ヨリ廿八年度ニ至ル收支決算及益金一覽表

一　作業收支現計書

一　施設中ニ係ル工事ノ說明書及費額豫算書

一　拂下契約書案

一　拂受人ニ於テ繼承スベキ諸契約ニ關スル書類

第四條　前條ニ依リ兩鑛山及製煉所ノ實況及書類ヲ縱覽セントスル拂受望人ハ御料局若クハ佐渡生野兩支廳大阪製煉所ノ中ヨリ縱覽承認書ヲ申受クベシ但大阪製煉所ノ縱覽承認書ヲ申受クルニハ現金又ハ公債證書若クハ銀行預券ヲ以テ金額一萬圓ノ身元保證金ヲ豫納スベシ。

縱覽期間ハ本年八月一日ヨリ翌九月十日マデトス。

第五條　身元保證金ハ拂受望人承認書ヲ返納スルトキ之ヲ返付ス。

第六條　拂受望人ハ別紙書式ニ依リ入札書ヲ作リ之ニ入札保證金ヲ添ヘ本年九月十六日午前八時ヨリ十二時マデニ御料局長ニ差出スベシ但入札書ヲ差出シタル上ハ其入札金額ヲ變更スルコトヲ許サズ。

第七條　入札ハ本年九月十六日午後一時東京赤坂離宮内御料局ニ於テ内藏頭調査課長立會ノ上入札人又ハ其代理人ノ面前ニテ御料局長之ヲ開札ス。

第八條　入札ニシテ左ニ記載シタル事項ニ該當スルモノハ之ヲ無效トス。

一　入札書ノ要領不明ナルモノ

一　入札人又ハ其代理人開札場ニ出席セザルモノ

第九條　拂下豫定價額以上ニシテ最高價ノ入札ヲ爲シタル者ヲ以テ落札者トス。

二人以上同一ノ最高價ノ入札ヲ爲シタルトキハ其入札人ヲシテ追加ノ入札ヲ爲サシム

入札人ニシテ追加入札ヲ爲サヾルカ又ハ追加入札モ同價額ナルトキハ抽籤ヲ爲サシメテ落札者ヲ定ム

第十條　最高價入札人其入札ヲ取消シタルトキハ次位ニシテ豫定價額以上ノ入札ヲ爲シタル者ヲ以テ落札者トス

第十一條　入札ニシテ一モ豫定價額ニ達セザルトキハ入札人ヲシテ直チニ再度ノ入札ヲ爲サシム。

第十二條　落札者ハ落札當日ヨリ七日以内ニ賣買契約ヲ取結ビ同時ニ契約保證金トシテ拂受代金百分ノ十ニ當ル金額ヲ御料局長ニ差出スベシ但無記名公債證書ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ得。

第十三條　入札保證金ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ御料局ノ所得トス。

一　入札人開札場ニ於テ其入札ヲ取消シタルトキ

一　入札人第九條第三項ニ從ヒ抽籤ヲ爲サザルトキ

一　落札者其入札ヲ取消シタルトキ

一　落札者第十二條ノ規定ニ違背シタルトキ

第十四條　拂受代金ハ一時ニ納入スルモノトス但拂受人ノ都合ニ依リ五ケ年以内ノ年賦ヲ以テ納入スルコトヲ得。

年賦納入ヲ爲ス者ハ拂受代金ノ未納額ニ對シテ一ケ年五朱ノ利子ヲ附シ且抵當トシテ代金相當ノ公債證書又ハ御料局長ガ承認シタル有價證券ヲ差出スベシ。

第十五條　契約保證金ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ御料局ノ所得トス。

一　契約者一時納入ニ係ル拂受代金又ハ年賦納入ニ係ル抵當品ヲ差出サヾル以前ニ於テ契約ノ

解除ヲ請求シタルトキ

一　契約者契約ノ期日ニ於テ一時納入ニ係ル拂受代金又ハ年賦納入ニ係ル抵當品ヲ差出サヾルトキ

第十六條　拂受人ハ第二條ニ掲グル拂下物件ノ外本年十月三十一日ニ現存スル鑛物半製鑛物及貯藏物品ヲ左ノ各項ニ依リテ定メタル代價ヲ以テ拂受クベキ義務アルモノトス。

第一　鑛物及半製鑛物ノ數量及含有價格ハ帳簿ノ記載ニ基キ其代價ハ左ノ算定法ニ依ル

一　佐渡生野兩鑛山ノ產出ニ係ル鑛石ノ代價ハ其製煉後實收スベキ價額ヨリ製煉費ヲ控除シタル殘額ノ二分ノ一ヲ以テス

一　佐渡生野兩支廳ニ於テ大阪製煉所ニ送致スベキ半製鑛物ノ代價ハ佐渡生野兩支廳鑛物半製品授受手續ニ依リテ之ヲ定メ運搬費ヲ控除シタル殘額ヲ以テス

一　佐渡生野兩支廳及大阪製煉所ニ於ケル半製鑛物ニシテ半製品授受手續中ノ品目ニ屬セザルモノノ代價ハ佐渡生野兩鑛山產出鑛石代價ノ算定ト同一ノ手續ニ依リテ之ヲ定ム

一　佐渡鑛山附屬油戶炭坑ニ現存スル選炭ノ代價ハ最近三ケ年度間ニ於ケル山元代價ノ平均額ヲ以テシ未選炭ノ代價ハ選炭代價ノ二割ヲ減ズルモノトス

一　鑛石及半製鑛物ノ代價算定ニ要スル金屬ノ相場ハ大阪製煉所ニ於ケル最近ノ購入價格ニ依ル

第二　貯藏物品ノ數量及價額ハ總テ帳簿ノ記載ニ依ル但佐渡支廳ニ於テ購買シタル鑛石竝ニ大阪製煉所ニ於テ購買シタル半製鑛物（製煉ニ着手シタルモノト否トヲ問ハズ）ハ貯藏物品ニ屬スルモノトス

第十七條　前條ノ拂受代金ハ其拂下ヲ爲シタル佐渡生野ノ兩支廳又ハ大阪製煉所ニ卽時納入スルモノトス。

第十八條　佐渡生野兩支廳及大阪製煉所ニ於テ從來事業ノ必要上他人ト取結ビタル契約ニシテ本年十月三十一日以降ニ亙ルモノアルトキハ拂受人之ヲ繼承履スルノ義務アルモノトス。

第十九條　第十二條ニ掲グル賣買契約ノ取結ハ御料局長男爵岩村通俊之ヲ擔任ス。

入札書式（用紙美濃紙又ハ美濃紙）

入札書

一金　何程

但佐渡生野兩鑛山及大阪製煉所拂受代價

右代價ヲ以テ拂受致度本年宮內省告示第　號ニ依リ入札保證金相添入札仕候也

佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所拂下規程告示案

御料局長男爵　岩村通俊殿

何廳府縣何郡市町村　番地

何之誰印

（乙號）

拂下代金一時納入ニ係ル賣買契約書案

御料ニ屬スル佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所ノ拂下ニ付賣主御料局長男爵岩村通俊ヲ甲トシ買主何某ヲ乙トシ甲乙ノ間ニ左ノ條々ヲ約定ス。

第一條　甲ハ左ニ記載スル鑛山及土地物件ヲ明治二十九年十月三十一日ノ現形ニ於テ乙ニ賣渡スベシ但土地物件及鑛區ノ面積數量ハ別冊明細書ニ從フ。

一　佐渡鑛山ニ屬スル相川百枚二鑛區及附屬油戸鑛區ノ採掘權及營造物諸器械器具用地竝ニ鑛山備林

一　生野鑛山ニ屬スル太盛金ケ瀨神兒畑明延中瀨五鑛區ノ採掘權及營造物諸器械器具用地竝ニ鑛山備林

一　大坂製煉所ニ屬スル營造物諸器械器具用地

第二條　乙ハ前條ノ鑛山及土地物件ノ代價トシテ金何圓ヲ甲ニ支拂フベシ。

第三條　乙ハ明治二十九年十月二十八日ヲ以テ前條ノ買受代金ヲ甲ニ拂渡スベシ。

第四條　甲ハ明治二十九年十月三十一日ヲ以テ第一條ニ記載シタル目的物ヲ乙ニ引渡スベシ。

第五條　甲ハ本契約書第三條ノ期日ニ於テ代金ヲ領收シタルトキハ卽日契約保證金ヲ乙ニ還付スベシ。

第六條　乙ガ代價支拂期日前ニ本契約ノ解除ヲ求ムルトキ又ハ同期日ニ於テ買受代金ヲ支拂ハザルトキハ甲ハ本契約ヲ解除スルコトヲ得此場合ニ於テハ乙ハ契約保證金ノ還付ヲ求ムルコトヲ得ズ。

第七條　甲ガ第四條ノ義務ヲ履行セザルトキハ乙ハ本契約ヲ解除スルコトヲ得。

契約解除ノ場合ニ於テハ甲ハ既ニ領收シタル代金額ニ對シ一日金百圓ニ付金二錢五厘ノ割合ヲ以テ利子ヲ附シ元金ト共ニ之ヲ乙ニ拂渡シ且損害賠償トシテ契約保證金トシテ同一ノ金額ヲ乙ニ辨償スベシ。

第八條　天災其他抗拒スベカラザル事變ノ爲メ甲又ハ乙ニ於テ本契約書ニ揭ゲタル義務ヲ履行スル能ハザルトキハ双方協議ノ上更ニ適當ノ處分ヲ爲スモノトス。

第九條　本契約取結ノ後引渡ノ前ニ於テ第一條ノ拂下物ガ甲ノ過失ニ因シテ毀損亡失シタルトキハ甲ハ相當ノ補償ヲ爲スベシ。

第十條　乙ハ明治二十九年宮內省告示第　號佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所拂下規程第十六條第十七條ニ依リ明治二十九年十月三十一日ニ現存スル鑛物半製鑛物及貯藏物品ヲ買受ケ且其代價ヲ拂渡スベシ。

第十一條　乙ハ左ニ揭グル事項ニ付從來生野支廳ニ屬シタル義務ヲ繼承シ明治二十九年十月三十一日ヨリ二十日以內ニ於テ關係者ニ對シ其契約ヲ取結ブベシ。

一　馬淵貯水堤及同水路ニ關スル損害補償ノ件

一　生野町ニ布設シタル事業用馬車鐵道ニ關スル負擔ノ件

一　職夫共濟組合ニ對スル補助金ノ件

第十二條　乙ハ從來佐渡支廳ガ施行シタル職夫飯米拂下方法ヲ繼續實行スルコトヲ承諾ス。

第十三條　乙ハ解傭ヲ望マザル佐渡生野兩支廳及大坂製煉所ノ諸職夫ヲ從前ノ規約ニ基キ繼續傭使スルコトヲ承諾ス。

第十四條　乙ハ本契約書第十一條第十二條第十三條ニ揭ゲルモノノ外佐渡生野兩支廳及大坂製煉所ガ事業ノ必要上第三者ト取結ビタル契約ニシテ明治二十九年十月三十一日以後ニ亙ルモノハ總テ之ヲ繼承履行スベシ。

第十五條　乙ハ明治二十九年十月三十一日ヨリ佐渡生野兩支廳及大坂製煉所內ニ於テ各廳所ノ殘務

ヲ整理スルニ適當ナル場所ヲ無報酬ニテ甲ニ貸與スベシ。

右契約ヲ證スル爲メ本書貳通ヲ作リ賣主及買主ニ於テ各壹通ヲ所持スルモノナリ。

年　月　日

賣　主
御料局長　爵　氏　名

買　主
住　所
氏　名

（丙號）

拂下代金年賦納入ニ係ル賣買契約書案

御料ニ屬スル佐渡生野兩鑛山及大坂製煉所ノ拂下ニ付賣主御料局長男爵岩村通俊ヲ甲トシ買主何某ヲ乙トシ甲乙ノ間ニ左ノ條々ヲ約定ス。

第一條　甲ハ左ニ記載スル鑛山及土地物件ヲ明治二十九年十月三十一日ノ現形ニ於テ乙ニ賣渡スベシ但土地物件及鑛區ノ面積數量ハ別冊明細書ニ從フ。

一　佐渡鑛山ニ屬スル相川百枚二鑛區及附屬油戸鑛區ノ採掘權及營造物諸器械器具用地竝ニ鑛山備林

一　生野鑛山ニ屬スル太盛金ケ瀨神兒畑明延中瀨五鑛區ノ採掘權及營造物諸器械器具用地竝ニ鑛山備林

一　大阪製煉所ニ屬スル營造物諸器械器具用地

第二條　乙ハ前條ノ鑛山及土地物件ノ代價トシテ金何圓ヲ甲ニ支拂フベシ。

第三條　乙ハ明治二十九年ヨリ明治　年マデノ何ケ年間ニ於テ左ニ定ムル所ニ從ヒ前條ノ買受代金ヲ甲ニ拂渡スベシ

金何程　明治二十九年十二月二十五日拂渡
金何程　同　三十年六月二十五日拂渡
金何程　同　年十二月二十五日拂渡
金何程　同三十一年六月二十五日拂渡
金何程　同　年十二月二十五日拂渡
……
……
……

乙ハ買受代金ニ對シ一ケ年金百圓ニ付金五圓ノ割合ヲ以テ利子ヲ附シ前項各期日毎ニ該期ニ係ル利子ヲ甲ニ拂渡スベシ。

第四條　乙ハ買受代金ノ擔保トシテ明治二十九年十月二十一日ヲ以テ買受代金ト同額ナル公債證書又ハ甲ノ承認ヲ得タル有價證券ヲ甲ニ差出スベシ但有價證券ノ價格ハ日本銀行ノ擔保價格ニ依ル

第五條　甲ハ明治二十九年十月三十一日ヲ以テ第一條ニ記載シタル目的物ヲ乙ニ引渡スベシ。

第六條　甲ハ本契約書第五條ノ期日ニ於テ擔保品ヲ領收シタルトキハ卽日契約保證金ヲ乙ニ還付スベシ。

第七條　乙ガ擔保品差出期日前ニ本契約ノ解除ヲ求ムルトキハ又ハ同期日ニ於テ擔保品ヲ差出サザルトキハ甲ハ本契約ヲ解除スルコトヲ得此場合ニ於テ乙ハ契約保證金ノ還付ヲ求ムルコトヲ得ズ

第八條　甲ガ第五條ノ義務ヲ履行セザルトキハ乙ハ本契約ヲ解除スルコトヲ得。

契約解除ノ場合ニ於テハ甲ハ其預リ置キタル擔保品ヲ乙ニ還付シ且損害賠償トシテ契約保證金ト同一ノ金額ヲ乙ニ辨償スベシ。

第九條　甲ハ本契約書第三條ノ各期日ニ於テ代金ヲ領收シタルトキハ其員數額ニ應ジタル擔保品ヲ乙ニ還付スベシ。

第十條　價ノ下落ニ因リ擔保品ノ價額ガ未納代金額ニ達セザルコトアルトキハ甲ハ乙ヲシテ增擔保ヲ供給セシムルコトヲ得此場合ニ於テ甲ハ前條ニ依リ還付スベキ擔保品ノ全部若クハ一部ヲ以テ不足額ニ充ツルコトヲ得。

第十一條　本契約書第三條ニ從ヒ代金ノ拂渡ヲ爲サヾルトキハ乙ハ代金年賦拂ノ利益ヲ失フモノトス。

前項ノ場合ニ於テ甲ハ擔保品ヲ公賣シ其買得金ヨリ公賣費用ヲ引去リタル殘額ヲ以テ未納代金ノ支拂ニ充ツルコトヲ得若シ過剩アルトキハ之ヲ乙ニ還付シ不足アルトキハ尙ホ不足額ノ支拂ヲ乙

ニ求ムルコトヲ得

第十二條　天災其他抗拒スベカラザル事變ノ爲メ甲又ハ乙ニ於テ本契約書ニ掲ゲタル義務ヲ履行スル能ハザルトキハ双方協議ノ上更ニ適當ノ處分ヲ爲スモノトス。

第十三條　本契約取結ノ後引渡ノ前ニ於テ第一條ノ拂下物ガ甲ノ過失ニ因リテ毀損亡失シタルトキハ甲ハ相當ノ補償ヲ爲スベシ。

第十四條　乙ハ明治二十九年宮内省告示第　號佐渡生野兩鑛山及大阪製煉所拂下規程第十六條第十七條ニ依リ明治二十九年十月三十一日ニ現存スル鑛物半製鑛物及貯藏物品ヲ買受ケ且其代價ヲ拂渡スベシ。

第十五條　乙ハ左ニ掲グル事項ニ付從來生野支廳ニ屬シタル義務ヲ繼承シ明治二十九年十月三十一日ヨリ二十日以内ニ於テ關係者ニ對シ其契約ヲ取結ブベシ。

一　馬淵貯水堤及同水路ニ關スル損害補償ノ件

一　生野町ニ布設シタル事業用馬車鐵道ニ關スル負擔ノ件

一　職夫共濟組合ニ對スル補助金ノ件

第十六條　乙ハ從來佐渡支廳ガ施行シタル職夫飯米拂下方法ヲ繼續實行スルコトヲ承諾ス。

第十七條　乙ハ解傭ヲ望マザル佐渡生野兩支廳及大阪製煉所ノ諸職夫ヲ從前ノ規約ニ基キ繼續傭使スルコトヲ承諾ス。

第十八條　乙ハ本契約書第十五條第十六條第十七條ニ掲グルモノノ外佐渡生野兩支廳及大阪製煉所ガ事業ノ必要上第三者ト取結ビタル契約ニシテ明治二十九年十月三十一日以後ニ亙ルモノハ總テ之ヲ繼承履行スベシ。

第十九條　乙ハ明治二十九年十月三十一日ヨリ佐渡生野兩支廳及大阪製煉所内ニ於テ各廳所ノ殘務ヲ整理スルニ適當ナル場所ヲ無報酬ニテ甲ニ貸與スベシ。

右契約ヲ證スル爲メ本書二通ヲ作リ賣主及買主ニ於テ各壹通ヲ所持スルモノナリ。

年　月　日

賣主　御料局長　爵　氏　名

買主　住所　氏名

（丁號）

拂下土地段別竝鑛區面積取調書

佐渡鑛山

一　土地段別七百四拾七町七段九畝拾八歩
　内
　用地八拾五町五段三畝貳拾八歩
　備林六百六拾貳町貳段五畝貳拾歩
一　鑛區面積三百三拾貳萬貳千三百三拾六坪
　内
　相川鑛區百六萬三千九拾八坪
　百枚鑛區五十二萬三百九拾六坪
　附屬
　油戸鑛區百七拾三萬八千八百四拾貳坪

生野鑛山

一　土地段別七百四十一町四段三畝九歩
　内
　用地三百拾町三段二畝二十二歩
　備林四百三十一町一段十七歩
　内
　太盛鑛區　二百四十八萬六千四百九十八坪五合四勺
　金ケ瀨鑛區　三百四十四萬〇七百五十五坪參合二勺
　神兒畑鑛區　二十九萬二千四百二十九坪一合二勺
　明延鑛區　三百七十九萬二千三百五十四坪三合
　中瀨鑛區　四十萬六千七百九十三坪五合四勺

大坂製煉所

一　土地坪數一萬九百十七坪

拂下土地段別竝鑛區面積取調書

以上

一金二十四萬四百七十四圓五十二錢六厘
一金十一萬七千圓
一金八萬六千百三十一圓八十錢
合計金四十四萬三千六百六圓三十二錢六厘
右引繼ノ際大藏省ヘ償還金員
金二十一萬三千七百二十四圓九錢九厘
右廿二年度中支出高合計

明治二十九年七月六日調

佐渡營業資本金
生野前同斷

生野支廳ニ於テ當今飾磨生野間運搬貨物ノ量ハ一日平均四十七噸ト見積一ケ年分（日數凡ソ三百日トス）一萬四千百噸此貨物ニ要スル運賃牛馬車ハ金四萬二千三百圓（一噸ニ付金三圓）馬車鐵道ハ金一萬五千五百十圓（一噸ニ付金一圓十錢）汽車鐵道ハ金六千三百四十五圓（一噸ニ付金四十五錢）ナリ而シテ右牛馬車運賃額ニ對スル馬車鐵道及汽車鐵道ノ減額ニ據リ各資金額ヲ算出スレバ左表ノ通但資金算出利率ハ年五朱トス。

牛馬車運賃額	馬車	鐵道運賃額	馬車	牛馬車運賃額ニ對スル減差	上記減差額ヲ年五朱ノ利益ト見据算出資金額
四二、三〇〇、〇〇〇円	馬車	一五、五一〇、〇〇〇円	馬車	二六、七九〇、〇〇〇円	五三五、八〇〇、〇〇〇円
	汽車	六、三四五、〇〇〇	汽車	三五、九五五、〇〇〇	七一九、一〇〇、〇〇〇

資本額		牛馬車運賃ニ對シ馬車汽車運賃ノ差益	資本額ニ對シ差益金ノ割合
五五、〇〇〇、〇〇〇円	馬車	二六、七九〇、〇〇〇円	四八七〇餘割
	汽車	三五、九五五、〇〇〇	六五三七餘
一〇〇、〇〇〇、〇〇〇	馬車	二六、七九〇、〇〇〇	二六七九
	汽車	三五、九五五、〇〇〇	三五九五餘
一五〇、〇〇〇、〇〇〇	馬車	二六、七九〇、〇〇〇	一七八六
	汽車	三五、九五五、〇〇〇	二三九七
二〇〇、〇〇〇、〇〇〇	馬車	二六、七九〇、〇〇〇	一三三九餘
	汽車	三五、九五五、〇〇〇	一七九七餘
二五〇、〇〇〇、〇〇〇	馬車	二六、七九〇、〇〇〇	一〇七一餘
	汽車	三五、九五五、〇〇〇	一四三八餘

小松宮殿下竝御息所獨逸皇帝及皇后へ謁見ノ事

旅中入費豫算（壹ヶ年十二ヶ月）

一金四　千　圓　宮、御息所竝從者兩人歐洲往復船賃竝雜費
一　千　　圓　從者二人給金
一　壹萬五千圓　宮、御息所竝從者二人ホテル拂竝「ホテルボーイ」心付
（此日數二百七十日ト積リ一日ノ費平均八磅）
一　千五百圓　雇入馬車料
一　五　千　圓　宮御息所竝從者二人歐洲巡廻ノ旅費竝荷物運賃
一　三　千　圓　各國ニテ饗餐費
一　三　千　圓　電信、郵便代竝臨時費
小　以

三萬二千五百圓
宮殿下御自身費
一金五　千　圓　大禮服及服類小遣共
御息所御自身費
一　二　千　圓　大禮服壹揃
一　三　千　圓　食事及踊舞用服合テ六揃
一三千五百圓　ビシチング竝旅行服代
一　千　　圓　手袋足袋其他下衣之類
一　壹萬三千圓　上ノ金剛石入飾物一揃
一　貳　千　圓　常用御見舞等ノ飾物
一　千　　圓　御息所小遣
小　以
貳萬二千五百圓
三口ノ
六萬三千圓

小松宮殿下竝御息所獨逸皇帝及皇后へ謁見ノ事

明治廿年一月十三日小松宮殿下竝御息所獨逸國伯林府ニ於テ皇帝皇后兩陛下ニ謁見竝御陪食ノ概況

本日午後第四時四十五分殿下竝御息所及隨員ノ迎トシテ皇帝陛下ヨリ二頭引裝儀馬車三輛ヲ殿下ノ旅館「カイザホフ」ニ送ラル、同時式部官「ロームベルク」氏ヲ殿下ノ迎員トシテ差遣ハサル、殿下ハ三宮別當夫婦立見中佐坊城大尉香川志保及姉小路交際官ヲ連レ正五時皇帝陛下ノ宮殿ニ着、西郷海軍大臣小松原代理公使モ同時參內ス。侍從二名階下ニ侍立階上ニハ宮內長官、式部長官及侍中武官長侍立ス、宮內長官等殿下竝御息所ヲ控所ニ誘引ス、宮中女官長始メ女官此所ニテ御息所ヲ待受タリ。殿下ハ姉小路交際官ヲ隨ヘ皇帝陛下ノ謁見所ニ御息所ハ三宮別當妻ヲ連レ皇后陛下ノ謁見所ニ誘導セラル、隨員一同控所ニ待ツ暫クアツテ西郷大臣始メ隨員一同ヘ拜謁被仰付夫ヨリ殿下ハ皇后陛下ノ御手ヲ引キ皇帝陛下ハ御息所ノ手ヲ取ラセラレ、食堂ニ進ミ給ヒ西郷大臣及隨員一同ヘ御陪食被仰付。

御陪食終ルヤ兩陛下別室ニテ殿下御息所及隨員一同ヘ御話シアリ此際獨逸國宮內長官始メ侍中武官長各省大臣ヲ一々殿下ニ御紹介アリ、暫クアツテ皇后陛下殿下竝御息所ニ暇ヲ告ゲ給ヒ入御、此時皇帝陛下御息所ノ手ヲ取リ階段ノ上迄送リ告別シ給フ宮中ヨリ殿下ノ旅館ニ歸ル式ハ參內ノ時ノ如シ。

小松宮殿下竝御息所獨逸皇帝及皇后陛下ヘ謁見ノ節御對話ノ大要

宮殿下ノ通辯ハ姉小路交際官御息所ノ通辯ハ三宮別當妻相勤メ候

皇帝陛下　當所ニ於テ殿下ニ御對顏スルハ朕欣喜ニ堪ヘズ

殿下　當國ヘ到着スルヤ否早速御引受下サレ候段拜謝ニ堪ヘズ我　天皇陛下余ガ貴皇帝陛下ニ拜謁スルノ日我　天皇陛下ノ常ニ貴皇帝陛下ヲ敬慕シ其萬歲ヲ祚ルノ意ヲ致セヨトノ旨ヲ命ゼラレタリ

陛下　辱ク存ジ候御序ニ我同感ノ意ヲ貴　皇帝陛下ニ奏上アランコトヲ請フ伏見宮殿下ハ現今何軍隊ニ於テ如何樣ノ勤務ヲ爲サレ候哉

殿下　伏見宮ハ現今參謀本部ニ出仕致シ居候得共當節ニテハ我　皇帝陛下ノ近衞聯隊長ヲ命ゼラレシナラント存候

陛下　殿下ハ英國ニ御滯在ノ由承知セシガ幾何日程同國ニ御滯留被成候哉

殿下　英國ニハ三週間程滯在致居候其際ハ同國皇帝陛下ノ御懇遇ヲ受候尤モ同國ニハ以前二ケ年程滯留致シ居候

余此度貴國ニ罷出候ハ陛下ノ軍隊ヲ拜見シ教官ニ依テ陛下ノ軍事ヲ承リ度目的ニ候再ビ當府ニ參リ候節ハ何卒余ガ志願相叶候樣御許シアランコトヲ希望致シ候

陛下　承知致候委細其筋ノ者へ申聞ケ置キ可申候

此際殿下皇帝陛下ノ所ヲ退キ皇后陛下ノ謁見所ニ御出向アリ皇后陛下ニ拜謁皇帝陛下モ續テ同所ニ臨御御息所へ御話シナサレ候

皇后陛下　殿下ノ當國ニ御枉駕相成候義欣然ニ堪ヘズ

殿下　本日陛下ニ拜謁スルノ名譽ヲ與ヘラレ候段難有仕合候

皇后陛下　近來日本國ト獨逸國トノ關係益々親密ニ相成啻ニ官吏ノミナラズ又學生ノ如キモ多ク當國ニ留學致シ居候段甚ダ欣喜スル候

殿下　元來貴國人ハ第一懇篤ヲ以テ我邦人ニ對遇アルヨリ我官吏ハ素ヨリ書生モ概ネ貴國ニ遊學歸國ノ節ハ好結果ヲ携帶シ我國ノ利益ヲ爲ス事多シ要スルニ貴國ノ文物我邦人ノ標範タルニ由ル義ト存居候

皇后陛下　伏見宮殿下ハ現今如何起居ナサレ候哉

殿下　難有伏見宮ハ至テ壯健ニ罷在前年貴國ニ於テ厚キ御對遇ヲ受ケシコト時々申出シ喜居候

皇后陛下　先年「ハインリヒ」ノ日本ニ罷出候節ハ諸事鄭重ノ御待遇ヲ受感謝ニ堪ヘズ

殿下　我朝廷ニ於テモ當時「ハインリヒ」殿下ノ御來遊下サレ候事ハ欣喜ニ堪ヘザル所ニコレアリ候又余モ當時同殿下ニ拜顏御懇命ヲ受ケ候

皇后陛下小松宮御息所御對話

御息所皇后陛下ノ謁見所ニ入ルトキ皇后陛下ハ椅子ニ掛ケ給ヒシガ御息所ヲ見テ椅子ヨリ起チ玉ヒ握手アリ而テ皇后陛下再ビ椅子ニヨリ給フ又御息所ニモ椅子ヲ玉フ三宮別當妻侍立通辭致ス

皇后陛下　本日御息所ニ御對面申候事殊欣喜ニ堪ヘズ

右御語ハ再三繰反シ仰セラレ候

御息所　陛下ニ拜謁スルノ光榮ヲ得ル事感喜ニ堪ヘズ陛下御多用ノ際早速御引受下サレ候段深有難タク存候將又我　皇后陛下ヨリ陛下ニ宜シク御挨拶可申上旨命ゼラレタリ

皇后陛下　敬承致候次便貴皇后陛下へ御交通ノ節殊ヨリ宜シク申上候旨御申上下サレタク候

御息所　謹承仕候

皇后陛下　長途ノ御旅行別段御疲レハナカリシヤ英國ヨリ當府ヘ御出ノ事ト存候

御息所　左樣ニ御座候

皇后陛下　英國皇帝陛下ニ御對面アリシヤ「ウヰンゾー」宮城ニ御出向ノ事ヲ承リ候

御息所　「ウヰンゾー」宮城ニ罷出皇帝陛下ニ相逢致候

皇后陛下　貴皇后陛下ニハ不斷朕ノ事ヲ御親切ニ御尋下サレ時々貴重ノ品御惠贈ニ預リ候先年御贈リ下サレタル小サキ犬ハ不慥ニモ死去致候

御息所　陛下ノ御意我皇后陛下ニ申上ベク候

私事當度初テ歐洲ニ罷出候ニ付宮中式上ノ事共更ニ心得不申萬事陛下ノ御指揮相伺度候

皇后陛下　禮シ給ヒ決テ御心配ナキ樣致度候

日本ハ何時頃御出立初テ米國通リ歐洲ヘ御着アリシヤ

御息所　昨年十月二日本國出帆米國ヲ經テ英國ニ渡リ夫ヨリ巴利府ニ出貴國ヘ到着仕候

皇后陛下　朕ハ老年(七十六歲)ニ及ビ人ニ助ケラレ起居致シ候

傍ラヨリ御召使ノ人來リ皇后陛下ヲ助ケ椅子ヨリ起セ候此時小松宮殿下御對面所ニ進入是ヨリ

皇后陛下ハ殿下ト御話シ始ム續テ皇帝陛下臨御陛下御息所ト御對話

皇帝陛下　當地ニテ御對面申候事誠ニ欣賀ニ堪ヘズ

御息所　陛下ニ拜謁スルノ名譽ヲ賜フアリ難仕合候

陛下　當所ハ至テ寒威嚴シク御息所ニハ如何御感ジアルヤ

御息所　貴國ハ餘程ノ寒氣ナル赴キ承リ居候得共建築堅固ニシテ防寒ノ備ヘ行屆キ居候故更ニ寒氣ヲ覺ヘ不申候

陛下　何ケ月斗リ當國ニ御滯在ナサレ候哉

御息所　當度ハ凡三週間滯留ノ心得ニ御座候

陛下　微笑シ給ヒ夫レハ三ケ月ノ御間違ニハナキヤ

食事ノ節寬々御話シ可申候

此時皇帝皇后兩陛下入御

同獨皇太子及妃ニ御對面ノ事

明治二十年一月十六日小松宮殿下竝御息所獨逸國伯林府ニ於テ皇太子及妃兩殿下ニ御對面ノ概況

本日午前十時四十五分小松宮殿下竝御息所及隨員ノ迎トシテ太子殿下ヨリ二頭引裝儀馬車ヲ旅館「カイザホフ」ニ送ラル、宮殿下竝御息所ハ三宮別當夫婦立見中佐坊城大尉香川志保及姉小路交際官ヲ隨ヘ正十一時皇太子殿下ノ宮殿ニ着、西郷海軍大臣、小松原代理公使モ同時參內ス侍中武官階下ニ侍立、階上ニハ皇太子殿下ヲ始メ同殿下ノ別當等侍立太子殿下自ラ御息所ノ手ヲ取リ對面所ニ誘導シ給フ。三宮別當妻ハ御息所ニ姉小路交際官ハ宮殿下ニ隨ヒ對面所ニ行ク、此際隨員一同ハ控所ニ待ツ暫クアツテ西郷大臣始メ隨員一同ヘ拜謁被仰付、皇太子妃殿下御息所ニ暇ヲ告ゲ給フヤ、太子殿下御息所ノ手ヲ取階段迄送リ告別シ給フ、此際太子殿下隨員一同ヘ握手ノ禮ヲ賜フ宮中ヨリ殿下ノ旅館ニ歸ヘル式ハ參殿ノ時ニ同ジ。

小松宮殿下竝御息所獨逸皇太子及妃兩殿下ニ御對面ノ節御話ノ大要

宮殿下ノ通辯ハ姉小路交際官御息所ノ通辯ハ三宮別當妻相勤メ候

此際皇太子及妃殿下御對面所ニ侍立

皇太子妃殿下　殿下今般當國ニ御出ナサレ候義欣喜ニ堪ヘズ

先年「ハインリヒ」ノ貴國ニ罷出候節ハ御親切ノ御待遇相受候段感謝致シ候

宮殿下　殿下ニ拜顏スルノ名譽ヲ賜リ候段難有仕合候「ハインリヒ」殿下日本ヘ御來遊ノ節ハ我朝廷ニ於テ可成旅中ノ御疲勞御慰メ致度ト心配致シ候得共我國ハ貴國ニ異リ諸事不便ノ事多ク如何ニ御感ジ相成候哉杯ト時々殿下ノ御噂申居候事ニ候

皇太子殿下　當國ハ貴國ヨリ寒氣餘程嚴烈ナリ格別時候ノ御障リモ無之候哉

殿下　難有至極壯健ニ罷在申候寒氣モ豫想外ニテ堪ヘ難キ程嚴烈ニハ覺ヘ不申候

皇太子殿下　併シ殿下ハ嚴烈ノ寒風ニハ御慣レ無之事ト存候御外出ノ節ハ御用心肝要ニ存候

殿下　殿下ノ御心付誠ニアリ難ク存候

皇太子妃殿下　殿下ハ當府ヲ如何ニ御感ジアルヤ

殿下　諸事御懇切ニ御接遇下サレ誠ニ幸福ノ至ト存候

皇太子妃殿下　過日「ポツダム」ニ御出ノ節ハ如何ニ御感ジナサレ候哉同所ハ冬期ハ寂寥ニ候ヘ共夏期ハ風色宜敷予モ夏期ハ大抵同所ニ住居致候又殿下ハ「ポツダム」ニテ孫共（ウヰルヘルム殿下ノ皇子）ヲ御覽相成候哉

殿下　余ハ再ビ夏期ニ際シ當府ニ參リ候間其節ハ同所ヘ參リ夏期ノ風色拜觀イタスベキ覺悟ニ候　又過日同所ヘ罷出候節御孫子ニハ御逢申サズ候

皇太子妃殿下　殿下ハ演劇ヲ御覽相成候哉

殿下　頃日「ヲペラ」ニ參リ候日本ニモ演劇場コレアリ候ヘ共當府ノ如キ完全ナルモノナシ故ニ歐洲ニ於ケルガ如ク觀劇ノ樂ヲ受ル事ヲ得申サズ候

皇太子妃殿下　昨年日本村落ノ觀覽會御座候節予モ參觀イタシ候其節小演劇ニ類スル事ヲ見受候其演劇ノ赴向ハ分ラザレドモ役者ハ隨分器用ニ存ゼラレ候且當時當ニ役者ノミナラズ諸種ノ工藝ニ從事セルモノヲ見タリ其職人等モ甚ダ技藝アル樣相見ヘ申候

殿下　余モ龍動府ニ於テ該觀覽會アル事承知致シ居候ヘ共終ニ參觀致サズ候承ルニ其職人等ハ日本ニ於テ下等ノ人種職工モ善良ナル者ニハ候ハズ且着服モ我邦一般ノ風俗トハ大ヒニ相違シ居候由ニ御座候

皇太子妃殿下　併シ日本ノ品物ハ多ク歐洲ヘ相渡リ居候ヘ共其物品ヲ製造スル職人輩ノ樣ヲ見タル事ハ始メテナレバ御說ノ如ク上等ノ職人ニハ是レナキモ歐洲人ノ目ニハ甚ダ珍敷存候貴國ニ於テ別シテ勝レタルモノハ織物ニコレアリ候此處ニ相用候「ゴブレン」（縫取ノ如キモノ）ハ其繪ハ佛國ノ有名ナル畫工ノ手ニ成リ其織物ハ百年程前和蘭國ニ於テ製造セシモノニ候

殿下　甚ダ美敷拜見致候我國ニテハケ樣ノ織物ハ出來不申候

先頃當府ニ於テ「ミカド」ト稱スル演劇ヲ執行セシ由承リ候殿下ニハ御覽ナサレ候哉

皇太子妃殿下　予モ參觀シ甚ダ面白ク存候併シ日本人ニハ氣ニ入ラザル樣傳承セリ殿下ハ如何御考ナサレ候哉

殿下　該演劇ハ面白ク觀覽致候日本人中ニ該演劇ヲ面白ク思ハヌモノアルカ否ハ知ラズト雖モ夫レハ畢竟歐洲人ノ趣向ヲ以テ歐洲人ノ仕組タル小滑稽演劇ニ有之唯衣服及地名等ヲ假リテ一種ノ演劇ヲ爲シ見物人ノ眼ヲ喜バシムルニ過ギズ是レハ往々類例アルコトニテ今回「ミカド」ノ演劇ニハ限ラザル事ニ候尤右役者中ニテ女ノ服ハ大抵日本ノ服ニ候ヘ共男ノ衣服ハ半ハ支那人ノ衣服モ有之樣相見ヘ候而シテ右等ノ衣服ハ日本ノ宮中ナドニテハ着用スルモノニ非ス乍去要スルニ是レハ歐洲人ノ想像ヲ以テ作リタルモノニシテ觀覽人モ右演劇ノ有樣ヲ以テ眞ニ日本ノ宮中ノ風俗ト見認メル人モアルマジク存候故演劇トシテ見ルモノハ日本人ト雖モ決シテ面白ク

思ハヌ譯ハ無之事ニ御座候該演劇ノ役者ハ甚ダ藝能ニ達シ且音樂モ甚ダ善シ是レヲ以テ予ハ誠ニ面白ク觀覽イタシ候

皇太子妃殿下　勿論該演劇ヲ以眞ニ日本ノ宮中ノ狀況ヲ顯スモノトシテ觀覽スルモノハナカルベシ其役者ノ技藝ニ達シ且音樂ノ善良ナルヲ以甚ダ興ヲ極メ申候

皇太子妃殿下　御息所ニ御對顏致候事欣喜ニ堪ヘズ

長途ノ御旅行格段御疲勞ナカリシヤ

御息所　難有更ニ疲勞ハ仕ラズ唯殿下ノ御國ニ來着スル事ノミ相樂ミ旅行致候

皇太子妃殿下　過日ハ「ウキングー」宮城ニ御出向余ガ母（英國皇帝陛下）ニ御面會アリシ赴承リ候

御息所　御命ノ如ク英國皇帝陛下ニ拜謁致候同國滯留中ハ陛下ヨリ厚キ御對遇ヲ蒙リ候何卒殿下御文通ノ御序ニ余ガ感喜ノ意ヲ御奏上被下度希望致シ候

皇太子殿下　御息所ニハ日本ニテ余ガ子供（「ハインリヒ」殿下）ヲ御承知ナラント存ス

御息所　日本ニテ御面會致シ候當時「ハインリヒ」殿下ハ何國ニ御住居ナサレ候哉

皇太子殿下　子供ハ「キール」港ニ住居致居候

御息所「ハインリヒ」殿下ニハ當地滯留中何卒御面會申候期ヲ得度存候

皇太子殿下　二三日ノ内ニ當府ヘ參リ候久シ振御面會致シ必ズ喜ビ可申候

又來ル廿七日（大式日）ニハ母（皇后陛下）ノ希望ニヨリ日來古有ノ大禮服御着用下サルトノ事承リ候今ヨリ夫レヲ拜見センコト皆々相樂ミ居候

御息所　左樣仰ニテハ誠ニ恐縮致候余ハ日本服ヲ着スルコトハ好ミ不申乍去皇后陛下ノ御命令ナレバ必ズ違背ハ致サズ候

依仁親王殿下ヨリノ御報告書

（第一）　明治廿六年九月

拜啓兩陛下益御機嫌克被遊御座奉恭祝候。依仁本邦出發ノ際
陛下ノ御眷遇ヲ垂レサセ給ヘルハ依仁ガ深ク拜謝シ奉ル所ニ候。幸ニシテ海上風波靜穩、去十五日ヲ以テ米國加奈陀洲ヴアンクヴアー港ニ無事到著仕候ニ付、曩ニ電報ヲ以テ　上聞ニ達シ候。ヴアンクーヴアーヨリハ直チニ米國チカゴヲ經テ華盛頓ニ向フノ豫定ニ有之候處、近來英國ニ於テハ太平洋ノ軍備ニ着眼シ、鋭意之ガ計畫ヲ爲スト聞キ、昨十七日ヴアンクーヴアーヲ發シ路ヲヴイクトリア府ニ取リ、今十八日英國太平洋艦隊ノ屯集所タルエスクイマルト軍港ヲ視察致候得バ其概況ヲ右ニ略陳仕候。

エスクイマルト港ハヴイクトリヤ府ヲ距ル三哩程馬車ヲ驅ル、三十分同港ニ達ス。太平洋艦隊司令長官ステイフエンソンハ傳令使ヲシテ端艇ヲ以テ迎ヘシム。直チニ之ニ乘ジ旗艦ロヤル、アーサー號ニ至ル。司令長官艦長以下將校甲板ニ迎フ。海兵ハ正裝脫劍敬禮ヲ行ヒ、樂隊ハ奏樂祝意ヲ表ス。司令長官及艦長ノ先導ニ依リ艦内ヲ巡視シ、更ニ造船所倉庫等ヲ巡閱セリ其旗艦ヲ辭シ端艇ニ

移ルヤ二十一發ノ祝砲ヲ放チ敬意ヲ表シタリ。

今同港ヲ觀察スルニ、海水深ク陸地ニ灣入シ、港廣ク水深ク以テ、艦隊ヲ碇泊スルニ足リ、三方ヲ圍メル丘陵ハ以テ波濤ヲ凌グベク、以テ敵ノ偵察ヲ妨グルニ足ル。實ニ太平洋北西岸ニ於ケル樞要屈竟ノ軍港ト謂フ可シ。現今ニ在リテハ造船所船渠倉庫ノ規模狹小ニシテ未ダ盛大ト稱スルニ足ラズト雖ドモ、附近ノ地ニ於テ大ナル石炭田ヲ發見シタレバ、石炭ノ供給ハ缺乏スル所ナカルベシ。英國ニ於テ熱心設備ニ着手スルニ於テハ將來太平洋ニ於ケルノ勢力ノ如何ハ以テ察知シ得ベシ。布哇及米國南北海岸ヲ巡航スル英國太平洋艦隊ハ毎歳五月ヨリ十月ニ至ルノ間ハ皆此港ニ至ルト、現ニ旗艦ノ外軍艦三隻ノ碇泊スルヲ目擊シタリ。

先ハ御禮旁經歷ノ要領不取敢上申仕候餘ハ目擊スル所ニ依リ隨時上聞ニ達スベク候。　敬具

明治二十六年八月十八日

依　仁

上

（第二）

謹啓　兩陛下益御機嫌克被遊坐奉恭祝候。陳者依仁去十八日ヱスクイマルト軍港視察ノ後、翌十

九日ヲ以テヴイクトリヤ府ヲ發シ、ヴアンクーヴアーヨリ汽車ニテ落機山ヲ横ギリ、漠々タル高原ヲ通過シ、ウイニペグ、セントポールヲ經テ、去廿六日シカゴ市ニ無事到着仕候間匆々博覽會ヲ巡覽仕候。米國博覽會ノ規模廣大ナルハ夙ニ傳承セシ所ニ有之候得共、今親シク之ヲ目擊スルニ及ンデハ實ニ其空前ノ盛擧ナルヲ認メ候。當該官吏ノ報告ニ依レバシカゴ市ジヤクソン公園内ニ於ケル會場ノ面積ハ六百三十三エークル（我凡二百五十七町歩）ニシテ、米國博覽會事務局ニ於テ各參同國ノ物品陳列ノ爲メ建築シタル各館ノ面積ハ殆ンド二百エークル（我二十四萬三千六百坪）内五十エークル（我六萬九百坪）ハ樓上ニ屬シ四十エークル（我四萬八千七百廿坪）ハ動物館トシ其他各參同國及合衆各州ノ特別陳列館亦甚ダ多ク有之候。今各參同國ノ爲メ築造シタル各稱ヲ列擧スレバ

農業館　園藝館　動物館　漁業館　礦業館
機械館　運輸館　工藝及心藝館　電氣館　美術館
人類學及衞生館　山林館　製革館　婦人館

以上十四館ヲ瞥見スルニ、各國皆其天産ト人造トヲ論ゼズ固有ノ特産又ハ獨特ノ妙技ニ加フルニ資金ヲ惜マズ精神ヲ凝シ、以テ完成ヲ誇リ優美ヲ競ヒ其名聲ヲ宇内ニ博セント欲スルモノナレバ、物品ノ富饒ナル裝飾ノ華麗ナル意想外ニ出ルモノ少カラズ。故ニ觀者ノ眼中ニ珍奇壯快ナル觀ヲ

「附箋」本節ノミ海軍ニ干係ヲ有セズ

映射スルニ止マラズ、啓蒙發明ノ利子ヲ與フル疑フベキニアラズ。殊ニ各專門家當業者ノ仔細ニ之ヲ觀察スルニ於テハ其益スル所蓋シ鮮少ニアラザルベシ。之ヲ通覽スル僅々三日間ヲ以テミタレバ、各館ノ廣大ナル品種ノ夥多ナル視線ニ入リシモノ僅カニ其二三ニ過ギズ。爲ニ精細詳察ニ上申スル能ハザルハ依仁ガ深ク遺憾トスル所ニ有之候得共、本邦出品物ニ就キ其一班ヲ陳シ併セテ所感ヲ具申仕候。

本邦出品物中最モ品種ノ多ク且價値アルモノハ工藝及心藝館ニアリ。次ハ農業館漁業館山林館トス。美術館ニアリテハ歐米美術ノ趣味好尚ト大ニ異ナルニ關セズ、嶄然トシテ一方ニ頭角ヲ露ハシ、敢テ一歩ヲ讓ラザルハ獨リ本邦ノ爲メノミナラズ東洋美術ノ爲メ賀スベキノ一事トス。

モノニシテ、其陳列亦宜シキヲ得タレバ、外人ノ之ヲ歎稱スルモ宜ナル哉。亞細亞洲中ニ於テ本館ニ出品セルモノハ唯本邦アルノミ。歐米以外ノ邦國ニ於テハ二三保護國ニ過ギズ。亦以テ我帝國ノ名譽ト云フ可シ。

工藝及心藝館内本邦ノ出品物ハ皆固有ノ建築法ヲ用ヒ、其周圍ノ飾箱亦國風ニ擬セルヲ以テ、萬國概ネ一樣ノ構造中ニ於テ一種無類ノ觀ヲ表彰シタリ。爲ニ觀者ノ注意ヲ促ス極メテ多シ。加フルニ列品亦本邦特種ノ製品ニシテ、出品者ハ皆多年博覽會ノ爲メ意匠ヲ凝ラシ製作シタルモノナ

レバ、全工陶磁器蒔繪七寶彫刻織物刺繍等美術ノ應用ニ係ルモノノ聲價甚高シ又心藝ニ屬スル教育及學術的ノ製品製作物モ其採集方法事蹟共ニ高尚優美整然トシテ秩序アルヲ以テ、歐米人ヲシテ本邦文明ノ程度斯ノ如ク夫レ進歩シタルモノナルカヲ疑ハシメタルガ如シ。實ニ本館ハ我帝國ヲ世界ニ紹介シ我文明ヲ宇内ニ普知セシムルモノト謂ハザル可カラズ。

農業館内本邦ノ農産物ハ採集網羅シテ一モ餘ス所ナシ。殊ニ生絲茶ノ如キハ其評價最モ宜シケレバ、將來一層輸出ヲ增加スベキ論ヲ俟タズ、米、楮、雁皮、苧、麻等ノ如キモ他日輸出ノ料ニ充テ得ベキガ如シ。

漁業館内本邦ノ出品ハ僅ニ、從來ノ漁原及水產製造法ニ改良ヲ施シタルモノニ過ギズト雖ドモ、漁舟漁具等ノ如キハ地形海岸ノ異ナルニ從ヒ、自ラ其構造製作ヲ別ニスルモノナレバ、概シテ迂ナリト斷言セザル可ラズ。然レドモ本邦ノ水產物タル無盡藏ニシテ種善ニ質良ナリ、將來世界ノ需用品タルヤ期シテ待ツベケレバ、漸次之ヲ改良シテ他日ノ供給ヲ計ラザル可ラズ。

山林館内本邦ノ出品ハ概ネ山林局ノ採集ニ係リ實用的及學術的ノ調査ニ屬セリ。

運輸館内本邦ノ出品ハ海軍省及鐵道廳ノ所管ニシテ維新以來長足ノ進歩ヲ示スニ足レリ。

礦業館及電氣館内本邦ノ出品ニシテ礦業ニ屬スルモノハ礦山局ノ出品ニシテ、電氣ニ屬スルモノハ概ネ愛知岐阜震災ニ關スル學術上ノ調査ニ係レリ。

人類學及衞生館内本邦ノ出品及製革館内本邦ノ出品ハ一ハ心藝館一ハ工藝館ヨリ分割シタルモノナレバ別ニ贅セズ。

園藝館内本邦ノ出品セシ植物ノ種類及築山ノ方法ハ總テ歐米ニ異ナルヲ以テ殊ニ偉觀トシテ目セラル。其意匠ノ秀逸閑雅ナル嘖々人口ニ上レリ。

婦人館内ノ出品ハ各國皆婦人協會ノ計畫ニ出デシガ如シ。本邦ノ出品ハ　皇后陛下ノ恩賜ニ賴リテ組織シタル日本婦人會ノ企圖ニ成レルヲ以テ、獨リ其出品ノ高尚ナルノミナラズ、意匠考按優且美ニシテ裝飾陳列本邦固有ノ風趣ヲ存シ、歐米婦人ヲシテ本邦婦人ノ淑德ヲ欽羨艷稱セシム。特ニ　皇后陛下ガ下シ賜ヘル　御親筆ハ本邦地區ニ於テ一層ノ光輝ヲ放テリ。是レ實ニ英女皇ノ親筆及伊后ノ「レース」ト共ニ館中ノ三絶ト稱シ名聲籍甚ナリ。爲ニ本邦出品ヲシテ上位ヲ占メシメントス。畢竟スルニ御恩賜御奬勵ノ餘澤トシテ本邦文化ノ程度婦人ノ地位ヲ外人ニ誇示スルヲ得タルハ

皇后陛下ノ賜ト謂フ可シ。

以上各館ノ外猶本邦ノ出品竝販賣ノ爲メ企圖セルモノアリ、卽チ鳳凰館ハ同場中風景ニ富メルウーデッド島茂樹ノ間ニアリ、高尚韻致アル構造優美風雅ナル裝飾ハ、各國巨大ノ堂宇ノ一樣ニシテ變化ナキ建築物ニ映ジ、衆人ノ視線ヲ一方ニ吸收スルニ似タリ。殊ニ其建築タルヤ宇治鳳凰堂ノ

様式ニ法トリ藤原足利徳川三時代ニ模シタルモノナレバ、二千五百年間經過セル文化ノ程度粲然トシテ光彩ヲ放チ、進歩ノ事蹟井然トシテ秩序ヲ存ス。外人ノ之ヲ見ル者ヲシテ轉タ我國體ヲ敬慕歎稱措ク能ハザラシムルヲ以テ我國威ヲ觀シ我貿易ヲシテ隆昌ナラシムル媒介ト爲ス可シ。曩ニ茶店亦國風ニ依リ建築シ、體裁樣式固有ノ方法ニ準ズ。外人ノ來リ試ムルモノ曰ニ幾千、甲唱乙和皆其優美ナルヲ稱ス。之ヲ觀レバ後來日本茶ノ好評ハ日ニ月ニ增進シ輸出額ノ過去ニ倍蓰スベキヲ憾ム。然レドモ美術及工藝館ニ於テハ佛國實ニ之ガ牛角ヲ取リ、獨英之ニ亞グ、其他ハ帝王ノ御物ヲ以テ僅ニ之ヲ補フニ過ギズ。他ノ各館ニ於テハ多少邦國ニ依リ得意トスル所異ナリト雖ドモ、先ヅ指ヲ佛獨英墺ニ屈セザルヲ得ズ。之ヲ洲別トセバ亞細亞洲ニ於テハ第一本邦、次ニ土耳其、歐羅巴洲ニ於テハ「ブラジル」北米ニ於テハ墨其哥其他ハ規模

狹小ニシテ論ズルニ足ラズ。

婦人館ノ成立ハ實ニ此博覽會ヲ以テ嚆矢トス館ノ經營及一切ノ事務總テ合衆國婦人ノ任ニ當リタルモノニシテ、事務處辨ノ方法秩序整然トシテ亂レズ、出品物ノ撰擇亦其鑒識ヲ謬ラズ、今ヤ又審査ノ事務ヲ擔當スト、婦人事業ノ發達亦驚クニ堪ヘタリ。婦人館ノ傍ニアル小兒館ハ觀覽者ノ携帶セル嬰兒及各館內ヲ步行スルニ堪ヘザル兒女ヲ撫育看護スル場所ニシテ、此擧タル、博覽會經費既定以後ニ起リタレバ、費途ノ給スベキナキヲ以テ、婦人事務員ノ主唱トナリ、東奔西走或ハ義捐金ヲ募リ或ハ慈善會ヲ起シ、拮据經營遂ニ其目的ヲ達シタルナリト、是亦未曾有ノ新方按ニシテ稱讃スベキ事業トス。

萬國會議ハ博覽會ニ附帶シテ開設セラレタリ。其主眼タルヤ文物制度宗教教育農工商等、苟モ社會組織ニ關スル萬般ノ學術技藝ニ關シ、之ガ眞理探究學理應用ノ目的ニ出タルモノニシテ、各國當局者ノ智識經驗ヲ闘スノ會合アリ、蓋シ世界博覽會ハ有形上萬國競爭ニシテ、萬國會議ハ無形的萬國競爭ト謂フ可シ。亦其會合ノ最モ貴重ニシテ輕侮スベカラズ。且其結果ノ如何ニ注意セザル可ラザルヲ覺ユ。

顧フニ萬國博覽會ハ其主旨殖産興業ニアリト雖ドモ、之ガ出陳ニ關スル準備ハ邦國文化ノ程度如何ニ胚胎シ、國力消長ノ實想ヲ暴露スルモノニシテ、無言不語ノ間ニ文野貧富ヲ比較シ尊卑強弱

ノ表示スルニ依リ、博覽會ナルモノハ國際上至妙ノ機關ト謂ハザル可ラズ。世人之ヲ評シテ平和ノ戰爭ト言フモ誣言ニアラザルナリ。之ニ依テ之ヲ觀レバ物品其物ニ就テ優劣精粗ヲ論評スルハ抑モ末ニシテ、之ガ經營準備ニ先チ國力ヲ養成シ富強ヲ計畫スルノ大基本ニ向ヒテ勤メザル可ラズ。之レ經倫ノ大綱ナラン乎。幸ニシテ我當該官吏及當業者ノ來リテ此博覽會ヲ實見シタルモノ能ク此意ヲ體認シ既往ヲ觀テ將來ヲ察シ宜ク國家ノ爲メ盡ス所アランヲ望ムナリ。

右視察ノ大要ニ有之候間不取敢上聞ニ達シ候。是ヨリハウエストポイント陸軍大學校ヲ視察シ紐育ニ向フノ豫定ニ御座候敬具。

明治二十六年八月三十一日

上

依仁

（第三）

謹啓　兩陛下益御機嫌克被遊御坐奉恐悦候。陳者依仁シカゴ博覽會巡覽之末去月三十日ヲ以テ同地出發本月五日ウエストポイント陸軍兵學校ヲ巡視シ、紐育ヲ經テ同七日華盛頓府ニ着シ、同九日陸海軍省及華盛頓造兵廠巡視大統領ニ面會（當國ハ共和國ニ候ヘバ表面上ノ儀式相避ケ候方都合ト存ジ微行ノ處ニテ面會仕候）同十一日同府ヲ發シアナポリス海軍兵學校ヲ巡視シ、費拉特費亞ニ着シ、翌十二日クラムプ造船所「ミツドウエール」製鋼所等ヲ巡視シ、十四日同地出發沒士頓ニ着シ、同所海軍造船所ヲ巡視シ、十六日ニユーポート水雷要港ニ立寄リ、同所一覽ノ上紐育ニ歸着、十九日ヲ以テ「ブルークリン」海軍造船廠二十日ヲ以テ「ペセレヘム」製鐵所巡視仕候ニ付左ニ視察ノ梗概ヲ略陳シ上覽ニ供シ候。

米國海軍省組織權限等ノ詳細ナルモノハ別ニ海軍省ニ尚藏セルモノアレバ玆ニハ唯其大體上ノ方針及巡視ノ場所ニ關スルモノヲ記述仕候。

米國ニ於テ陸軍ハ專ラ國內ノコトヲ掌リ、海軍ハ海外ニ關スルコトヲ掌ルノ有樣ナレバ、陸軍省ハ最モ內務省ト親密ノ關係ヲ有シ、海軍省ハ大ニ外務省ト密接ノ連絡ヲ有スルモノノ如シ。又陸軍ハ單純ナル軍事事務ト視做サレ、其大元帥ハ大統領タリ。

然レドモ海軍ニ至テハ軍事事務タルニ於テハ敢テ異ナルナシト雖ドモ、全ク海軍長官ノ指揮監督ニ屬スルモノニシテ、大統領ハ海軍大元帥ノ稱アラズ、是レ昔時ノ慣習ニ依レルモノト謂フ可シ。

海軍事務取扱ノ方法ハ實際上統治權ノ順序ニ依ラザルモノ多シ。假令ヘバ艦隊司令長官又ハ鎭守府司令長官ノ某事件ニ就テ海軍長官ノ許可ヲ得ントスルニ當リ、之ヲ關係ノ海軍省局長ニ通ジ、局長之ニ同意スルニ於テハ之ヲ海軍長官ニ上申シ、許可ヲ得ルノ類ナリ。然レドモ司令長官ノ報

告スル書類ハ直ニ之ヲ海軍長官ニ呈出セリ。

米國軍事ノ方針ニシテ十數年以前ノモノ及現今ノモノヲ略記センニ從前ノ分ハ左ノ如シ。

陸軍……米國人ハ愛國心ニ富メリ故ニ必要ノ場合ニ於テハ大陸軍ヲ招集スル實ニ容易ナリ。而シテ缺乏ヲ感ズルモノハ唯此大陸軍各員ニ配布供給スベキ武器彈藥ナリ。

右ノ主意ナルヲ以テ米國各所適宜位置ニ於テ造兵廠ヲ創立シ一朝有事ノ際ニ於テ夥多ノ武器ヲ兵員ニ配布スルニ不足ナカラシメタリ。

海軍……米國人民ハ愛國心ニ富メリ。故ニ必要ノ場合ニ於テハ船員ヲ招集シ得ルコト實ニ容易ナリ。又軍艦ハ經驗ニ依レバ二ケ月以内ニ六十隻餘ヲ得ルコト難キニアラズ、唯缺乏スルモノハ良好ノ將校ヲ得ルニアリ。

右ノ主意ナルヲ以テ米國海軍ハ大ニ兵學校教育ノ程度ヲ高尚ニシ、充分ナル士官教育ヲ與ヘ假令卒業後直ニ豫備ニ編入スルノコトアルモ兎ニ角全國ニ良將校ノ普及センコトヲ勉メタリ。然ルニ木艦時代ハ漸ク鋼艦時代トナリ、軍艦ハ一二ケ月ノ間ニ製造シ得ベカラザルノ時世ト變ジタレバ、爰ニ海軍方針ノ一變ヲ必要トスルニ至リ、鋼艦ヲ平時ニ於テ準備シ、有事ノ日直ニ戰時編製ノ海軍ヲ出スニ躊躇ナカラシムルノ方針ニ移リ、陸軍ニ於テモ亦之ト同ク國防ハ單ニ小銃及多人數ノミヲ賴寄ラザルヲ以テ、漸ク新式海岸砲臺ヲ築造シ、大ニ新武器

設備ノ計畫ヲ爲スニ至レリ。如斯軍事ノ方針一變ヲ來シタルニヨリ、爾後委員ヲ設ケ着々米國海軍將來ノ方針ヲ審議シ、且之ヲ實行スルニ順序ヲ定メ、我明治十四年ヨリ同廿四年ニ至ル十一ケ年間ニ於テ全ク外國品ヲ使用セズ、又外國人ノ手ヲ借ラズ、一切ノ軍艦ヲ製造シ得ルニ至レリ。今其方針トシテ之ヲ定メ之ヲ執行シタルモノ凡ソ左ノ如シ。

一、新海軍ヲ起スコトニ就キテハ之ヲ國家問題トシ、「デモタラット」「レバブリツク」兩政黨共ニ之ヲ贊成シ、之ヲ黨派問題外ニ獨立セシメ、政權爭奪ノ範圍外ノ超然タラシメ、專心一意之ヲ贊襄シ現今猶此方向ヲ執レルコト。

一、新海軍ニ用ユル材料ハ國内ニ於テ製造シ得ザルモノハ外國製ノ物ヲ使用シ得ベキモ、漸ク逐フテ一切内國製品ヲ使用スベキコト。

之ガ爲メ海軍長官ハ委員ヲ設ケ材料ノ果シテ國内ニ於テ製造シ得ラルベキヤ否ヤヲ調査シ製鐵業者ヲ招集シ或ハ其所在ニ就キ質問精査ヲ爲セリ。其調査報告ト政府ガ新海軍ヲ起スニ果シテ幾億弗ノ金額ヲ要スルヤノ方針定マリタル曉ニ方リ、民間ニ於テハ「クラムプ」「コロムビア」「エニオンアイアン、ウオーク」等五ケ所ノ造船所ハ或ハ規模ヲ擴張シ、或ハ新ニ創立シ、製鐵業者ハ甲板竝砲材製造器械ヲ据ヘ之ガ製造ニ從事シ、「ドリツグ」「ホツケキス」小速射砲製造所「ホール」「ホウアイトヘツド」水雷製造所「アメリカンバシフイ

ツク」「ドリツク」其他ノ彈丸製造所「チエポント」火藥製造所等踵ヲ接シテ創立スルノ機運ヲ爲シ、政府ハ亦有爲ノ將校ヲ選拔シ之ヲ海外ニ派遣調査セシメ、此等ヲ委員トシテ從來ノ造兵廠等ノ組織ヲ變更シ、規模ヲ擴張シ要港造船所ノ配置等ヲ規畫シユエーポーハ要港ニ水雷製造所綿火藥製造所ヲ新設スルニ至リタリ。

一、基本品ヲ一定シタルコト、之ガ爲メ各般ノ試驗ヲ爲シ其結果ニ依リ良好ノ基本品ヲ得タリシ、就中「ニツケル」鋼板ノ如キハ其試驗ニ依リ世界ノ甲板ヲ皆之ニ變化セシメタルモノアリ。

一、海軍方針委員ヲ設ケ米國ノ國勢ニ鑑ミ米國人民及財產（重ニ海外ニアルモノ）保護竝海岸防禦ノ爲幾何ノ艦船艇ヲ要スルヤノ問題ヲ議決セシメ、以テ海軍造船上ノ大計畫ヲ定メタルコト。

此計畫ニ依リ年々新艦製造ニ從事セリ。而シテ之ヲ完成スルノ年限ハ國內製造ノ景況ニ依レルモノニシテ、最少年限ヲ十四年ト議決セリ。又此大計畫ナルモノハ世界最强海軍ニ敵對シ、米國人民財產ヲ保護スルニ要スル艦船ノ隻數ニシテ、右委員ノ報告ハ之ヲ公ニシ輿論ノ評定ヲ經タルモノナレバ、獨リ海軍ノ大計畫トノミ云フ可ラズ。輿論ノ贊成ニシテ委任シタル海軍ノ大計畫ト云フベキガ如シ。今其計畫セルモノ計畫ニ基キ製造シ又製造中ニ係ル重ナルモノヲ擧ン。

計畫ノ分

一等戰鬪艦	十	隻	十二萬噸
二等戰鬪艦	二十五	隻	二十五萬噸
巡航艦	二十四	隻	十四萬四千噸
水雷艦	十五	隻	一萬四千百噸
砲艦	五	隻	六千噸
計	七十九	隻	六十三萬四千百噸
外ニ水雷艇	百	隻	一萬噸

計畫ニ基キ製造シタルモノ及製造中ノ分

一萬二千噸甲鐵艦	一	隻	一萬噸甲鐵艦	三	隻
大計畫以前ニ設計シタル甲鐵艦	三	隻			
九千噸內外巡航艦	二	隻	七千五百噸內外巡航艦三		隻
其他ハ之ヲ略ス					

一、此方針ノ外議會ニ於テハ商船保護案ヲ通過シ、郵便物ヲ運搬シ又定限以上ノ航程ヲ航ズ

ルモノニハ一噸幾仙ノ保護金ヲ下付シ、戰時ニ於テハ巡航艦タルノ資格ヲ有セシメ、又平時外國人ヲ船員タラシメザル等ノ條件ヲ定メタリ。

此案ノ爲メ目下或ル會社ニ於テ製造ニ從事セルモノハ噸數一萬噸餘ニシテ二十一節ヲ常速力トシ、戰時ニ四尹速射砲十二門六斤速射砲二十門ヲ積裝スルノ見込ナリト。

以上ハ專ラ材料ニ關スル海軍ノ方針ニシテ、人員ニ關スルモノハ目下之ガ執行ニ從事シ居レリ。蓋シ材料ニ在リテハ今日全ク十數年以前ノ方針ト其趣ヲ異ニシ、而シテ國庫ノ許ス範圍内ニ於テ多少ノ年限ヲ要スルモ總テ物品ハ之ヲ國内ニ於テ製造シ得ルノ發達ヲ爲シタルナリ。然レドモ其人員ニ關スル方針ニ至リテハ現今猶從前ノモノト比較シ殆ンド變化アリ、唯兵學校ノ教育ガ新武器新艦船ニ適應スルノ課程ニ改正セラレタルニ過ギズ。今其十數年以前ノ人員方針ト現今ノ分トヲ略記セン。

艦船ハ少時日内ニ於テ製造シ得ベク武器モ亦然リ、故ニ少時日内ニ於テ教育シ得ベカラザル將校ヲ養成シ置カザル可ラズ。而シテ平時ニ在リテハ之ヲシテ專ラ民間ノ事業ニ從事セシメ、事アルノ日ニ於テハ海軍將校缺乏ノ憂ナカラシム。

右ハ十數年以前ノ方針ナリ、之ニ依レバ艦船ノ數タル日ニ增加スルニ非ズシテ卽チ減少スルノ傾ナレバ、隨テ將校ヲ新ニ現役ニ就カシムルノ必要アリ。爲ニ兵學校卒業者ノ多數ハ名譽退職ヲ命ゼラルヽノ狀況ナリシ、且又米國海軍ノ進級規則タル、先任順序ナルヲ以テ、缺員アルニ非ザレバ試驗ヲ經テ進級スル能ハズ、而シテ退隱年齡ハ六十二年ナリ。故ニ當時ノ將校多クハ南北戰爭ノ際海軍ニ身ヲ委ネタル壯年輩ナリシナレバ、退隱年齡ニ達シ退職スルモノ頗ル僅少ニシテ、殆ンド進級ナルモノハ有名無實タリシナリ。

現今ニ於テモ猶其方針ヲ襲用セルモ、艦船ノ數タルヤ減少スルニ非ズシテ增加スルモノナレバ、兵學校卒業者ノ多數ハ海軍ノ現役ニ從事スルヲ得ト雖トモ、其進級タル亦敢テ從前ト異ナルナク、先任者ノ六十二年ニ達シ退職スルヲ俟ツテ始メテ進級スルノ運ニ至ルモノナリ。故ニ現今米國海軍大尉ノ平均年齡ハ五十年弱ニシテ多數ハ二十年以上大尉ニ職ヲ奉ジタルモノトス。

海軍方針ノ人員ニ關スルモノ現今ハ左ノ如シ。

一、新艦新武器ニ關スル諸規則ヲ定ムルコト

一、平時勤務ニ於テハ勿論進級試驗問題ニ於テモ自然右規則ニ關スルコトヲ多カラシムルコト

一、海軍人員委員ノ報告案ヲ實行スルコト

右規則ニ關スルモノハ大略已ニ定アリタリト雖ドモ、海軍長官ノ命ジタル人員委員ノ調査報告案ハ長官ノ贊成認可ヲ受ケ、之ヲ議會ニ提出シタルモ議會ハ之ヲ議事ニ付セズシテ止ミタリ。但シ議

會ニ於テ年々之ガ調査ノ報告ヲ爲サザルニ於テハ、海軍長官ハ更ニ新案ヲ提出スベシト雖ドモ、人員ニ關スル事タルヤ其關係鮮少ニアラズ從テ多數人民ノ感情ヲ損セズシテ之ガ改革ヲ全フスルハ蓋シ難事ナルベシ。

ウエストポイント陸軍兵學校

此兵學校タル米國唯一ノ陸軍兵學校ニシテ、ハドソン河上綠葉陰ヲ爲シ丘陵漫波ヲナセリ。風光絶佳ノ位置ヲ占ム。校舍ノ規模裝設宜シキヲ得タリ。集會所圖書館教場將校室生徒寢室厩舍等ヲ通覽スルニ、洒掃周到清潔ニシテ學術上ニ關スル機具亦具備セルガ如シ。授業ノ實況及生徒ノ步騎練習ヲ一覽セリ。此校ノ卒業生ハ年五十名ニ上ルハ抑モ米國陸軍ノ組織タル義勇兵ヲ以テセリ、故ニ其常備兵ノ如キハ實ニ僅少ニシテ唯西南部亞米利加土蕃ノ鎭壓ニ備フルニ過ギズ。而シテ此兵學校ノ主眼トスル所ハ此僅少ノ常備兵士官ノ供給ニアラズシテ彼ノ一朝有事ノ日ニ於テ雲集スル義勇兵ニ配布スベキ士官ノ養成ヲ計ルニアリ。

華盛頓造兵廠

此造兵廠ハ專ラ大砲及砲架ヲ製造シ、傍ラ演習彈丸竝ニ信管ヲ製造スル所ニシテ、其製造シ得ル

重砲ノ最大限ハ百二十噸トス。但釣リ上機ハ百六十噸ニ堪ユルモノナリ。然レドモ海軍ニ於テ今日迄十三戶砲ヲ製造シタリト雖ドモ、後來十二戶砲ヲ以テ海軍砲ノ最大限ト爲スノ方針ナレバ、此造兵廠ニ於テ用ユル最大重量ハ五十噸即チ十二戶砲ノ重量ニ超ユル事ナカルベシ。而シテ陸軍造兵上ノ方針ハ其最大限ヲ十六戶砲トナセルヲ以テ、强テ五十噸以上ニ使用スルコトナシト斷言ス可ラズ。廠內巡覽ノ際ニ於テ認メタルハ、十二戶八戶六戶砲ノ製造ニシテ、既製ノ重砲數十門アルヲ見ルガ就中製造中ノモノニシテ最モ新式ナルハ「ニツケル」鋼製八戶砲トス。蓋シ今日ニ於ケル八戶砲ノ構造ハ內筒砲尾外筒（ジヤケツト）及數箇ノ環（フープ）ヨリ成立スト雖ドモ、此ニツケル鋼砲ハ內筒砲尾外筒及砲口外筒（チエースジヤケツト）ノ三個ヨリ成立シ、最モ簡單ナリ。今試驗ノ爲メ製造スルト雖ドモ若シ此砲ニシテ良好ノ結果ヲ得ルニ於テハ世界造砲ノ計畫ニ一變化ヲ來スノ時アルベシ。

砲架製造所ニ於テ新奇ナリト認メタルモノハ一個ノ砲架ニ二個ノ速射砲ヲ据ヘ付タルモノナリ。蓋シ砲塔（ターレット）又ハ露砲塔（バルベット）中ニ二門ノ砲ヲ据ヘ付タルヲ利アリトスル以上ハ、側砲ト雖ドモ一砲架ニ二門ヲ据ユルノ利アルハ爭フ可ラザルノ理ナリ。米國海軍這般ノ裝備法ニ於テハ各國ニ率先シタルモノト謂フ可シ。

シエリンキング用ノ爐ハ三個アリタルヲ見ル、而シテ其個ハ特ニ大ナルモノナリ。私ニ思フ米國ハ後來漸ク砲ヲ構成スル部分ノ數ヲ減少シ皆ニツケル鋼製砲ノ如クナラシメントスルモノナルヲ。

アナポリス海軍兵學校

本校巡覽ノ際ハ恰モ休暇中ナリシヲ以テ、生徒ノ授業及其運動ヲ見ル能ハザリシハ最モ遺憾トスル所ナリ。校内ノ書籍館能ク整理シ、運用術教授用ノ雛形亦整頓セリ。講義室ニ於テハ其周圍ニ各國ノ戰爭ニ於テ得タル國旗ヲ裝飾セリ、以テ無限ノ感情ヲ生徒ニ與ヘ、英氣ヲシテ勃興セシムルナルベシ。英船ヨリ得タル「フヒガルヘツト」ノ如キモ亦此室ノ近傍ニ裝置セリ。「タムソン」磁針盤ノ偏差ヲ調製スルノ道ヲ教ユル機械ハ、單ニ艦ノ動搖ト旋回トヲ機械ニ依テ與ヘ、中央ニハ磁針盤ヲ据ヘ付ケアル一ノ機械ナルモ、特ニ教授上有用ノ雛形機械ナルヲ覺ユ。各教場ハ何レモ皆學術上必要ノ機械ヲ整備シ生徒寢室亦清潔ニシテ愉快ノ生活ヲ送リ得ベシ。

クラムプ造船所

此造船所ハ私立ニ係リ、桑港「エンランアイン、ウオーク」ト相竝ビ、一ハ太平洋面一ハ大西洋面ニアリ。共ニ米國最大ノ造船所トス。而シテ其大西洋面ニアルニ依リ造船上ノ費用自ラ低廉ナレバ、政府ノ注文ヲ受クル亦從テ多シト、目下船臺ニ「キール」ヲ据ヘ製造中ノモノ一萬噸以上ナルハ四隻ニシテ、近來露國ヨリ六隻凡テ五萬噸ノ注文ヲ受負タリト、進水式ヲ了リ目下艤裝中ノモノ二隻、一ハ一萬噸ノ戰鬪艦、一ハ七千五百噸ノモノアリシ、此造船會社ニ屬スル「ドリツグ」速射砲製造所アリ。小ナリト雖ドモ能ク整頓セリ。特ニ「シユリンキング」ニ瓦斯ヲ用ユル所ハ最モ注意周匝ニシテ卽砲尾外筒（ジヤケツト）ノ適當ノ大ニ至ルヲ待テ瓦斯ノ火ヲ消スト同時ニ內筒ニ之ヲ嵌挿スルノ裝置ナリ、又六斤一斤ノ速射砲彈ヲ製造スル所アリシ。

ミツドヴエール製鋼所

ミツドヴエール製鋼所ハ亦私立ニ係リ過大ノモノヲ製造スルニ非ズト雖ドモ、十尹砲ノ內筒及造船上舳艫ニ使用シ得ベキ鋼製ノ鑄物ノ如キハ之ヲ製造スル事ヲ得。米國ノ製鋼ヲシテ今日ノ形況ニ至ラシメタルノ鼻祖トナスベキ所ニシテ、今日ニ於テモ亦既製ノ鋼ニシテ最モ信用アルモノヲ製定セリ。工場內ニ百噸ノ汽力「ハムマー」アリ、之ヲ用キテ十尹砲ノ內筒ヲ打展スル所ハ頗ル壯觀ナリシ。「ミーメンスハート」ノ溶解爐ハ裝置舊式ノ如シト雖ドモ、之ニ依リ世ニ信用アルノ鋼ヲ製出スルヲ見レバ、技手ノ熟練想見スベシ。目擊シタル製品ハ十尹八尹砲ノ內筒鐵道車ノ外輪大彈丸等ナリ。

ボルトウイン汽罐造船所

此製造所ハ米國最大ノ汽罐製造所ニシテ、一週間ニ二十六臺ヲ製造スル事ヲ得、一ケ年凡ソ千臺ノ注文ヲ受ケ之ヲ製造スルト、製造所ハ費府ノ中心ニアリ凡一哩平方ノ地面ニ亙ル、各般ノ圖面等能ク整頓セリ。日本ヨリ注文セル十九臺目下製造中ナリト、現ニ其汽罐車ノ製造ニ從事スルヲ目擊シタリ。工場内ノ機械中稍新規ナルモノハ鐵板ヲ切ル鋸「アングルアイアン」ヲ切ルノ力等ナリ、釣上ゲ機ハ僅ニ百噸ヲ釣リ上グルモノナルモ、大ナル汽鑵車ヲ自由自在ニ釣リ上ルノ狀況頗ル盛觀ヲ極メタリ。

ボストン造船廠

廠内ニ於テ舊式ノ滑膛砲數百門ヲ竝列セル、又之ニ使用スル彈丸累々トシテ山積セルヲ見ル。石造ノ船渠ナリ。長サ凡ソ四百尺以内ノモノヲ入ルヽニ足ル。此造船廠ハ二重ニ鋼其及錨鎖ノ如キヲ製造セリ。

ニエーボート水雷要港

此水雷要港ハ海軍ノ水雷ニ關スルモノ、竝ニ火藥化學的試驗ヲ司ル所トス。綿火藥製造所無烟火藥製造所アリ、又「ホール」水雷ヲ製造セリ、之ヲ通覽スルニ書籍室ニハ水雷及化學ニ關スル各國ノ書籍ヲ貯藏シ、雛形室ニハ新式二十節速力ノ「ホワイトヘツト」魚形水雷等アリ。發電機室ハ新古各種ノ發電機ヲ陳列セリ、「ハーリツク」式ノ水雷アリ目下ハ試驗セズト又「シムヱヂソン」ニ水雷アリ、試驗ニ供スルモノナリ、「ホール」魚形水雷ノ試驗ヲ爲ス所ヲ一見セリ。然レドモ假製發射機ニ故障アリテ進行ヲ見ル能ハザリシ、當所ニアル綿火藥製造所ハ火災ニ罹リ目下新築計畫中ニテ綿火藥ハ「ヂユポン」製造ノモノヲ見タリ。此「ヂユポン」火藥製造所ハ一昨廿四年頃設計創立シタル私立ノモノニシテ、米國海軍一切ノ火藥注文ヲ受負ヒ、又綿火藥ノ注文ヲモ引受タルモノアリ。又試驗ニ供スル水雷艇三隻ヲ巡視セリ。

ブルークリン造船廠

此廠内ニ於テ目擊シタル製造中ノ軍艦ハ戰鬪艦ターン號巡航艦シンシナタ號ナリ、又艦底塗替ノ爲メ入渠中ナリシ巡航艦「マーブルヘツド」號及改造中ナリシ舊式ノモニトル形二隻アリシ、但此二隻ハ砲塔（ターレット）内ノ砲ヲ新式十三尹砲ニ据ヘ替ヘ、機關ヲモ新式ノモノト入レ替ユル工事中ニアルモノニシテ、港内ノ海防艦トシテハ有要ナルモノト認メタリ。廠内ニハ石造ニシテ凡ソ長四百尺以下ノ

モノヲ入レ得ベキモノ及木造ニシテ長五百尺以下ノモノヲ入レ得ベキ船渠アリ。其傍ニハ亦木造ニシテ長六百五十尺以下ノモノヲ入レ得ベキ船渠ノ工事中ナリシヲ見タリ。蓋シ米國海軍ハ石造船渠ヨリ木造船渠ノ價格低廉ニシテ保存ノ費用亦從テ僅少ナレバ、後來新築ノ場合ニ於テ石材ノ非常ニ廉價ナルニ非ザルヨリハ悉皆木造ト爲スノ計畫ナルニ依レバナリ。各船渠ノ周圍ニハ鐵道ヲ布キ之ニ重量百五十噸ヲ釣リ上ゲ得ルノ「クレーン」ヲ裝置シ、大砲又ハ重量アル鋼板ヲ艦内ヨリ揭ケ卸シスル用ニ供セリ。

軍艦メーン號ハ目下其厚鋼板艤裝中ナリ、而シテ明二十七年五月ニ至リ全ク艤裝ヲ完了スルノ見込ナリト、此艦ノ厚鋼板ハ「ニツケル」鋼ノ「ハルベー」式ニ掛ケタルモノナレバ、來年五月ハ卽チ世界中初メテ「ニツケル」鋼「ハルベー」式ノ鋼板ヲ有スル軍艦ガ海上實務ニ從事スルノ期ト謂フベキナリ。

既成軍艦ニシテ現役ニアル「ベスビヤス」號アリ、此艦ハ軍艦ト稱スベキヨリハ寧ロ小雷艇ト云フベキモノニシテ、兵裝ノ主要ナルモノハ、「ホリンスキー」十五尹空氣砲三門ナリ、此空氣砲ハ爆列藥二百五十斤ヲ裝塡シタル長サ六尺餘ノ彈丸ヲ空氣ノ壓力ニ依リ一海里半ノ距離ニ射出スルモノニシテ、空氣砲ノ長サハ凡二十七尺ナリ、而シテ此空氣砲彈ハ圓筒ノ周圍ニ木板ヲ張リ付ケ外面ニゴム板ヲ張リ付ケルモノニシテ、初連ハ三百メートル餘トス。信管ハ電池ヲ有スル信管ニシテ堅硬

質ノモノニ觸接シテ破裂スルノ裝置ト、海中數尺ニ達シテ破裂スルノ裝置トノ二種アリ。抑モ反裝水雷ハ危險ヲ冒シ深ク敵地ニ侵入セザル可ラズ、而シテ其結果ニ於テハ大ニ疑ヲ有スルモノナリ。此艦ハ先ヅ此等ノ試驗ノ爲メニ製造シタルモノニシテ、若シ好結果ナリセバ反裝水雷ヲ用ユルノ位置ニ其効ヲ現ハスヲ目的トシタルモノニシテ、此ノ艦落成以來既ニ五ケ年ノ長日月間試驗又試驗幾回カ委員ハ之ヲ試驗シタルモ未ダ確乎タル決斷ヲ下セル報告ヲ得ザルモノナレドモ、成功スル曉ニ在リテハ殆ント全世界海軍艦船ノ兵裝ノ一變スルモノアレバ、委員ガ愼重精密ニ幾多ノ歲月ヲ費シ之ヲ試驗シ、海軍長官ハ又幾回カ委員ヲ變更シテ之ヲ試驗セシメ、議會又幾十萬弗ノ試驗費ヲ議決シテ之ガ試驗ニ從事セシメルガ如キ、其海軍々事上ニ官民ノ熱心ナル稱ス可シ。且又此空氣砲ハ製造費非常ニ低廉ニシテ陸上ヨリ發射スルトキハ命中確實毫モ誤ルナケレバ、紐育港防禦ノ海岸砲臺ノ如キハ既ニ此砲幾十門ヲ裝備スルノ計畫アリテ、陸軍ニ於テハ之ヲ採用セリ。而シテ其採用スルノ計畫アルモノハ既ニ試驗ヲ了リ爆烈藥五百斤ヲ裝塡スル砲彈ヲ二海里ノ距離ニ射出スルモノナリ。

ベセレヘム製鐵所

ベセレヘム製鐵所ハ元ト小ナル製鐵所ニシテ僅ニ鐵軌製造ノミヲ以テ業トシタルモノナレドモ海

軍方針委員ニ報告ヲ海軍長官ニ提出スルノ際ニ於テ此製鐵所モ亦他ノ民間ニアル製鐵所ト同ク大ニ規模ヲ擴張シ事業ヲ盛大ナラシメタルモノニシテ、現今米國中過大ノ鋼製物ハ常ニ「ベセレヘム」ヲ措テ他ニ之ヲ製造スル所ナキモノトス。而シテ此製鐵所ノ如此規模ヲ擴張シタルニ依リ、海軍擴張法律中ニアル「必ズ國内ノ材料ヲ用ユベシ」トノ一項ヲ實行スルヲ得タルナリ。

製鐵所内ニハ「ブラスチングファアルネス」八個アリ、鑛物ハ「キユバ」鐵鑛ヲ用ヒ、燃料ニハ「ベンシルバニア」ノ石炭三分ト「コーク」七分ノ割合ヲ以テ合シタルモノヲ用フト、目下現政府自由貿易ノ方針ヲ窺ヒ、鐵道ノ注文少キニヨリ僅ニ其一個ヲ使用スルニ過ギズ鐵軌製造所亦休業中ナリシ。

砲材、鋼鐵推進機軸等ノ製造所ハ其内部爐竝諸機械皆充分ニ運轉スルヲ認メタリ。蓋シ十二尹砲此上ノ諸部又ハ十尹砲以下ニテモ長口經諸砲ノ内筒又ハ非常ニ長キ推進機軸竝ニ「クランク」ノ如キモノニシテ特ニ「テムバリング」ヲ與フルヲ韻スル場合ニ於テハ、此ベセレヘム製鐵所ノ他ニハ米國内之ヲ製造スルモノニアラズ。而シテ厚サ十四尹以上ノ鋼裝甲ヲ製造シ及之ヲ完全ナル「ハルベー」式ニ掛クルハ獨リ此製造所ノ專有スル所ナリ。巡覽中百二十噸ノ汽力「ハムマー」及二千噸餘ノ水壓々搾機アリ、「ハムマー」ハ厚鋼板製造ニ之ヲ用キ壓搾機ハ内筒製造又ハ推進機軸又ハ鋼製造等ニ之ヲ用ユ又大ナル鋼管ヲ曲グル所アリ。同ク水壓機ヲ用キ鋼塊ニ直徑六尹餘ノ穴ヲ穿ツニモ亦水壓機ヲ用ヒタリシ此所ニ於テ目擊シタル釣リ上機ハ重二百五十噸ヲ釣リ上ルモノナリ。又既ニ

板形又ハ管形ニ製造セシ鋼塊ヲ適當ノ寸法ニ切斷スル所アリ、其巨大ナルモノヲ截斷スル假令機械ノ力ニ依ルトハ雖ドモ自由自在ナル皆壯觀ト稱スベキノミ。「ハルベー」式爐及噴水機ヲ見又「テムバリング」ヲ爲ス所ヲ見ル、其爐ノ高サ五十八餘圓筒形ヲナシ、爐底深ク地中ニ侵入セリ。爐内ニ用ユル熱火ハ石炭瓦斯ト熱シタル空氣トヲ用キ、車軸圓筒等ヲシテ平等一樣ニ熱セシムルノ目的ナリ。此爐ノ傍ニ釣リ上機及深サ五丈餘ノ油池アリ以テ爐内ニ於テ適當ノ熱度ニ達シタルモノヲ釣リ上ゲ、之ヲ油池ニ釣リ下クルノ仕掛ナリ。實際之ヲ五寸口徑十尹砲ノ圓筒ニ行フ所ヲ目擊シタルニ、釣リ上機ニ依リ熾熱シテ白焰ヲ發スルノ圓筒爐内ヨリ出テ油池ニ臨ムヤ、其全體未タ油中ニ降下セサルニ先チ圓筒中ニ浸入セル油ハ蒸發沸騰高ク噴出シ、煤烟濛々油滴四散爆々トシテ四壁ニ燃燒スル光景壯絶ト評スベシ。此「ベセレヘム」製鐵所ニ於テ「テムバリング」ヲ行フ機ハ軍艦商船ニ用ユル推進機軸ヲモ「テムバリング」爲シ得ルモノニシテ、此裝置ハ古來未ダ見ザル所ノモノナリトス。

右ハ單ニ視察ノ要領ニ有之候得共不取敢上申仕候。當米國視察ノ用務モ大略結了仕候ニ付、來廿七日紐育出帆英國ニ渡航ノ豫定ニ御座候。敬具

明治二十六年九月二十五日

依仁

（第四）

謹啓　兩陛下益々御機嫌克被遊御座奉恭祝候。陳者依仁去九月廿七日ヲ以テ英船ニ搭シ米國紐育出帆仕候處、太平洋ノ風波モ格別ノ障碍ナク、去十月四日無事英國リヴアープル港上陸、卽日倫敦ニ到着仕候間幸ニ　聖慮ヲ勞セラレザラン事ヲ奉懇請候英國着後十月十二日ヲ以テ「チヤタム」造船所ヲ巡視シ、同十七日「プリマウス」ニ赴キ「デボンボルド」軍港ヲ視察シ、「ダートマウス」ヲ經テ海軍學校ヲ巡視シ、「ポルツマウス」ニ至リ同軍港ヲ觀察シ、更ニ同廿三日「ニューカツル」ニ至リ「アームストロング」製造所ヲ巡視シ、「グラスゴー」ニ赴キ「クライドバンク」「タムソン」造船所ヲ一覽シ、本月一日「ウルウイツチ」造兵廠同二日「ウオルサムアベー」火藥製造所ヲ巡視仕候外、各軍港製造所トモ總テ懇切ナル待遇ヲ爲シ、到ル處祕密ヲ解放シテ自由ニ纜覽セシメタルガ如キハ、依仁ガ殊ニ滿足仕候處ニ御座候。今其綱領竝英國海軍組織方針等ノ概要ヲ略陳シ不取敢上覽ニ供シ候。

英國海軍本部ノ組織タルヤ、歷史ト慣例トノ混交制度ニシテ、各國之ニ類似スルモノ尠シ。是レ國民保守ノ氣衆ニ富ミ、根底ヨリ組織ノ變更ヲ爲スヲ好マズ、唯聯勢ノ必要ニ應ジ漸次改正ヲ施スニ過ギズ。故ニ其諸條例ノ如キモ稍繁雜ヲ免レズ。局外者ニ在リテハ容易ニ之ヲ了解シ得ルコト甚難シ、又英國海軍ニ於テハ參謀本部或ハ軍令部ノ設置アリ、軍令軍政共ニ海軍本部ヨリ發布セリ。海軍本部ハ卽チ海軍總督ノ軍令軍政ヲ掌ル最高官廳ニシテ昔時ハ海軍將校タル皇族ヲ以テ之ニ任ゼシモ、近世ニ至リテハ唯其職名ヲ存スルノミニシテ、其職務ハ海軍本部委員ガ代リテ掌理スルコトトナレリ。海軍本部委員ハ海軍大臣（內閣員）海軍將官四人文官委員國會議員一人ヨリ組織セラレ、委員ハ又部務ヲ分擔シ各其責ニ任ズルノ制タリ、如斯英國海軍ハ委員組織ヲ以テ總テ軍令軍政ヲ掌リ海軍ノ方針ヲ確定スルモノアリ。英國海軍ノ方針ハ、政黨ノ如何ヲ問ハズ常ニ一定シテ變更スル處ナキガ如シ。卽チ歐洲ニ強國ノ連合シタル海軍ニ少カラザルノ勢力ヲ維持スルヲ以テ目的トシ、艦船艦種ノ如キハ歐洲諸國ノ形勢ト技術ノ進歩トニヨリ隨時計畫スルモノノ如シ、而シテ現今英國ノ有スル軍艦ハ甲鐵艦八十隻、非甲鐵艦二百三十六隻合計三百十六隻、然レドモ其內既ニ舊式ニ屬スルモノアリ、或ハ港灣防禦用ノモノアリ、故ニ此總數タル洋中ニ於テ艦隊ヲ編製シ、敵ト戰鬪シ得ベキモノニアラズ。今內ニ就キ戰鬪ニ適スル軍艦ハ海軍年數ニ於テ英國海軍ト佛露合併海軍トヲ比較シタルモノニヨレバ、

英國	甲鐵艦	七十八隻　噸數六十三萬一千〇七十
	巡洋艦	百十九隻　同三十六萬〇五百二十一

合計　百九十七隻　同九十九萬一千五百九十一噸

佛露合併　甲鐵艦　百〇五隻　噸數六十八萬三千二百五十六
　　巡洋艦　五十九隻　同十四萬一千四百九十六
　　合計　百六十四隻　同八十二萬四千七百五十二

右ノ調査ニヨレバ英國甲鐵艦ノ數ハ佛露合併ノ數ヨリ僅少ナリト雖ドモ、合計隻數及噸數ニ於テハ英國優レリ、又保護巡洋艦ノ數及大小ヲ比較スレバ、

英國四千噸以上ノモノ　四十六隻　四千噸以下二千噸以上ノモノ　三十九隻
佛露同　三十一隻　同　十五隻

此種ノ軍艦ニ至リテハ英國ノ勢力遙ニ佛露合併ノ勢力ニ超過セリ。

前記ノ如ク英國現時ノ海軍ハ其方針トスル處ノ二強國合併ノ海軍ニ對シテ優ルアルモ決シテ劣ルコトナキヲ證スベシ。又近年ニ至リ英國ニ於テハ遽ニ其海軍ノ勢力ヲ擴張シタリ。一千八百八十年已降五ケ年以來竣工セシ軍艦及現時製造中ノモノハ甲鐵艦三十一隻巡洋艦報知艦水雷艦等百四十六隻ニシテ、千八百八十九年ノ海防令ハ四ケ年半ニ軍艦七十隻製造ノ協賛ヲ得タルモノニシテ內七隻ハ一萬噸以上ノ一等甲鐵餘ハ巡洋艦水雷艦等ニシテ、大略已ニ竣工ヲ告ゲ、來年四月ニ至レバ悉ク落成スルノ豫算ナリト、此他猶昨年及本年度ニ於テハ著手ノ軍艦ハ一等甲鐵三隻一等巡洋艦二隻二等巡洋艦三隻報知艦水雷艇十六隻ナリ。抑モ英國ハ世界第一ノ海業國タル論ヲ俟タズ、從テ復堅牢迅速ナル船舶モ亦尠カラズ、故ニ戰時ニ當リ此等ニ銃砲ヲ設備シ、或ハ巡洋艦トナシ或ハ兵員石炭糧食等ヲ搭載スルノ運送船ニ充ルヲ得ベシ。政府ハ是ニ於テ最モ鞏固完全ナル船舶ヲ選擇拔擢シ、若干ノ補助金ヲ給與シ、以テ海軍ノ豫備船ニ編入シ、又商社ニ於テ政府ノ條件ニ從ヒ製造スル船舶ニハ其製造費ノ幾分ヲ補助シ、以テ戰時ニ適用シ得ベキ船舶ノ製造ヲ奬勵セリ。且又英國ハ獨リ其船舶ニ富メルノミナラズ、最モ完備セル夥多ノ私立造船所兵器製造所ヲ有セリ。此等ハ卽チ亦海軍ノ豫備製造所ト認ムベキモノニシテ、經驗熟練資力ニ富ミ、殊ニ艦船ヲ迅速ニ製造シ得ルノ點ニ至リテハ世界中之ハ企及スル能ハザル所アリ。彼ノ海防令ニ依リ製造スル軍艦七十隻中三十二隻ハ悉ク私立造船所ノ手ニ成ルモノニシテ、一萬四千餘噸ノ一等甲鐵艦ノ如キモ三ケ年內外ニ於テ竣工シ、政府ニ引渡スコトヲ得タリ。斯クノ如ク造船ノ技術ハ公私造船所共ニ近年非常ノ進步ヲ爲シ、從來一等甲鐵艦ヲ製造スルニハ五六ケ年ヲ要シ、彼ノ一時諸國ヲ驚愕セシメタル甲鐵艦「インフレキシブル」號ノ如キ七年ノ星霜ヲ經テ漸ク竣工シタルモ、此ヨリ一層强大ナル甲鐵艦「ロヤルザボレン」號ハ「ポルツマウス」造船所ニ於テ僅々二年八ケ月ニシテ本年全ク落成セリ。

凡ソ海軍ノ戰鬪ハ第一期ノ戰爭ニ於テ彼我共ニ夥多沈沒艦及破損艦ヲ生ズベキハ疑フベカラズ。

故ニ可成迅速ニ軍艦ヲ補充シ、第二期戰爭ニ優等ナル艦隊ヲ準備シ得ルノ國ハ卽チ海上ノ全權ヲ占領スルモノト謂ハザルベカラズ。是等ノ原則ヨリ考フルニ於テハ英國私立製造所ハ實ニ他國ニ於テ得ベカラザル海軍ノ補助物ニシテ、英國ガ優ニ海上ノ權力ヲ掌握スル亦謂ナキニ非ザルナリ。

チヤタム造船所

「チヤタム」造船所ハ「ミドウエー」河上ニアリ、「シヤネス」軍港ヲ距ル凡九海里場內廣濶鐵道ヲ敷設シ、以テ通行運搬ノ便ニ供セリ。場內廣濶ナル艦船繫留地三個アリ、之ニ大小數多ノ船渠ヲ設ク、大ナルモノ四個長各四百餘尺、現時池中ニ繫留スルモノ大小ノ軍艦合セテ四十餘隻、豫備艦アリ修理中ノモノアリ艤裝中ノモノアリ、中ニ就テ縱覽セシモノ二三ヲ擧グレバ「ブレンヘーム」號ハ英國最大ノ巡洋艦ニシテ、噸數九千馬力二力速力二十一半海里兵裝ハ九二吋廿三噸砲門六吋砲十門其他三斤連射砲十數門ヲ備ヘ、非甲鐵艦中最モ有力ナル軍艦アリ。「シーテ」ハ三千四百噸二等巡洋艦ニシテ速力二十海里六吋砲二門四、七吋速射砲六門水雷發射管四門ヲ備ヘ、最新ノ二等巡洋艦ニシテ、英國ニ於テハ左モ此種ノ巡洋艦多數ヲ製造セリ。「バルナロア」號ハ一萬五百噸ノ巡洋甲鐵艦ニシテ、當時艤裝中ナリ、此艦ハ彼ノ海防令ニ依リ製造セル軍艦ノ一ニシテ、「センチユリス」號ト姉妹艦ナリ。此二隻ノ軍艦ハ英國海軍中「スウエス」海峽ヲ通過シ得ルモノ中最大ノ甲鐵艦ニシテ、甲鐵艦板ノ厚「ベルト」十二吋砲臺九吋大砲ハ二十九噸砲四門四、七速射砲十門水雷發射管七門ヲ備ヘ、竣工ノ上ハ支那艦隊ノ旗トナルモノナリ。

其他現時製造中ノ軍艦三隻船臺上ニアルヲ巡視シ造船工場ヲ一覽セリ。

「デボンポルト」軍港

「デボンポルト」軍港ハ造船事業ニ於テハ「ポルツマフス」軍港ニ及バト雖ドモ、英國ノ西南ニ位シ佛國「シルブル」軍港ト相對峙シ、戰略上最モ緊要ノ地點トス。造船所ハ「デボンポルト」「ケーハム」ノ二ケ所ニ區分シ、隧道ヲ穿チ汽車ヲ以テ往復ノ便ニ供ス。「デボンポルト」ニハ主トシテ造船工場ヲ設ク三個ノ船渠アリ、「ケーハム」ニハ繫留池二個ト船渠三個アリ、豫備艦ヲ繫留シ艦船ヲ艤裝シ又汽機汽罐ノ製造ニ從事セリ。當時製造中ノ軍艦ハ二等巡洋艦二隻水雷艦三隻ニシテ、艤裝中ノ軍艦ハ大概二等巡洋艦ナリ又砲術練習艦「カンブリジ」號及若水兵練習艦「インブレゲネブル」號ノ巡視セシニ、砲術練習艦ニハ電氣裝置ノ夜間照星照尺ヲ用キ、室內射的練習ヲナスノ裝置アルヲ目擊セリ。

「ダートマウス」海軍學校「ブリクニヤ」號

海軍學校ハ英國南方「ダートマウス」ニ於テ舊木造戰艦二隻ヲ連ネ河中ニ繫留シテ學校トナセリ。生徒入校年齡ハ十三歲以上十三歲半ニシテ、學期ヲ二ケ年トシ、卒業ノ後成績ノ良否ニ依リ少尉候補生或ハ生徒トシテ常備艦ニ乘組マシメ、四ケ年實施練習ヲ經大尉ノ試驗ヲ受ケ少尉ニ任ズルノ制ナリ。艦內教場及運動場體操場等ヲ巡視セシニ、體育ノ方法最完全ナルヲ覺ヘタリ。

「ポルツマウス」軍港

「ポルツマウス」軍港ハ英國第一ノ軍港ニシテ、最モ完備セル造船所ヲ有セリ。造船所內ニハ廣濶ナル繫留池四個ヲ設ケ、豫備艦修理艤裝艦ヲ區別シテ繫留セシム。繫留池ノ周圍ニハ十四個ノ船渠アリ、最モ大ナルモノハ長七百呎船渠內ノ海水ヲ乾ス爲ニ一千馬力ノ大喞筒機ヲ備ヘタリ。又所內總テノ「カプスタン」等ヲ運轉セシムル爲ニ七百馬力ノ空氣壓搾喞筒ヲ設置セリ。其裝置ノ精巧ナル頗ル注意ヲ惹ク。現今港內ニ繫留スル軍艦五十隻以上ニシテ、第一、第二、第三豫備艦ト其繫留池ヲ異ニセリ。彼ノ海防令ニヨリ製造セル軍艦モ今日略竣工シタルヲ以テ、船臺上ニテ製造中ノモノ僅々一二隻ニ過ギズ。餘ハ專ラ艤裝中ニ係ル、砲術練習場ハ元軍艦「エキヘルレント」號ニ於テナセシモ、四五年前陸上ニ移シ、港內ノ「ウエール」島上ニアリ。士官寄宿舍兵營講堂砲臺體操場小銃射的場及大砲射的場等ヲ設置ス、兵營ハ陸軍風ニシテ寢室ヲ備ヘ釣床ヲ使用セズ、新築ニシテ

至テ清潔ナリ。講堂ニハ各種ノ彈丸製藥ノ雛形信管等總テ火工ニ屬スルモノヲ陳列セリ。各軍港ニ砲術練習艦ノ設置アリト雖ドモ、將校ヲ練習スルハ單ニ此練習場ノミ。而シテ其種類ハ砲術長トナスベキモノ佐官大尉ニシテ、砲術短教程ヲ履行スルモノ及大尉ニ進級資格ヲ備フル爲メ教程ヲ履修スルモノ三種トス。水雷練習艦「ベルーレ」號ハ砲術練習場ト同ク將校下士卒ヲ練習スル處ナリ。教場ニハ各種水雷ノ實物及模型ヲ陳列セリ。英國ノ教授方タル實際ヲ主トセリ、故ニ單ニ書籍ニ依賴セズ、專ラ實物又ハ模型ニ就キ教授ス。是ニ於テ其模型ノ如キ最モ夥多ニシテ、或ハ玻璃筐中ニ布設水雷觸發水雷機械水雷等ノ設置方法ヲ說明セリ。又ハ軍艦雛形ニシテ際觸發水雷ニ抵觸セシメ發火スルノ裝置等アリ。

「ニユーカツスル」アームストロング製造所

「アームストロング」製造所ハ英國第一ノ私立製造所ニシテ、「ニユーカツスル」「タイン」河畔ニアリ。場內廣濶鐵軌ヲ縱橫ニ布設シ、數臺ノ機關車ヲ以テ材料ヲ各工場ニ配布ス。河岸ニハ亦三個ノ埠頭ヲ設ケ、數臺ノ起重器ヲ以テ貨物ヲ汽船ニ揚卸ス、其大ナルモノハ三萬三千五百十三貫ノ起重力ヲ有シ、一人其上ニアルハ巨大ノ大砲ヲ扛擧スルコト恰モ猶兒ノ鞠ヲ弄スルニ異ナラズ。工場內ヲ製鋼造船造機造砲ノ四部ニ大別セリ、製鋼部ハシーメンス、コーチン式ニ依リ各種ノ鋼材ヲ製セ

リ。大ナル熔解爐四個アリ、又鋼材ヲ鍛錬スル水壓鎚四千五百噸ノモノ一個其他是ヨリ少ナルモノ三個アリ、之ニ用スル水壓汽關五千五百馬力ノモノ五組、其他ノ機關猶數臺ヲ具備セリ。造船部ニ船臺九個アリ、內鋼鐵艦製造用ノ船臺二個アリ、造機部ハ重ニ水力起重器鐵橋類及捲回器等ノ類ヲ製造セリ。造砲部ハ重量百十噸半口徑凡一尺三寸ノ巨砲ヲ初トシ各種ノ大砲ヲ製セリ。又彈丸藥莢其他大砲ノ要具及附屬具ヲ製造ス此部ニ大ナル蒸氣鎚アリ其重量三十五噸トス。

「ウールウイツチ」造兵廠

「ウールウツチ」造兵廠ハ其規模ノ廣大ニシテ各種兵器ヲ製造スルノ多キ、他ノ外國ニ於テ之ニ匹敵スルモノアルナシ。廠內ニ敷設セル鐵路ノ合計ハ實ニ四十哩ニ達セリ。今之ヲ仔細ニ觀察スルニ於テハ許多ノ時間ヲ要ス論ヲ俟タズ、當日巡視ノ個所ハ僅ニ其一部分ニ止マル其重ナルモノヲ擧グレバ、

一、小銃用彈丸藥莢信管製造工場
二、彈丸火藥信管火箭等火工ニ屬スル雛形陳列場
三、砲架砲車等製造工場
四、木工場
五、百五十噸「クレーン」ヲ備ヘタル工場
六、大砲尾銓閉鎖器各種ノ雛形陳列場
七、大砲製造場
八、大砲彈丸製造場

同廠ニ於テ目下製造ノ重要ナルモノハ十二吋新式ワヤル砲ノ製造ニシテ、其工場モ已ニ落成シ、試射ニ供スベキ砲一門アルヲ見タリ。砲ノ長三十五口徑重量四十六噸ニシテ、砲ノ全身ニ針金ヲ卷キタルモノナリシ。又目下針金ヲ捲付中ノモノアリ、此等ハ皆新造ノ一等甲鐵艦ニ設備スルモノニシテ、其他四、七吋速射砲ノ砲身ニ「ジヤケツト」ヲ裝入スル處竝鋼鐵彈ヲ鍛冶スル處ヲ巡視シタルモ此等ハ祕密ノ工場ニシテ一般人ニ縱覽セシメザル所トス。

「ウオルサムアベー」火藥製造所

「ウオルサムアベー」火藥製造所ハ各種ノ火藥綿火藥及「コルダイト」ヲ製造スル工場アリ。區域廣濶長三哩ニ亙ル場內ニ運河アリ、火藥及材料運搬ヲ便ニスル又河楊ヲ植ヘ、火藥製造用ニ木炭ヲ供セリ。綿火藥製造工場及「コルダイト」工場ヲ巡視セリ、綿火藥製造工場ハ三ケ年以前ニ建築シタルモノニシテ、一週ノ製造高九噸ニ上ル、「コルダイト」製造工場亦三ケ年以前ノ建築ニ係リ其構

造ノ如キ爆發物ノ工場ナレバ、適宜ノ距離ヲ隔テ且堅固ナル煉瓦壁ヲ築キ各工場ヲ圍メリ。其最モ危險ナルハ「ナイトログリシリン」ノ製造トス。「コルダイト」ハ綿火藥六十八分「ナイトログリシリン」三十二分ニ「バスリン」ヲ加ヘタル混合物ナリ。同火藥發明以來英國ニ於テハ各種ノ試驗ヲ爲シ、又印度及加那陀地方ノ如キ極暑極寒ノ地方ニ貯藏シ、之ガ變化ノ有無ヲ驗セシムルモ依然トシテ性質ニ異狀ヲ呈セズ、取扱上極メテ安全ナルニ依リ、遂ニ軍用ニ供スルニ至レリ。每週ノ製造高二十四噸ニ及ブト而シテ當時製造中ノモノハ專ラ小銃用ニ係レリ。

右ノ通英國視察ノ要務モ略捗取候ニ付、去七日倫敦出發佛國ニ到着仕候。依テ不取敢此段上聞ニ達シ候。拜具

明治二十六年十一月九日

上

依仁

（第五）

兩陛下益御機嫌克被遊御座奉恭祝候。陳者依仁佛國巴里到着后去十三日ヲ以テ佛國大統領「カノー」氏ニ對面仕候ニ付其概要左ニ略陳仕候。

十一月十三日午後五時三十分佛國大統領對面ノ旨兼テ我特命全權公使曾彌荒助ヲ經テ通牒有之候ニ付、同時隨行員ヲ從ヘテ大統領官舍ニ赴キ候處、大統領附陸軍中將「ボリユー」陸軍中佐「クルテーラペイラ」並儀式局長伯爵「ブルケネー」ハ玄關ニ出迎ヘ、直ニ休所ニ案內シ大統領ニ報ズレバ大統領ハ應接室仕切迄出迎ヘタリ。一應挨拶ノ上着席互ニ寒暄ヲ話スルノ後大統領ハ殊ニ

兩陛下ノ御健康如何被爲在候哉ノ尋問有之候ニ付、

兩陛下益御機嫌麗敷被爲涉候旨回答仕候處、

兩陛下へ宜敷言上候樣依賴有之候ニ付右

御嘉納アラセラレンコトヲ奉上請候。

佛國ハ共和國ニ有之候得共、萬般ノ儀式嚴格ニシテ、當日ノ如キモ禮裝セル舍人終始先導ヲ爲シ併セテ非禮ヲ相警メ居候。大統領ノ外、外務海軍兩大臣ニモ面會仕候、今回佛國滯在ハ僅ニ一週間ニ過ギズ候得共、各軍港造船所等巡視ノ義ハ來年墺伊ヲ經テ佛國南部通過ノ節順路ニモ有之旁都合宜敷御座候ニ付、總テ其節迄相見合セ本月十四日巴里出發白耳義國「ブラツセル」到着同廿一日白耳義國皇帝ヘ對面仕候。

十一月廿一日午後三時白耳義國皇帝ノ御對面ノ旨我特命全權公使子爵青木周藏ヲ經テ兼テ通

牒有之候ニ付、同時隨行員ヲ從ヘ王宮ニ赴キ候處、車寄左右ニハ禮裝セル舍人整列シ、宮內長官竝皇帝附武官兩名玄關ニ出迎ヘ直ニ休所ニ案內セリ。皇帝ハ階下ニテ出迎ハセラレ、御座所ニ御同伴皇后陛下ニ御紹介アラセラルル。暫時兩陛下ニ對話ノ末時機ヲ見計ヒ許可ヲ得テ次室ニ伺候セル隨行官ヲ披露シ謁見セシム。右了テ兩陛下ニ伴ハレ次室ニ至レバ、陛下ヨリ宮內長官竝皇帝附武官及女官等ヲ紹介セラル。依テ夫々挨拶ノ後御暇ヲ請ヒ、兩陛下ト握手ノ禮ヲ行ヒ王宮ヲ辭スレバ、皇帝ニハ玄關マデ御見送アラセラル。旅館ヘ歸着後一時間ヲ過グレバ皇帝ニハ馬車ヲ軋ラレ御訪問アラセラレ暫時御談話ノ後皇帝ニハ兼テ通牒有之候通、今夕宮中晩餐ノ席上ニ於テ再會ノ旨ヲ約セラレ還御アラセラレタリ。午後六時四十五分宮中ニ於テ晩餐ヲ共ニセラルベキ旨兼テ通牒有之候ニ付。王宮ニ赴キ候處、宮內長官武官等玄關ニ出迎ヘ、直ニ溜リ間ニ案內ス。同所ニ於テ兩陛下ニ對面直ニ皇后陛下ヨリ內親王ニ御紹介アラセラル、暫時對話仕處晩餐準備已ニ整ヘル旨宮內長官ヨリ皇帝ニ言上有之候ニ付、皇帝ニハ皇后陛下ヲ案內可致旨依仁ニ挨拶被爲在、依テ依仁ハ當夜皇后陛下ヲ案內シ、皇帝ハ內親王ヲ伴ヒ、其他兩名ノ女官一ハ下院議長一ハ當夜參列ノ我特命全權公使子爵靑木周藏ニ伴ハレ、各食堂ニ進ミ候、晩餐后復ヒ溜間ニ於テ陛下ヨリ內閣各大臣其他要路ノ官吏等ヲ紹介アラセラル、此間兩陛下竝內親王ハ參列員ニ御談話アリ、右了テ時機ヲ見計ヒ溜リ間ニ於テ

兩陛下竝內親王ニ御告別ヲ爲シ候處、我兩陛下ヘ宜敷言上候樣御依賴被爲在皇帝ハ玄關迄御見送アラセラレタリ。

十一月廿二日白耳義國皇帝ニハ今般白耳義國皇室訪問ノ紀念トシテ「レオポルド」大綬章ヲ寄贈アラセラレタリ。

白耳義國皇室訪問無滯相濟候ニ付、翌廿三日「ブラツセル」出發「アンウエルス」ニ到着仕候處兼テ白耳義國陸軍大臣ヨリ約束有之候上席大尉「デニテツト」ヲ「アンウエルス」砲臺竝造船所等巡視ノ案內トシテ差遣シ候ニ付、翌廿四日ヲ以テ砲臺竝「オボケンゴケール」造船所巡視仕候。

「アンウエルス」砲臺ハ歐州著名ノ要塞ニシテ、全市ヲ環匝セル星形ノ大壘ナリ。抑モ白耳義ノ位置タルヤ大國ノ間ニ介在セル平地ニシテ、海岸要港唯此「アンウエルス」アルノミ。故ニ其國力ヲ盡シテ此砲臺ヲ修築ス、其構造ノ堅牢壯大ナル亦宜ナリ。大尉ニ就キ防禦上ノ大體竝建築ノ方法ヲ聽キ內部ニ入リ大砲架設ノ模樣竝火藥庫武庫等ヲ巡視シ、河岸ニ出レバ政府ヨリ回漕ノ小蒸汽船アリ、士官出迎フ直ニ之ニ乘シ「オボケン、コケリル」造船所ニ至リ、木工場製鋼工場造船工場等ヲ巡視スルニ、皆規模狹小ニシテ設備未ダ完全ナラズ。然レドモ其位置ノ適當ナルト職工ノ賃銀低廉ナルトニヨリ、造船上ノ費用英佛ニ比較スルニ僅少ナレバ、目下露國政府ヨリ軍艦製造ノ注文ヲ受負ヘリト、今後其規模ヲ擴張スルニ於テハ後來ノ發達豫期スベカラズト雖ドモ、白耳義ハ抑モ陸軍國

ニシテ海軍國ニアラズ、海軍ハ唯河川防禦ノ用ニ供スルニ過ギザレバ、之ヲ皆無ト謂フモ可ナリ、從テ其造船所ノ盛大ナラザル亦謂ナキニ非ザルナリ。

右佛國大統領及白耳義國皇帝對面ノ概要竝白耳義國砲臺造船所巡視ノ綱領ヲ具シ不取敢上聞ニ達シ候。敬具

明治廿六年十一月廿六日

上

依　仁

舊公卿華族救助賜金ノ件

舊公卿華族之儀ハ古昔ヨリ皇室ニ奉仕シ、王政時代ニ在テハ常ニ皇業ヲ贊襄シ、武門政府ヲ掌握スルノ時ニ及ンデハ終始皇室ト艱難ヲ偕ニシ困厄ヲ同フシタル者ニシテ、時局ノ然ラシムル所赫々ノ功ヲ奏スルコト寡ナカリシト雖ドモ、諄々ノ忠ヲ王室ニ致シタルモノ舊公卿華族ノ如キハアラズ。故ニ王政維新トナルヤ、舊公卿華族ノ者祖先以來ノ舊勳ヲ錄セラレシ事ヲ期シタル者モ有之タル次第ニテ、當時朝廷ニ於テモ何トカ爲シ遣ハサレントノ思召アリタル證據ハ、明治四年正月華士族祿制改革被仰出候節、華族觸頭故大原從二位ヨリ舊公卿華族ニ傳ラレタル諭旨ニ、王政復古、大權、朝ニ歸シ、縉紳文武ノ職ヲ執ル、宜シク祿ヲ增シ給ヲ加ヘ貧窶ノ憂苦ヲ助ケ給ハントノ叡慮ハ素ヨリノ事ナレドモ云々トノ御沙汰アリタルヲ見テモ明ナリトス。然レドモ維新更始國用多緒ノ際、獨リ近臣ニ厚クシ玉フベキニアラザリシヲ以テ、增祿加給ノ事遂ニ止ミ、而シテ舊公卿華族ハ時世一般ノ影響ヨリシテ祖先傳來ノ采地ヲ收メラレ、永世下賜ノ祿ヲ廢止セラレ、下賜ノ邸宅スラ返還セシメラルヽ者アルニ至レリ。舊公卿華族ハ爾來單ニ金祿ノ利子ヲ以テ生計ヲ營ミ居リ候得共、素ヨリ少祿薄給ノ家柄ニ候得バ、元來貯蓄ノアルベキ樣ナク、質素儉約ヲ旨トスルモ稍々一家數口ヲ

支フルマテノ次第ナリシニ、近來ニ至リテハ傳來ノ邸宅ハ無論下賜ノ金祿スラ之ヲ喪失スルモノ多ク、甚ダシキハ卑賤ノ業ヲ營ミ、踈々トシテ今日ヲ過シ居候者モ亦少ナカラズ、其傳來ノ邸宅ナリ下賜ノ金賜祿ナリヲ喪失セシハ、經驗ナキ身ヲモ顧ミズ妄リニ商工ノ業ヲ試ミ、若クハ優ニ不斷ニ生活セシ自己ノ不注意ナリト謂フトキハ一ツモ愍諒スルニ足ルベキモノ無之候得共、經濟社會ノ事情ニ通ゼザル縉紳華族ガ時世ノ劇變ニ處シテ活計ノ術ヲ知ラザリシハ敢テ咎ムベキ事ニモ無之、又幕府ノ壓抑ヲ蒙リ京都豆小ノ天地間ニ人トナリ、學識自ラ薄ク事體ノ經驗ニ乏シキ舊公卿華族ガ、一朝活劇世界ニ出テ獨立生活スルノ器量ナキハ寧ロ當然ノ事ナリト云フモ敢テ不可ナキガ如シ。舊公卿華族ノ狀況概ネ此ノ如クニシテ、迚モ華族ノ體面ヲ保ツ能ハザルノミナラズ、子弟ノ教育モ常ニ不行屆勝ニテ、如何ニモ痛嘆ノ仕合ニ有之候。然ルニ維新以來屢々詔勅ヲ華族ニ下サレ、華族ハ四民ノ標準トナリ、名聲ヲ保チ皇室ニ盡スベキ旨ヲ以テセラレ、明治十七年五爵ノ制ヲ定メラルヽヤ、國家ニ忠誠ヲ致シ皇室ノ尊嚴ヲ扶翼スベキ旨ヲ誓ハシメ給ヒ、次テ明治二十二年二月憲法ヲ發布セラルヽヤ、貴族院ヲ置カレ、其議員ノ過半ハ華族ヲ以テ之ニ充テラルヽニ至レリ。華族ニ重キヲ置カレ義務ヲ負擔セシメラルヽコト此ノ如シ。舊公卿華族ノ者不敏ナリト雖ドモ日夜　聖慮ニ報答スル所以ノ道ヲ講ゼズンバアラズ。然レドモ上下何種ノ人タルヲ問ハズ、衣食住ニ餘裕ナキトキハ他ヲ顧ミルニ遑ナキハ古今ノ通情ナレバ、舊公卿華族ノ者モ目下ノ如キ窮乏日ニ迫リ貧困月ニ甚ダシキ狀態ニテハ、前途國家ニ　皇室ニ能ク報効シ得ルヤ否ヤ甚ダ懸念ノ仕合ニ有之候。而シテ社會ノ風潮ヲ觀察スレバ、門地ノ虛勢ハ全力ノ實權ニ又バズ、華族ガ如何ニ高尚ナル氣風ヲ有スルモ、又如何ニ勤王愛國ノ精神ヲ有スルモ、金力ノ之ガ作用ヲ助クルナクンバ社會ニ立チ人ト交際スルコトモ能ハザル次第ニ付　皇室ノ藩屏トナランコトモ國家ノ用ヲ爲サンコトモ殆ンド期スベカラザルノ望ト謂ハザルヲ得ズ。之ヲ要スルニ舊公家華族ニ對シテハ是迄數回ノ　聖諭モ有之候得者、國家ニ　皇室ニ報効シ得ル樣華族ノ體面ヲ保タシメラルヽノ御詮議有之候テ可然次第ニ有之、又從來皇室ト格別ノ御由緒モ有之儀ニ付、舊來ノ御由緒ニ對シテモ何トカ御待遇相成可然次第ニ有之、且ツ華族全體ノ體面上ヨリ之ヲ謂フモ、舊公卿華族ノ如キ貧困者ノ存在スルコトハ偶々華族全體ノ體面ヲ汚スノ恐レモ少ナカラズ、加之曩ニ勳功華族ヘ家祿賞典祿等ノ有無ニ拘ラズ華族ノ體面ヲ維持セシメラレンガ爲メ金圓ヲ下賜セラレ候次第モ有之候ニ付、舊公卿華族ヲ今日ノ儘ニ放任セラルヽ、事ハ甚ダ不權衡ト存ゼラレ候間、至急勳功華族ト同一ノ御取扱有之候樣何分ノ御詮議相成度、私共公爵華族之儀ハ曩ニ優渥ナル　御沙汰ヲ蒙リ候ニ付、今日默過致シ候儀ハ甚ダ不本意ト存ジ候ニ付敢テ鄙見ヲ開陳仕候間至急御上奏ノ上何分ノ御詮議有之候樣致シ度此段奉願候也。

明治二十五年四月

正四位公爵　近衞篤麿

從三位公爵　二條基弘
從三位公爵　鷹司熙通
從一位公爵　九條道孝

宮内大臣從二位子爵　土方允元殿

一般華族救助意見書

時世ノ變遷ニ從ヒ諸種ノ事情ニ遭遇シ追々家產ヲ蕩盡シ子弟ノ教育費ニ差支ヘ若クハ生活ニ困難ヲ訴フルモノヲ增加スルノ虞アルニ付、左ノ方法ヲ以テ一般華族ノ爲メ救助方法ヲ設ケタキ事。

一、六百五名ノ華族中公卿華族百三十八家ハ別ニ方法ヲ立ルモノト定メ、差引四百六十七名ノ華族中其十分ノ一半ハ生活ニ困難スルモノト見ルトキハ概數七十家アリ、此一家ニ就キ一箇年二百圓ヲ救助スルモノト見ルトキハ一萬四千圓ヲ要ス、此金圓ヲ得ル目的ヲ以テ三十萬圓ノ資本ヲ別途ニ積立テタキ事。

一、四百六十七名ノ華族中子弟教育費ノ貸與ヲ要スルモノヲ大凡百名ト見做シ、一名ニ就キ一箇年百圓ヅツヲ貸與スルト見ルトキハ一萬圓ヲ要ス、此金圓ヲ得ル目的ヲ以テ二十萬圓ノ資本ヲ別途ニ積立テタキ事。

一、右五十萬圓ノ内子弟教育費ニ要スル資本二十萬圓ハ華族會館ノ資本ヲ使用シ殘リ三十萬圓ハ別途ニ御工夫願度事。

舊公卿華族年代表

千年以上	一家	十一家
九百年以上	三家	三家
八百年以上	九家	九家
七百年以上	十二家	十二家
六百年以上	二十家	二十家
五百年以上	九家	九家
四百年以上	四家	四家
三百年以上	二家	二家
二百年以上	六十一家	六十一家
二百年以下	七家	七家

〆總計百三十八家（公爵華族七家ヲ除クトキハ百三十一家トナル）

第一

舊堂上華族ヘ公債下賜ニ付御沙汰書之事

第二

整理公債下賜ノ御旨意奉戴ノ請書ヲ差出スベシ

第三

下賜整理公債ハ悉皆襲財産トナスベシ

第四

此世襲財産ハ他ノ種類ト交換スルコトヲ得ズ

第五

下賜整理公債ハ自今十五ケ年間内藏寮ニ於テ保管スベシ

但利子ハ六月十二月兩度ニ下渡スベシ

第六

内藏寮保管期限中ハ如何樣ナル事故アルトモ下渡シヲ願出ル事ヲ得ズ

第七

整理公債下賜ハ第一新ノ際ノ堂上華族タル者ニ限ル

但奈良華族ノ類モ之ニ準ス

第八

御一新後願ニ依リ分家ノ者ヘハ下シ賜ハラズ

第九

利子配當剩餘金（六朱公債利子）貳千圓ハ別ニ積立置キ臨時救助ノ金ニ充ツ

但六朱公債當籤マデニ限ル

第十

整理公債下賜ハ爵毎ニ同一ノ額ヲ定メ家祿ノ多寡ニ關係セズ

第十一

自家經濟ノ都合ニ依リ現今第十五國立銀行株其他諸會社株類所持セザル者ト雖モ下賜ノ公債ハ增額セザルモノトス

第十二

下賜ノ公債ハ他人ニ分割讓與及ビ負債ノ爲メ書入抵當トナスコトヲ得ズ

（甲）

侯　拾貳家　五萬圓宛
伯　三拾家　參萬五千圓宛
子　八拾九家　貳萬圓宛
男　四拾壹家　壹萬圓宛
合計　參百八拾九萬圓　六拾萬圓
此五朱利　百五萬圓
拾九萬四千五百圓　百七拾八萬圓
四拾壹萬圓

（乙）

侯　拾貳家
壹家ニ付五朱利整理公債　貳萬圓宛

貳拾四萬圓
壹家收入壹千圓

伯　三拾家
壹家ニ付同斷　壹萬五千圓宛
四拾五萬圓
壹家收入七百五拾圓

子　八拾九家
壹家ニ付同斷　壹萬圓宛
八拾九萬圓
壹家收入五百圓

男　四拾壹家
壹家ニ付同斷　五千圓宛
貳拾萬五千圓
壹家收入貳百五拾圓

此ヘ引當
五朱利整理公債額面百五拾八萬五千圓

外二

客歳下賜ノ六朱公債貳拾萬圓ヲ此元金ニ充ツ

合計元金

百七十八萬五千圓

此五朱利七萬九千二百五拾圓

六朱利　壹萬貳千圓

合計收利

九萬千貳百五拾圓

侯爵

廣幡忠禮
醍醐忠順
德大寺實則
久我通久
西園寺公望
四條隆謌

伯爵

菊亭修季
中御門經明
嵯峨公勝
中山孝麿
花山院忠遠
大炊御門幾麿

以上十二戸

山科言縄
東久世通禧
柳原前光
飛鳥井雅望
油小路隆晃
西三條公允
園基祥

壬生基修
滋野井公壽
鷲尾隆聚
中院通規
冷泉爲紀
葉室長邦
正親町實正
大原重朝
萬里小路通房
坊城俊章
甘露寺義長
勸修寺顯允
姉小路公義
廣橋賢光
澤宣量
日野資秀

子爵

庭田重直
烏丸光亨
清閑寺經房
清水谷實英
橋本實梁
松本宗隆
室町公夫

以上三十戸

萩原員光
長谷信篤
三室戸雄光
梅溪通善
慈光寺有仲
梅園實紀

北小路隨光
清岡長說
交野時萬
白川資訓
堀河康隆
倉橋泰顯
町尻量衡
高丘紀季
六角博通
石野基佑
園池公靜
高辻修長
五條爲榮
富小路敬直
千種有任
辻安仲

勘解由小路資生
平松時厚
石山基正
綾小路有良
伏原宣足
風早公紀
中園實受
堤功長
押小路公亮
藤波言忠
西四辻公業
竹屋光昭
東園基愛
河鰭實文
裏松良光
西洞院信愛

西大路隆脩
冷泉爲柔
錦織教久
桑原輔長
高松實村
山本實庸
藤井行德
植松雅平
竹内惟忠
久世通章
唐橋在正
日野西光善
六條有熙
大宮以季
穗波經藤
北小路俊親

無爵

豐岡道雄

以上八十七戸

男爵

總計百三十戸

錦小路益子

以上一戸

子爵

西五辻文仲
梶野行篤
小松行正
南岩倉具威

以上四戸

今園國映
竹園康長
中川興長

太秦康
松林爲美
松園尙嘉
藤大路納親
藤枝雅之
栗田口定孝
相樂綱
北大路公久
北河原公平
南光利
水谷川忠起
芝小路豐俊
芝亭愛古
鹿園實博
杉溪言長
穗穰俊
香

水無瀨忠輔
今城定德
野宮定穀
七條信義
高倉永則
土御門晴榮
愛宕通則
舟橋遂賢
藤谷爲寬
持明院基哲
樋口誠康
梅小路定行
離波宗美
東坊城德長
入江爲守
山井兼文

八條隆邦
高野宗順
岡崎鷹麿
石井行昌
小倉英麿
藪篤麿
裏辻彦六郎
花園公季
櫛笥隆督
芝山祐豊
外山光庸
阿野季忠
武者小路公共
池尻基房
吉田良正
櫻井義功

舊高四百十石四斗餘
現穀三百八十一石
此金祿　二千三百一圓二十八錢六厘
同　七百十五石二斗
同　四百七十石
同　二千八百三十八圓八十五錢六厘四毛
同　四百三石餘
同　三百五十七石六斗
同　千七百二十八圓六十三錢二厘
同　千六百五十五石餘
同　六百九十一石四斗
同　四千百七十六圓十三錢八厘九毛
同　五百石
同　四百七十五石三斗
同　二千八百七十圓八十六錢九厘
舊公卿華族救助賜金ノ件

德大寺公純
花山院家威
大炊御門家信
菊亭脩季
廣幡忠禮

舊高三百十二石八斗餘
現穀五百廿二石
此金祿　千九百四十四圓九十一錢八厘六毛
同　五百石
同　三百九十三石六斗
同　千九百二圓六十六錢六厘
同　二百石
同　二百九十八石
同　千八百圓四十三錢五厘
同　五百二石餘
同　三百七十二石三斗
同　二千二百四十八圓七十三錢七厘
同　三百五十五石九斗
同　三百五十一石七斗
同　二千百二十四圓三十一錢

醍醐忠順
中院通富
瑳珮實愛
三條西公充
正親町實德

總計二十四戶

以上二十戶

河邊隆次

華族舊高及金祿

舊高二千八百六十石餘
現穀千四百六十九石五斗
此金祿　八千八百七拾五圓九拾五錢六厘三毛四系
同　三千四十三石餘
同　千二百九十七石九斗
同　七千八百參拾九圓四拾七錢壹厘七毛四絲八忽
同　千七百八石餘
同　八百十八石
同　四千九百四十圓八十一錢八厘

舊公卿華族救助賜金ノ件

近衞忠熙
九條道孝
二條齊敬

舊高二千四十四石
現穀七百六十五石四斗
此金祿　四千拾九圓九錢六厘
同　千五百石
同　五百廿六石七斗
同　二千五百四十六圓七錢三厘
同　七百石
同　四百八十三石
同　二千三百三十四圓八十二錢六厘八毛三絲
同　四百七十二石餘
同　三百七十五石四斗
同　二千二百三十七圓四十六錢一厘
同　五百九十七石餘
同　四百六十五石八斗

○

一條忠貞
鷹司輔熙
久我建通
三條實美
西園寺公望

舊高百五十石
現穀二百八十九石
此金祿　千三百九十七圓五錢四厘九毛
同　百七十五石餘
同　二百六十四石
同　千二百七十六圓十七錢九厘
同　百三十石
同　二百五十九石一斗
同　千五百六十四圓九十九錢五厘
同　百三十石
同二百五十四石八斗
同　千五百三十九圓二錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽

舊公卿華族救助賜金ノ件

梅園實好
山本實政
大宮以季
武者小路公季
風早公紀

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢五毛
同　百五十石餘
同　二百六十八石
同　千六百十八圓五錢二厘一毛六絲
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘
同　百三十石
同　二百五十五石二斗
同　千二百三十三圓六十三錢九厘

高松保實
園池公靜
藪實方
西四辻公恪
中園實受

舊高百八十石
現穀二百六十二石
此金祿　千二百七十圓三十七錢八厘
同　二百石餘
同　二百八十七石三斗
同　千七百三十六圓三十二錢六厘
同　二百石餘
同　二百八十四石
同　千七百十五圓三十九錢四厘〇八絲
同　二百石
同　二百八十二石
同　千七百八圓十四錢六厘
同　百五十石
同　二百六十二石
同　千二百六十六圓五十一錢〇〇六絲二忽

舊公卿華族救助賜金ノ件

滋野井實在
姉小路公義
清水谷公正
室町公賀
小倉輔季

舊高百五十石
現穀二百七十二石
此金祿　千六百四十二圓九十一錢二厘
同　百五十石
同　三百三十四石
同　二千十七圓四十錢〇〇八絲
同　五百石
同　三百六十九石一斗
同　二千二百二十九圓四十錢八厘
同　百五十石
同　二百四十八石九斗
同　千二百三圓十八錢五厘
同　百五十石
同　二百七十四石二斗
同　千三百二十五圓四十八錢六厘

川鰭實文
阿野公誠
橋本實麗
花園實延
裏辻公愛

舊高百三十石
現穀二百六十二石八斗
此金祿　千五百八十七圓三十四錢三厘五毛三絲六忽
同　百五十石
同　二百六十一石一斗
同　千六十四圓四十四錢五厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘

舊公卿華族救助賜金ノ件

壬生基修
高野保健
石野基安
石山基文
六角博通

舊高三百石
現穀三百十石
此金祿　千四百九十八圓五十四錢三厘
同　百五十石
同　二百六十石五斗
同　千五百七十三圓四十五錢
同　二百石
同　二百九十九石五斗
同　千四百四十七圓七十八錢六厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同千五百三十四圓七十九錢四厘
同　千百五十三石餘
同　六百十八石五斗
同　二千九百八十九圓八十三錢五厘

冷泉爲理
冷泉爲柔
藤谷爲遂
入江爲福
日野資宗

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　二百石
同　二百八十石六斗
同　千六百九十四圓八十五錢六厘
同　九百廿八石餘
同　四百五十石八斗
同　二千百七十九圓十六錢七厘
同　三百石
同　三百七石三斗
同　千四百八十五圓四十九錢一厘
同　百五十石
同　二百八十九石六斗
同　千三百九十九圓九十二錢九厘二毛九絲六忽
舊公卿華族救助賜金ノ件

高丘紀季
中山忠能
飛鳥雅典
難波宗禮
野宮定功

舊高百八十五石餘
現穀二百七十九石八斗
此金祿　千三百五十二圓五十五錢四厘
同　三百四十一石餘
同　三百十二石九斗
同　千八百八十九圓九十五錢四厘
同　二百石
同　二百七十四石二斗
同　千三百二十五圓八十四錢〇〇五絲四忽
同　百八十七石
同　二百九十石五斗
同　千四百四圓二十八錢
同　百八十石
同　二百七十石九斗
同　千三百九圓五十三錢三厘

今城定章
松木宗有
持明院基靜
園基祥
東園基敬

舊高八百五十石餘
現穀五百三十石七斗
此金祿　三千二百五圓四十九錢二厘
同　九百五十四石餘
同　四百五十七石三斗
同　二千七百六十二圓十四錢六厘八毛
同　二百二石餘
同　三百十九石九斗
同　九百三十二圓三十二錢七厘九毛九絲
同　百八十石
同　二百八十一石六斗
同　千七百圓八十九錢七厘七毛
同　二百石
同　二百八十九石二斗
同　千七百四十六圓八十錢三厘
舊公卿華族救助賜金ノ件

廣橋胤保
烏丸光德
柳原光愛
竹屋光有
日野西光善

舊高百三十石
現穀二百七十三石八斗
此金祿　千六百五十三圓七十八錢五厘
同　百三十石
同　二百四十九石六斗
同　千五百七圓六十一錢四厘
同　百三十石
同　二百六十四石七斗
同　千二百七十九圓五十六錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘九毛九絲

勸解由小路資生
裏松恭光
三室戸陳光
外山光輔
豐岡隨資

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千五百三十四圓七十九錢四厘
同　二百石
同　二百五十七石五斗
○
同　百八十三石
同　二百八十石一斗
同　千三百五十四圓〇〇六厘
同　七百廿六石餘
同　四百八十五石七斗
同　二千三百四十七圓八十七錢九厘
同　三百九十石餘
同　三百廿六石六斗
同　千九百七十二圓七十錢三厘二毛

舊公卿華族救助賜金ノ件

北小路隨光
甘露寺義長
葉室長順
勸修寺顯允
萬里小路博房

舊高百八十石
現穀二百九十一石三斗
此金祿　千四百八圓十四錢八厘
同　二百石
同　二百六十五石六斗
同　千六百四圓二十五錢五厘九毛
同　百八十石
同　二百七十石二斗
同　千六百三十二圓四錢四毛
同　百石
同　二百八十一石三斗
同　千三百五十九圓八十錢七厘
同　百三十石
同　二百六十一石七斗
同　千二百六十五圓六錢

清閑寺豐房
中御門經之
坊城俊政
芝山慶豐
押小路實潔

舊高五十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿千二百二十八圓三十二錢二厘
同　五十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘九絲二忽

舊公卿華族救助賜金ノ件

池尻知丸
梅小路榮丸
岡崎國有
穗波經度
堤功長

舊高二百石
現穀二百八十六石
此金祿　千七百二十七圓四十七錢四厘三絲二忽
同　二百六十五石餘
同　三百廿三石
同　千五百六十一圓三十八錢五厘二毛三絲
同　二百石
同　二百九十三石七斗
同　千四百十九圓七十四錢八厘七毛三絲餘
同　百五十石
同　二百七十石
同　千三百四十三圓八十五錢四厘七毛八絲
同　百五十石
同　二百八十六石五斗
同　千七百三十圓四十九錢四厘三毛八絲

富小路敬直
六條有容
久世通熙
岩倉具慶
千種有任

舊高百五十石
現穀二百六十六石三斗
此金祿　千二百八十七圓廿九錢六厘八毛九絲
同　百三十石
同　二百六十二石八斗
同　九千五百二十七圓八十三錢五厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘
同　百三十石
同　二百六十四石六斗
同　千二百七十九圓七錢九厘
同　三百五十石餘
同　三百三十九石九斗
同　二千五十三圓三錢七厘

舊公卿華族救助賜金ノ件

梅溪通善
愛宕通祐
東久世通禧
植松雅言
庭田重胤

舊高二百石
現穀二百九十五石五斗
此金祿　千四百十二圓四十四錢九厘九毛五絲五忽
綾小路有長

同　二百石
同　二百七十一石六斗
同　千六百四十圓四十九錢七厘
五辻高仲

同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘五毛
大原重德

同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲九忽
慈光寺有仲

同　二百石
同　二百六十九石三斗
同　千六百二十六圓八十三錢五厘九毛
白川資訓

舊高百八十七石餘
現穀二百八十一石一斗
此金祿　千三百五十八圓八十四錢
竹内治則

同　二百石
同　二百八十五石一斗
同　千七百二十二圓三錢八厘
高辻修長

同　百七十一石
同　二百八十七石五斗
同　千七百三十六圓五十三錢四厘五毛
五條爲榮

同　三百一石
同　三百十七石五斗
同　千五百三十四圓七十九錢八厘
東坊城任長

同　百八十二石餘
同　二百八十三石九斗
同　千四百四十六圓六十錢九厘
唐橋在光

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　二百六十石
同　二百九十三石三斗
同　五百三十一圓六十八錢六毛二絲
同　二百石
同　二百九十二石一斗
同　千四百十二圓一錢四厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘

清岡長熙
桑原輔長
西洞院信堅
平松時言
長谷信篤

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽
同　百三十石
同　二百六十二石五斗
同　千二百六十八圓九十二錢八厘
同　四百石
同　三百二十石
同　千五百四十六圓八十八錢三厘
同　二百三十石
同　三百三石五斗
同　千八百三十二圓十七錢六厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘

交野時萬
石井行知
舟橋康賢
伏原宣諭
澤爲量

舊公卿華族救助賜金ノ件

舊高百八十三石餘
現穀二百九十五石
此金祿　千七百八十一圓八十三錢五厘四毛　土御門晴雄
同　百五十石
同　二百七十六石三斗　倉橋泰聰
同　千三百三十五圓六十三錢七厘
同　百七十三石六斗
同　二百八十四石　藤波教忠
同　千七百十五圓三十九錢四厘
同　七百六十石餘
同　四百三十八石四斗　吉田良義
同　二千六百四十七圓九十八錢八厘
同　千石
同　四百八十三石六斗　萩原員光
同　二千九百二十一圓二厘三絲

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十石一斗
此金祿　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽　錦織久隆
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗　藤井行道
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗　錦小路賴吉
同　千五百三十四圓九十九錢四厘〇九絲四忽
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗　北小路俊昌
同　千二百二十八圓三十二錢一厘九毛四絲一忽
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗　松寄萬長
同　千五百三十四圓七十九錢四厘九絲二忽

舊高四十石
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千二百二十八圓三十二錢一厘九毛四絲一忽
同　四十石
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲
同　四十石
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　四十石
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘

岩倉具經
西五辻文仲
南岩倉具義
北畠通城
玉松眞弘

舊高三十石三人扶持
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　四十石
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　四十石
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘
同　五十九石餘
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢一厘九毛四絲一忽
同　百石二升
同　廿五石　終身祿
同　三百七十八圓十一錢五毛

舊公卿華族救助賜金ノ件

若王子遠文
梶野行篤
小松行敏
北小路俊親
壬生輔世

舊高百八十石
現穀二百七十九石三斗
此金祿　千六百八十七圓五厘五毛
同　三百石
同　三百十石九斗
同　千五百二圓八十九錢六毛
同　百八十石
同　二百六十九石
同　千三百圓三十四錢九厘
同　百五十石餘
同　二百七十五石七斗
同　千三百三十二圓七十四錢
同　百八十三石餘
同　二百八十四石七斗
同　千三百七十六圓二十四錢三厘

四條隆謌　山科言綱　鷲尾隆聚　油小路隆晃　櫛笥隆韶

舊高百石
現穀二百五十三石
此金祿　二百二十八圓五厘
同　百五十石
同　二百六十八石
同　千二百九十五圓五十三錢九厘
同　六百三十一石餘
同　四百五十石
同　二千百七十五圓三十錢
同　二百石
同　二百八十二石八升
同　千三百六十七圓五錢八厘
同　三十石三人扶持
同　二百五十四石一斗
同　千二百二十八圓三十二錢二厘

舊公卿華族救助賜金ノ件

西大路隆意　八條隆吉　垂水瀨經家　七條信祖　町尻量輔

舊高三十石三人扶持　櫻井供茂
現穀二百五十四石一斗
此金祿　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽
同　三十石三人扶持　山井氏暉
同　二百五十四石一斗
同　千五百三十四圓七十九錢四厘四毛九絲二忽
同　八百十三石餘　高倉永則
同　五百三十九石四斗
○
同　百八十石　堀河親賀
同　二百七十六石九斗
同　千六百七十二圓五十錢九厘
同　二百石　樋口靜康
同　二百九十三石三斗
同　千七百七十一圓六十四錢八厘一毛

舊高四萬八千三百九十九石九斗二升
總計
舊祿卽現穀千四百三十石ト百五人扶持　現穀五萬千九百九十四石一斗

總計

金祿二十五萬四千四百七十四圓〇四錢七厘〇六絲六忽
外〇印計一萬三千七百八十一圓七十一錢四厘五毛四絲二忽ハ追テ可取調分

一、年々金十五萬圓ヲ受領シ十ケ年間年五朱ノ利子ニテ毎半期ニ利子ヲ元金ニ加ヘ計算スルトキハ十ケ年ニテ金百九十八萬七千九百六圓六十一錢四厘トナル其計算別表ノ如シ。

一、表中第一段ハ各家固有ノ祿券及賞典祿ノ內千圓未滿ノ端數ヲ切捨タル高ナリ同段中空白ノ分ハ新家ニシテ固有祿券無之モノナリ。

一、甲案ハ祿券ノ有無ヲ不問侯爵ヘ五萬圓、伯爵ヘ三萬五千圓、子爵ヘ二萬圓男爵ヘ一萬圓之四等ニ分チ卽チ四爵ヘ給與スベキ金高也合計金三百八十七萬五千圓トナル。

一、乙案ハ固有祿券ヲ合算シ甲案ノ四等ニ分チ卽チ四爵ヘ補助スベキ金高也合計金二百〇五萬七千圓トナル。

一、丙案ハ祿券ノ有無ヲ不問侯爵ヘ三萬圓伯爵ヘ二萬圓子爵ヘ一萬圓男爵ヘ五千圓ノ四等ニ分チ卽チ四爵ヘ給與スベキ金高也合計金二百〇七萬五千圓トナル。

戸之圓萬五拾

年限	元金	利足	合計
初年上	150,000 000	3,750 750	
初年下	153,750 000	3,843 750	157,593 750
二年上	157,593 750 (150,000 000)	7,689 844	
二年下	315,283 594	7,882 090	323,165 684
三年上	332,165 684 (150,000 000)	11,829 142	
三年下	484,994 826	12,124 871	497,119 697
四年上	497,119 697 (150,000 000)	16,177 992	
四年下	663,287 689	19,580 942	679,818 631
五年上	679,818 631 (150,000 000)	20,745 466	
五年下	850,564 097	21,264 102	871,828 199
六年上	871,828 199 (150,000 000)	25,545 705	
六年下	1,047,373 904	26,184 348	1,073,558 252
七年上	1,073,558 252 (150,000 000)	30,588 956	
七年下	1,254,147 208	31,353 680	1,285,500 888
八年上	1,285,500 888 (150,000 000)	35,887 522	
八年下	1,471,388 410	36,784 710	1,508,173 120
九年上	1,508,173 (150,000 000)	41,454 328	
九年下	1,699,627 448	42,490 686	1,742,118 134
十年上	1,742,118 132 (150,000 000)	47,302 953	
十年下	1,939,421 087	48,485 527	1,987,906 614
			1,987,906 614

（）ヲ附シタルモノハ朱書ニヨルモノ

一、丁案ハ固有祿券ヲ合算シ丙案ノ四等ニ分チ卽チ四爵ヘ補助スベキ金高也合計四十三萬千圓トナル。

一、此取調ハ秘密ヲ要シ且材料ニ乏シク故ニ爵人名祿券高等之遺漏錯誤ハ到底免ルヽコト能ハズ。

舊新公家竝奈良華族家産調

祿券高	甲	乙	丙	丁	侯爵家
二萬圓	五萬圓	三萬圓	三萬圓	一萬圓	廣幡忠禮
一萬四千圓	同	三萬六千圓	同	一萬六千圓	醍醐忠順
一萬七千圓	同	三萬三千圓	同	一萬三千圓	德大寺實則
二萬三千圓	同	二萬七千圓	同	七千圓	久我通久
二萬三千圓	同	二萬七千圓	同	七千圓	西園寺公望
三萬圓	同	二萬圓	同	○	菊亭修季
二萬八千圓	同	二萬二千圓	同	二千圓	中御門經明
二萬三千圓	同	二萬七千圓	同	七千圓	嵯峨公勝
三萬九千圓	同	一萬千圓	同	○	中山孝麿

二萬圓	五萬圓	三萬圓	一萬圓
一萬二千圓	同	三萬八千圓	同
一萬六千圓	同	三萬四千圓	同
小計	小計	小計	小計
二十六萬五千圓	六十萬圓	三十三萬五千圓	三十六萬圓

祿券高	甲	乙	丙	丁	伯爵家
一萬千圓	三萬五千圓	二萬四千圓	二萬圓	九千圓	山科言綱
二萬二千圓	同	一萬三千圓	同	○	東久世通禧
一萬七千圓	同	一萬八千圓	同	三千圓	柳原前光
一萬六千圓	同	一萬九千圓	同	四千圓	飛鳥井雅望
九千圓	同	二萬六千圓	同	一萬千圓	油小路隆晃
一萬六千圓	同	一萬九千圓	同	四千圓	西三條公允
一萬圓	同	二萬五千圓	同	一萬圓	園基祥
九千圓	同	二萬六千圓	同	一萬千圓	滋野井公壽
一萬千圓	同	二萬四千圓	同	九千圓	鷲尾隆聚

一萬四千圓	二萬千圓	二萬圓	六千圓	中院通規	
一萬千圓	二萬四千圓	同	九千圓	冷泉爲紀	
一萬二千圓	二萬三千圓	同	八千圓	葉室長邦	
一萬五千圓	二萬千圓	同	五千圓	正親町實正	
一萬二千圓	二萬三千圓	同	八千圓	大原重朝	
一萬四千圓	二萬千圓	同	六千圓	萬里小路通房	
一萬二千圓	二萬三千圓	同	八千圓	坊城俊章	
一萬千圓	二萬五千圓	同	一萬圓	清閑寺盛房	
一萬千圓	二萬四千圓	同	九千圓	甘露寺義長	
一萬七千圓	一萬八千圓	同	三千圓	勸修寺顯允	
同	三萬五千圓	同	二萬圓	清捿家教	
一萬三千圓	二萬二千圓	同	七千圓	姉小路公義	
二萬三千圓	一萬二千圓	同	○	廣橋賢光	
二萬千圓	一萬四千圓	同	○	日野資秀	
一萬五千圓	二萬圓	同	五千圓	庭田重直	
二萬圓	一萬五千圓	同	○	烏丸光亨	

清水谷實英	五千圓	二萬圓	三萬五千圓	一萬五千圓
橋本實顯	二千圓	一萬七千圓	同	一萬八千圓
松木宗隆	六千圓	二萬千圓	同	一萬四千圓
室町公大	八千圓	二萬三千圓	同	一萬二千圓
壬生基修	六千圓	二萬千圓	同	一萬四千圓
澤宣量	千圓	一萬六千圓	同	一萬九千圓
小計	十九萬三千圓	小計 六十五萬二千圓	小計 百八萬五千圓	小計 四十三萬三千圓
三十一家				

爵家	丁	丙	乙	甲	祿券高
萩原員光	○	一萬圓	○	二萬圓	二萬千圓
長谷信篤	千圓	同	一萬千圓	同	九千圓
三室戸雄光	千圓	同	一萬千圓	同	九千圓
梅溪通喜	千圓	同	一萬千圓	同	九千圓
藤井行德	○	同	九千圓	同	一萬千圓
慈光寺有仲	○	同	九千圓	同	一萬千圓

梅園實紀	○	千圓	一萬圓	一萬圓
石山基文	○	千圓	同	一萬千圓
北小路隨光	○	千圓	同	一萬千圓
交野時萬	○	千圓	同	一萬千圓
白川資訓	○	千圓	同	一萬千圓
堀河康隆	○	千圓	同	一萬千圓
清岡長說	千圓	千圓	同	一萬千圓
倉橋泰顯	○	千圓	同	一萬千圓
町尻量衡	千圓	千圓	同	一萬千圓
高丘紀季	千圓	千圓	同	一萬千圓
六角博通	千圓	千圓	同	一萬千圓
園池公靜	○	千圓	同	一萬千圓
石野基佑	千圓	千圓	同	一萬千圓
高辻修長	○	千圓	同	一萬千圓
五條爲榮	○	千圓	同	一萬千圓
富小路敬直	○	千圓	同	一萬千圓

一萬二千圓	二萬圓	八千圓	一萬圓	○	千種有任
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	五辻安仲
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	勘解由小路資生
一萬千圓	同	九千圓	同	○	平松時厚
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	綾小路有良
一萬千圓	同	九千圓	同	○	豐岡健資
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	伏原宣足
一萬千圓	同	九千圓	同	○	風早公紀
九千圓	同	一萬千圓	同	一千圓	中園實受
一萬千圓	同	九千圓	同	○	堤功長
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	押小路公亮
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	藤波言忠
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	西四辻公業
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	竹屋光昭
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	東園基愛
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	河鰭實文

一萬千圓	二萬圓	九千圓	一萬圓	○	裏松良光
一萬圓	同	一萬圓	同	○	西洞院信愛
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	西大路隆修
一萬千圓	同	九千圓	同	○	冷泉爲柔
一萬千圓	同	九千圓	同	○	錦織教久
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	桑原輔長
一萬千圓	同	九千圓	同	○	高松實村
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	藪篤磨
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	山本實庸
九千圓	同	一萬千圓	同	千圓	植松雅平
一萬圓	同	一萬圓	同	○	竹内惟忠
一萬圓	同	一萬圓	同	○	久世通章
一萬二千圓	同	八千圓	同	○	唐橋在正
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	日野西光善
一萬三千圓	同	七千圓	同	○	野宮定穀
一萬千圓	同	九千圓	同	○	六條有煕

大宮以季	一萬圓	○	
穗波經藤	同	○	
北小路俊親	同	千	圓
水無瀨忠輔	同	○	
今城定德	同	○	
七條信義	同	○	
高倉永則	同	○	
土御門晴榮	同	○	
愛宕通則	同	千	圓
舟橋遂賢	同	○	
藤谷爲寬	同	○	
持明院基哲	同	千	圓
樋口誠康	同	○	
梅小路定行	同	千	圓
東坊城德長	同	○	
入江爲守	同	○	
大宮以季	一萬二千圓	八千	圓
穗波經藤	同	一萬千	圓
北小路俊親	同	四千	圓
水無瀨忠輔	同	一萬	圓
今城定德	同	一萬	圓
七條信義	同	○	
高倉永則	同	一萬	圓
土御門晴榮	同	七千	圓
愛宕通則	同	一萬千	圓
舟橋遂賢	同	九千	圓
藤谷爲寬	同	一萬	圓
持明院基哲	同	一萬千	圓
樋口誠康	同	七千	圓
梅小路定行	同	一萬千	圓
東坊城德長	同	九千	圓
入江爲守	同	九千	圓

難波宗美	一萬圓	○	
山井兼文	同	千	圓
八條隆邦	同	千	圓
高野宗順	同	千	圓
岡崎鷹磨	同	○	
石井行昌	同	千	圓
小倉英磨	同	千	圓
裏辻彥六郎	同	千	圓
花園公季	同	千	圓
櫛笥隆督	同	○	
芝山祐豐	同	○	
外山光庸	同	千	圓
阿野季忠	同	○	
武者小路公共	同	○	
池尻基房	同	千	圓
吉田良正	同	○	
難波宗美	一萬千圓	九千	圓
山井兼文	同	一萬千	圓
八條隆邦	同	一萬千	圓
高野宗順	同	一萬千	圓
岡崎鷹磨	同	九千	圓
石井行昌	同	一萬千	圓
小倉英磨	同	一萬千	圓
裏辻彥六郎	同	一萬千	圓
花園公季	同	一萬千	圓
櫛笥隆督	同	一萬	圓
芝山祐豐	同	一萬	圓
外山光庸	同	一萬千	圓
阿野季忠	同	五千	圓
武者小路公共	同	九千	圓
池尻基房	同	一萬千	圓
吉田良正	同	九千	圓
難波宗美	二萬圓	九千	圓
山井兼文	同	一萬千	圓
八條隆邦	同	一萬千	圓
高野宗順	同	一萬千	圓
岡崎鷹磨	同	九千	圓
石井行昌	同	一萬千	圓
小倉英磨	同	一萬千	圓
裏辻彥六郎	同	一萬千	圓
花園公季	同	一萬千	圓
櫛笥隆督	同	一萬	圓
芝山祐豐	同	一萬	圓
外山光庸	同	一萬千	圓
阿野季忠	同	九千	圓
武者小路公共	同	一萬千	圓
池尻基房	同	九千	圓
吉田良正	同	一萬九千	圓

男爵家	禄券高	甲	乙	丙	丁
櫻井義功	一萬千圓	二萬圓	九千圓	一萬圓	○
岩倉具明	一萬三千圓	同	七千圓	同	○
錦小路益子	一萬千圓	同	九千圓	同	○
小計 八十九家	小計 九十八萬五千圓	小計 百七十八萬圓	小計 八十萬圓	小計 八十九萬圓	小計 二萬八千圓
松園尚嘉	七千圓	一萬圓	三千圓	五千圓	○
西五辻文仲	九千圓	同	千圓	同	○
水谷川忠起	九千圓	同	千圓	同	○
若王子遠文	九千圓	同	千圓	同	○
藤大路納親	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
粟田口定孝	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
北河原公憲	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
今園國映	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
中川興長	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
藤枝雅之	二千圓	一萬圓	八千圓	五千圓	三千圓
梶野行篤	七千圓	同	三千圓	同	○
松崎萬長	一萬千圓	同	○	同	○
玉松眞幸	九千圓	同	千圓	同	○
中御門經隆		同	一萬圓	同	五千圓
西高辻信嚴		同	一萬圓	同	五千圓
萬里小路正秀		同	一萬圓	同	五千圓
壬生桄夫	五千圓	同	五千圓	同	○
河邊隆次	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
穗穙俊香	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
杉溪言長	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
太秦供康	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
北小路公久	千圓	同	九千圓	同	四千圓
鹿園實博	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
松林爲美	千圓	同	九千圓	同	四千圓
坊城俊延		同	一萬圓	同	五千圓

鷲尾隆順		一萬圓	一萬圓	五千圓	五千圓
河邊博長	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
小松行正	七千圓	同	三千圓	同	○
南光利	千圓	同	九千圓	同	四千圓
相樂綱	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
南岩倉具威	九千圓	同	千圓	同	○
鶴殿忠善		同	一萬圓	同	五千圓
竹園康長	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
岩倉具德		同	一萬圓	同	五千圓
芝小路豐俊	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
北小路梅丸	一萬千圓	同	○	同	○
芝亭愛古	二千圓	同	八千圓	同	三千圓
東三條實敏		同	一萬圓	同	五千圓
押小路師行		同	一萬圓	同	五千圓
北畠克通	一萬千圓	同	○	同	○
正親町季董	四千圓	同	六千圓	同	千圓

	小計	合計
	十四萬三千圓	百八十二萬二千圓
	四十一萬圓	三百八十七萬五千圓
	二十七萬圓	二百五萬七千圓
	二十萬五千圓	二百七萬五千圓
	十萬六千圓	四十一萬千圓
	四十一家	百七十三家

公　五家　但三條岩倉家ハ除ク

五萬圓宛

貳拾五萬圓

侯　十二家

三萬圓宛

參拾六萬圓

伯　二十九家　清棲ハ除ク

壹萬圓宛

貳拾九萬圓

子　八十九家

八千圓宛
七拾壹萬貳千圓
男　四十一家
五千圓宛
貳拾萬五千圓
合　計　百八拾壹萬七千圓

一、願ニ依リ分家叙爵ノ者ハ除ク
一、男爵ハ奈良舊僧侶ニテ還俗者ニ限ル

侯

廣幡　醍醐　德大寺　久我　西園寺
菊亭　花山院　大炊御門
同勳功ニ依テ
四條　中御門　嵯峨　中山
伯
山科　柳原　飛鳥井　油小路　西三條

園　滋野井　鷲尾　中院　冷泉
葉室　正親町　萬里小路　坊城　清閑寺
甘露寺　勸修寺　姉小路　廣橋　日野
庭田　烏丸　清水谷　橋本　松木
室町
同勳功ニ依テ
東久世　壬生　大原
子　八拾九家
男　四十一家

侯爵ニ金參萬圓宛伯爵ニ金貳萬圓宛子爵ニ金壹萬圓宛受領スルトキハ侯爵十一家伯爵三十家子爵八十六家合計百二十七家ニテ金百七十九萬圓トナルコト左表ノ如シ。

侯爵	十一家	一家ニ付	金三萬圓
伯爵	三十家	同	金二萬圓
子爵	八十六家	同	金一萬圓
合計	百二十七家		金百七十九萬圓

戸之圓萬九十七百

	元金	利息	合計
初年上	135,200,000	3,380,000	
初年下	138,500,000	3,464,500	142,044,500
二年上	142,044,500 (135,200,000)	6,931,113	
二年下	284,175,613	7,104,390	291,280,003
三年上	291,280 (135,200,000)	10,662,000	
三年下	437,142,003	10,928,550	448,070,553
四年上	448,070,553 (135,200,000)	14,581,764	
四年下	597,852,317	14,946,308	612,798,625
五年上	612,798,625 (135,200,000)	18,699,966	
五年下	766,698,591	19,169,465	785,866,056
六年上	785,866,056 (135,200,000)	23,026,651	
六年下	944,092,707	23,602,318	967,695,025
七年上	967,695,025 (135,200,000)	27,572,376	
七年下	1,138,467,401	28,261,685	1,158,726,086
八年上	1,158,727,086 (135,200,000)	32,348,227	
八年下	1,326,277,313	33,156,933	1,356,434,246
九年上	1,359,434,246 (135,200,000)	27,365,856	
九年下	1,532,000,102	38,300,003	1,570,300,105
十年上	1,570,300,105 (135,200,000)	42,637,503	
十年下	1,748,139,608	43,703,440	1,791,841,048
			1,791,841,048

（）ヲ附シタルモノハ朱書ニヨルモノ

右金百七十九萬圓ヲ得ル目的ニテ十ケ年ヲ期シ年五朱ノ利子ニテ元利ヲ利殖スル方法ヲ取ルトキハ年々金拾參萬五千二百圓ヲ受領スルコトヲ要ス其計算別表ノ如シ。

但別表ハ毎半期ニ年五朱ノ利子ヲ元金ニ加ヘ計算セシモノニ係ル。

下賜金ノ事彌決定セシトキハ宮内大臣ニ於テ管理者三名ヲ侯伯子爵ノ内ヨリ指名選定セラレ書取ヲ以テ其趣御達相成候樣致シ度事。

毎年下賜セラルヽ金額ハ管理者ノ名義ニテ確實ナル銀行ニ預ケ若クハ公債證書ヲ購入シ利殖ヲ圖ル事。

銀行預ケ證書及ビ購入セシ公債證書ハ内藏寮ニ保管預ケヲ爲ス事。

十ケ年ヲ期シ目的ノ金額ニ達シタルトキハ各家ニ配當スルト同時ニ世襲財産ト爲ス事。

侯爵ニ金四萬圓宛伯爵ニ金二萬五千圓宛子爵ニ金一萬五千圓宛受領スルトキハ侯爵十一家伯爵三十家子爵八十六家合計百二十七家ニテ金二百四十八萬圓トナルコト左表ノ如シ。

侯爵	十一家	一家ニ付	金四萬圓
伯爵	三十家	同	金二萬五千圓
子爵	八十六家	同	金一萬五千圓
合計	百二十七家		
		金四十四萬圓	
		金七十五萬圓	
		金百二十九萬圓	
		金二百四十八萬圓	

戸之圓萬八十四百貳

年限	元金	利息	合計
初年上	187,500,000	4,687,500	
初年下	192,187,500	4,804,688	196,992,188
二年上	196,992,188 (187,500,000)	9,612,305	
二年下	394,104,493	9,852,612	403,957,105
三年上	403,957,105 (187,500,000)	14,786,428	
三年下	606,243,533	15,156,088	621,399,621
四年上	621,399,621 (187,500,000)	20,222,491	
四年下	829,122,112	20,728,053	849,850,165
五年上	849,850,165 (187,500,000)	25,933,754	
五年下	1,063,283,919	26,582,098	1,089,866,017
六年上	1,089,866,017 (187,500,000)	31,934,150	
六年下	1,309,300,167	32,732,504	1,342,032,671
七年上	1,342,032,671 (187,500,000)	38,238,317	
七年下	1,567,770,988	39,194,275	1,606,965,263
八年上	1,606,965,263 (187,500,000)	44,861,632	
八年下	1,839,326,895	45,983,172	1,885,310,067
九年上	1,885,810,067 (187,500,000)	51,820,252	
九年下	2,124,630,319	53,115,750	2,177,746,077
十年上	2,177,746,077 (187,500,000)	59,131,152	
十年下	2,424,377,229	60,609,431	2,484,986,660
			2,484,986,600

（ ）ヲ附シタルモノハ朱書ニヨルモノ

右金二百四十八萬圓ヲ得ル目的ニテ十ケ年ヲ期シ年五朱ノ利子ニテ元利ヲ利殖スル方法ヲ取ルトキハ年々金十八萬七千五百圓ヲ受領スルコトヲ要ス其計算別表ノ如シ。

但別表ハ毎半期ニ年五朱ノ利子ヲ元金ニ加ヘ計算セシモノニ係ル。

帝室ヘ慈惠部ヲ置カル、事

帝室ヘ慈惠部ヲ置シ、大ハ萬國赤十字事業ノ如キ、小ハ一鄕一私人之窮厄ヲ救フガ如キ總テ慈惠賑恤ニ係ル一般ノ事項ヲ管理シテ萬民ヲシテ恩惠ノ在ル所ヲ知リ　帝室ヲ仰慕スルコト益厚カラシメンコトヲ希望ス。今試ニ其職制ヲ揭グルコト左ノ如シ。

帝室慈惠部

總　裁（皇后陛下）　一
部　長（皇　族）　一
副部長（一等官）　一
部　員（勅奏任官）　若干
管理員（奏任官）　若干
掌　事（判　任）　若干

侍從撰任ノ事其他ノ條陳

侍中職ハ活潑氣慨アル者ヲ選任セラレ度事。

侍從職タル　君德ヲ補佐スルノ責任ナシト雖ドモ、且暮君側ニ咫尺スルモノナレバ、活潑ニシテ氣慨アルモノヲ任ズルヲ可トス。吾人ノ見聞ヲ廣クシ知識ヲ增益スルハ主トシテ交際スル所ノ人ヲ撰ブヲ要スルガ如ク、　君主ノ最モ親シキハ侍從ニシテ、一夕ノ談モ意ヲ用ヰレバ　君主ノ見聞ヲ廣クシ知識ヲ增益スルノ裨補ヲナスベシ。故ニ活潑氣慨アル者ヲ撰ビテ侍從ニ任ズレバ吾人有爲ノ士ヲ朋友トスルニ同ジクシテ君主ノ爲メニ益スルコト必大ナルベシ　君主ハ尊敬シテ禮ヲ失スベカラザル勿論ナレドモ、唯畏敬シテ奔命スルニ過ザル者ノミ侍候セバ君主ノ活潑ナル精神モ益振起スルコトナキニ至ラン況ヤ嚴然禮ヲ正シクシテ談センヨリハ却テ一夕ノ雜談中ニ於テ精神ヲ活潑ニ導クノ効大ナル者アルヲヤ侍從ノ撰リザルベカラザル實ニ君德ヲ增益スルノ急務ナリ。

華族ノ戶主ハ勿論子弟ノ中ヨリ學識才能アル者ヲ撰ビ、毎月一二回　御前ニ侍候セシメ、親シク勅問ヲ玉ヒテ才能ヲ試ミ玉ヒ且特ニ親愛シ玉ノ實事ヲ示シ奬勵有之度事。

華族ハ國ノ瞻望ニシテ授ケラル、ニ榮爵ヲ以テシ、龍光ヲ示シ、尚爾ノ忠貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サシメヨトノ　勅語ヲ忝ス、而テ華族ノ　御前ニ伺候スルハ麝香間詰ヲ除クノ外ハ新年ノ拜賀ニ龍顏ヲ拜スルニ止マリテ親愛ノ情ヲ感發セシムルニ至ラズ、既ニ士民ノ上ニ立チ無比ノ龍光ヲ示シ玉ヘハ更ニ一歩ヲ進メテ學識才能アル者ヲ撰ビテ時々伺候セシメ、或ハ　勅問ヲ賜ハリテ意見ヲ述ベシメ、或ハ詩哥文章ヲ奉ラシメ、或ハ常ニ見聞スルコトヲ言ハシメ玉フ等ノ事アラバ、其人ヲシテ益學識才能ヲ研修セザルベカラザル感覺ヲ生ゼシムルノミナラズ、子弟教育上ニ於テ奬勵シ玉フ褒益大ナルベシ。且君臣親密ノ愛情ヲ深クスルニ至ルモ此一事ニアリ、今ノ華族ハ素ヨリ御前ニ伺候シテ　天聽ニ達スベキノ學識才能ナキハ勿論ナリト雖モ、將來親愛ノ情ヲ厚クシ子弟教育ヲ奬勵シ玉フノ褒益ヲ思ハヾ前述ノ如キハ今日ノ必用ナル事ナリトス。

君臣ノ間ヲシテ親愛ノ情ヲ厚クセシムル事。

君臣ノ義重シ、敬禮ヲ盡スベキハ勿論ナリト雖モ、畏敬スルノ極其間離隔シテ親愛ノ情ヲ薄クスルニ至ルベシ。君臣ニシテ親愛ノ情薄クナレバ其害云フベカラザルコトヲ惹起スニ至ラン。傳聞スルニ魯國ノ如キ專制國ニシテ君主ノ威權甚シキモ、君臣ノ間親密ニシテ君ノ臣ヲ愛スル朋友ノ如ク、臣又君ヲ愛スル一身ノ如クニシテ、例スレバ君主政廳ニ出テハ嚴然犯スベカラザルノ威ヲ示シ、內廷ニ入テハ臣民ヲ愛スル朋友ノ如クニシテ、膝ヲ接シテ親密ノ交情ヲ盡スト、實ニ親愛ノ深シト雖モ未ダ魯國ノ如キニ至ラズ、夫禮儀ヲ專ニシテ嚴格ナル時ハ體裁ニ於テハ美ナリト雖ドモ親愛ノ交情ヲ薄クスルハ親子兄弟朋友ノ間ニ於ルモ然リ、況ヤ畏敬度ヲ過ギ易キ君臣ノ間ニ於テヲヤ。故ニ嚴然威ヲ示シテ近クベカラザルト、接近シテ親愛ノ情ヲ盡ストノ區別ヲ明ニシ君臣ノ間ヲシテ嚴格ニ過ギテ疎隔セズ、親密ニシテ褻瀆スルコトナカルベクナランコト希望ニ堪ヘザル所ナリ。

神道教職ヲ撰拔シテ洋行セシメ歐米各國ノ實況ヲ視察セシムル事。

世ニ古風ニ拘泥シテ日新開明ニ赴クヲ悅バザルハ智見狹隘ナルニ因ル者ニシテ、特ニ神道者ノ頑固ナル所以ハ今ノ如ク文化制度百般ノ事歐米各國ニ摸倣セラルヽハ終ニ萬邦無比ノ國體ヲ變ジ　皇室ニ害アラント憂悶スル老婆心ニ出ル者ナリ。其心ハ　皇室ヲ尊ビ國體ヲ重ズルノ厚キ者ニシテ嘉スベシト雖ドモ、如此誤見ヲ懷ク者ハ深ク外國ノ事情ヲ知ラザルニ因ルナリ、是偏ニ昔日外國人ヲ夷狄視シ、外教ヲ邪教視シタル先入心ノ脫セザルガ故ナリ。故ニ此輩ノ主張スル所ハ愚民ノ脫デ信從シ易クシテ智者ノ厭惡スル所ト雖モ、世間智者ハ少クシテ愚者ハ多キノミナラズ、若志ヲ得ザル者ニシテ殊更ニ此徒ノ說ヲ借リテ民心ヲ得テ我事ヲナサントスル者アラバ、政府ノ煩害豈少カランヤ。竊ニ頑固ナル國學者ノ說ク所ヲ聞ケバ、政

府ノ施行セラル所ハ國體ニ悖リ　皇室ニ災アル者ト誤解スル者ノ如シ。此ノ如キノ誤解ヲナスモ到底古典ニ拘泥シテ他ヲ顧ミザルノ迷ナレバ、早ク神官教職ノ中三四名ヲ撰抜シテ各國ノ實況ヲ見聞セシメバ、或ハ大ニ悟ル所アラン。今ヤ國費多端ナルヲ以テ洋行費ヲ支給或ハ貸與スルコト難カルベシト雖ドモ、將來ノ國益ヲ慮ルノミナラズ、大政進路ノ障碍物ヲ除カントスレバ速ニ此策ヲ施スニ如カズトス。況ヤ耶蘇教益侵入スルニ隨テ益邪教視シテ國害ナリト思フ徒ノ不平心ハ一層甚シキヲ加ヘ、遂ニ教法上ヨリ大政ノ煩害ヲ惹起スルニ至ルベキヲヤ。論者或ハ云ン、縦令教法上ノ爭擾ヲ惹起スモ兵力ヲ以テ一撃ノ下ニ鎮定スベケレバ憂フルニ足ラズト、誠ニ然リ、然レドモ國ノ煩害ヲ未萌ニ防ガズシテ兵力ヲ頼ムハ策ノ得タル者ニ非ザレバ、宜ク耶蘇教ヲ邪教視シ歐米各國ノ制度文物ヲ採テ文明ヲ計ルヲ國體ニ害アリトスル徒ヲシテ各國ノ實況ヲ見聞セシメ、昔日ノ是トセシハ却テ國體ヲ保護スルニ足ラザル事ヲ自省シテ悟ラシムベシ。此徒ニシテ耶蘇教ノ組織ヲ知リ各國ノ事情ヲ詳ニスレバ我神道教法ノ未ダ宗教ト稱スベキ體裁ヲナサズ、國ノ文明ヲ進ムルニ裨益ヲナスニ足ラザルコトヲ辨ヘテ改良スル所アラン。然レバ神道者ノ頑固ニシテ將來幾許カ太政ノ煩害ヲ爲スヲ憂フルハ洋行セシメテ實況ヲ見セシメ、以テ自省改良スル所アラシムルハ今日ノ急務ト云ハンモ可ナリ。

國教ハ立テザルヲ可トスル事。

國教ヲ立ルト否トハ識者ノ論アル所ニシテ、熟考スルニ國教ヲ立ルハ信教自由ノ主義ニ反スル者ニシテ、幾許カ他ノ宗教ヲシテ束縛ヲ受クルノ嫌ナキ能ハズ、況ヤ一教ヲ重ンズレバ他教ヲ輕ンズルノ意ヲ示ス者ニシテ、政府ハ公平ニ教法ヲ待ツノ意ニ反スルヲヤ。況ンヤ國教ヲ定ムルトキハ必他ノ宗教ハ多少ノ紛議ヲ生ジ、政府ヲ煩ハスニ於テヲヤ。若シ強テ之ヲ立ンカ、何ヲ以テ國教トナサン。現今内國ノ教法中ニ於テ信徒多ク、且組織モ他教ニ超越スルハ眞宗ナリト雖ドモ、之ヲ以テ國教トナサバ神道者ハ必不平ヲ鳴ラシ、大政ノ煩害ヲ釀サン。何ントナレバ神道未ダ教法ノ體ヲナサズト雖ドモ、皇國國有ノ大教ニシテ　皇室ニ親密ノ關係アル者ナレバ、之ヲ措テ他ノ宗教ヲ國教トセバ是　祖宗以來ノ國風ヲ變遷スル者トシ、神道者ハ勿論憂國者ノ服セザル所ナルベシ。然ラバ神道ヲ以テ國教トセンカ、神道教法ノ組織全カラザレバ未ダ國教トナスニ足ラズ、大ニ改良スルノ後ニ非ザレバ各國ニ對シテ國教ト稱スルニ恥ル所アリ。然ラバ耶蘇教ヲ以テ國教トセンカ、其宗旨ノ國體ニ悖ルヤ國風ニ適セザルヤハ暫ク措テ論ゼザルモ、彼ヲ以テ國教トセバ各國ノ事情ニ明ナル有識者ハ嘉ミスベシト雖モ、神佛各教ニ於テハ大紛議ヲ起シ、其害謂フニ忍ビザル事ヲ生ゼンモ計リ難シ。而シテ今必國教ヲ定メザレバ國家ニ害アリト云フニアラザレバ、暫ク國教ヲ定メズシテ神佛各教ハ

勿論耶蘇教モ互ニ競爭勉勵シテ人心ヲ教化スルニ任セオキテ、他日善良ニシテ太政ノ裨補ニ益アルヲ採テ國教トスルモ未ダ遲シトスベカラズ。如此ナレバ神佛各教ハ競ヒテ自己ノ改良スベキヲ改良シテ文明ニ適スル教法ノ組織ヲナス者起ルベク、耶蘇教ヲ邪教視スル人心モ亦幾分カ彼ガ教義ヲ知リ妄ニ抗抵スルハ却テ國害ヲ惹起スベキ事ヲ辨ヅルニ至ラン。此時ニ於テ撰拔シテ國教ヲ定メバ、假令他ノ宗教者ハ不平ヲ鳴ラス事アルモ、組織ノ完備スルト勢力ノ及バザルヲ自省辨悟スベケレバ、今日ニシテ國教ヲ立テ紛擾ヲ生ズルトキハ大ニ淺深厚薄ノ別アルベシ。故ニ國教ハ暫ク定メザルヲ可トス。

神官始皇統ノ神祇ニシテ官國幣社ニ列セラレタル神社ハ官國幣社ノ名稱ヲ止メ、自餘國家ニ功勞アル神ニ限リ官國幣社ノ社格ヲ定メ、神祇中ノ名分ヲ正シ而シテ宮内省ニ於テ統理御崇敬アラセラレ度事。

神宮ハ賢所ト御同體ニ座スハ言ヲ俟ザレバ社務一切ノ事宮内省ニテ管轄セラレ、祭主ハ皇族ヲ以テ任ゼラレ、官司以下重立タル神官ハ別ニ神官ノ名稱ヲ設ケズ、式部掌典ヲ以テ奉社セシメ、賢所ト同一ノ御取扱ニ相成嚴然ト神威ヲ天下ニ明示相成度、自余ノ皇靈ニシテ官國幣社ニ列セラレタルモ一切宮内省ノ管理トシ、別ニ官國幣社ノ名稱ヲ付セズ、皇統ニ關スル神祇ノ名分ヲ正シクセラレンコト至當トス。抑神社ニ官國幣大中小ノ社格アルハ官吏ニ勅奏判

ノ官等アリ、華族ニ公侯伯子男ノ爵アリテ御優待ノ差等ヲ立テラレタルト同ウシテ、御崇敬ノ差等ヲ立ラルヽ者ノ外ナシ。然ルニ皇靈ニシテ自余ノ神祇ト均シク如此差等ヲ立テ社格ヲ定メラルヽハ、御崇敬ニアラズシテ却テ名分ヲ混亂スル者ト云ハザルベカラズ、是自余ノ神社ハ神代以來御由緒アル出雲大社ヲ除クノ外ハ、多クハ御歷代ノ内ニ一時ノ御信仰又ハ人民ノ崇敬ニ成立スル者ナレバ、其盛衰ハ人民ノ信仰ニ任ゼラルヽモ妨ゲナシト雖ドモ、皇靈御鎭座ノ神祇ニ於テハ皇室ト盛衰興廢ヲ共ニスベキ者ニシテ、人民ノ信仰ヲ問ハズ天下一般ニ尊敬セザルベカラズ。又尊敬セシメザルベカラザルモノナリ。故ニ皇室ニ係ル神祇ニシテ官國幣社大中小社ノ社格ヲ定メラルヽハ名分上ニ於テ甚不可トス。但今ノ官國幣社ノ中ニハ國家ニ功勞アリテ上古以來御崇敬ノ由緒アルト、唯御歷代内ニテ一時ノ御崇敬ニ係ルトアリ、又人民ノ信仰ニ因リテ成立シタル者アリ、是等ハ其區別ヲ明ニシテ御由緒アル神社ハ永ク御崇敬ノ典ヲ行ハセラレテ該社ヲ保存セラレ、人民ノ信仰ニ係ルハ該社ニ委任シテ保存法ヲ立シメラレンコト至當ナルベシ。古來御由緒アルヲ顧ミズ、人民ノ信仰ニ因テ成立スルト同視シ、政府ハ神社ノ盛衰ニ關セズ一切該社ニ委ネテ保存法ヲ立テシメラルヽハ御處置ノ當ヲ得タル者ニアラズ。又人民ノ信仰ヨリ成立スル神社マデ御由緒アルト共ニ政府之ガ保存ヲナサントセラルヽモ國費多端ノ今日ニシテ到底ナシ得ベカラザルナリ。然レバ前述ノ區別ヲ立テラルヽ

侍從撰任ノ事其他ノ條陳

ハ神祇御崇敬ノ上ニ於テ名分ヲ正シ功勞ヲ明ニスルノ要務ナルベシ。故ニ神宮ヲ始皇靈ニマス神社（今ノ官國幣社ト定マレル社）ハ年中經費ヲ下賜セラレ、自余ノ神祇ノ中ニ於テモ出雲大社ノ如キ上古以來格別ノ御由緒アル皇靈鎭座ノ神社ニ準シテ經費又ハ保存金ヲ與ヘ、其他ハ御由緒ノ深淺ト功勞ノ大小ニヨリテ或ハ保存金ヲ與フルニ止マリ、或ハ例祭ニ幣帛ヲ供セラルヽ等ノ區別ヲ立テラレンコト可然者トス。

皇典講究所ヲ廢シ更ニ皇學校ヲ設ケテ有益ノ學則ヲ以テ教育セラレ度事。

皇典講究所ハ神官トナルベキ教育ヲ爲ス所ニシテ、此擧ヲ聞食サレ宮內省ヨリ年々數千金ヲ下賜セラルヽ御保護ノ厚キ感佩ニ堪ヘザルナリ。然ルニ學則未ダ完備セズ、教援スル所ノ區域狹隘ニシテ恩賜ノ厚キニ報答スルニ足ル實効ヲ奏センコト覺束ナキ者ノ如シ。加之皇典ヲ講究シ建國ノ體ヲ明ニシ忠孝節義ノ精神ヲ養成スルハ獨神官ノ主スベキニアラザルハ勿論ナレバ、更ニ學則ヲ改良シテ廣ク志願ノ者ヲ教育スル所トナスベキナリ。況ンヤ皇典ノ講究ハ其宜キヲ得ザレバ徒ニ古風ニ拘泥シ人心ヲ頑固ニ導クノ憂ヲ生ジ易キ者ナルヲヤ。然レバ皇典講究所ノ名稱ヨリ論ズレバ　皇室ニ關係アルコト深ケレバ宮內省ニシテ之ガ學則ノ良否教育ノ當否ヲ察セズ、唯恩賜金ヲ年々授ケラルヽニ止マラバ、其恩賜ハ却テ頑固ナル人心ヲ養成スルノ培養トナルベシ恩賜アルノ主意豈此ニアラザランヤ。神官ノ學識ヲ進メテ忠孝節義ヲ重ンズル國體ヲ知ラシメ、世ノ文明ニ適スルノ用ヲナサシメントスルヲ嘉ミシ玉フガ故ナルベシ。望ムラクハ該講究所ヲ以テ宮內省ノ直轄トシ、皇學校ト稱シ學則ヲ改良シ、廣ク志願者ヲ教育アラン事ヲ。而テ此校ニ入テ卒業スル者ハ兵役ヲ猶豫セラルヽトキハ大ニ人心ヲ皇典講究所ニ導クノミナラズ、忠孝節義ヲ重ジ活潑氣慨アル人才ヲ生ズルニ至ルベシ。是國ノ元氣ヲ振起セシムル者ニシテ皇室ノ爲メニ裨益アル大ナルベシ。

華士族ノ中間ニ一族ヲ設ケ勅任官竝ニ舊幕府ノ公家衆舊藩士採地萬石以上又加茂日枝等ノ舊神官ニシテ舊家ノ者ヲ列シ位記ヲ授ケテ龍光ヲ示サレ度事。

國家ニ功勞ノ大ナル者ハ現ニ華族ニ列シ爵ヲ授ケテ龍光ヲ示シ玉ヘリ。而シテ既ニ列セラレタル華族諸氏ニ及バズト雖ドモ、國家ニ功勞アリテ龍光ヲ示シ玉フベキ者モ亦少カラザルベシ。然レバ之ヲ華族ニ列センカ功勞ノ大小ヲ區別セザル者ニシテ、何ニ因テ優劣ノ差等ヲ示サン。故ニ功勞且門地ニシテ華族ニ列スベキ者ニアラズト雖モ、一般ノ士族ト同視スベカラザル者ヲシテ其功勞又ハ門地ヲ表シ龍光ヲ示スベキ族名ヲ設ケ勅任官及舊幕府ノ公家衆藩士ノ採地萬石以上又加茂日枝其他ノ舊神官ノ舊家ノ類ヲシテ其族ニ列セラルヽトキハ、人民ノ階級多クナリテ益　皇室ノ尊嚴ヲ示スニ至ルノミナラズ、優待ヲ與ヘテ龍光ヲ示シ玉フ　聖德ノ辱キヲ天下後世ニ明示シ玉フ者ナレバ、尊皇愛國ノ人心ヲ奬勵シ、廉耻ヲ重ズルノ風俗

ヲ增進スルニ至ラン。果シテ然ラバ獨現今有功者ノ勞ニ酬ヒテ名譽ヲ與ヘ玉フノミナラズ、皇室ノ護衞ヲ增加スル者ナレバ、功勞大ニシテ華族ニ列セラル、者ノ名譽モ益光輝ヲ增シ、華族ニ列セラザル有功者モ亦其分ニ應ジテ一般士族ノ上ニ立テ龍光ヲ示スニ足ラン。而テ此族ニ列セラル、者ハ先ヅ六位ニ叙セラレ、五位ニ終ル者トシ、嫡子ニ至テハ叙位ノ御沙汰ナクシ(勅任官ハ勿論其他勤勞アリテ位記ヲ進メラル、ハ此限ニ非ズ)テ華族トノ差等ヲ明ニシ、且勅任官ノ此族ニ列セラル、ハ勤務年限ヲ定メテ列スル者トシテ可ナリ、其法ニ至テハ今此ニ贅セズ。

正一位ニ叙セラレシ人名取調

大織冠　藤原鎌足

正一位　橘諸兄

　　惠美押勝

　　藤原永平

贈正一位　藤原不比等

同　宇合

同　眞楯

同　種繼

同　良繼

同　園人

同　百川

同　冬嗣

橘清友
源常
藤原良相
源信
藤原良房
同長良
同基経
源融
同能有
藤原高藤
源光
同時平
藤原定方
同忠平
同師輔

藤原師尹
同伊尹
同實頼
同兼道
同頼忠
同爲光
菅原道眞
源雅信
藤原兼道
同公季
同能信
同教通
同實季
同長實
同基實

正一位ニ叙セラレシ人名取調

藤原頼長
源通宗
豊國社
徳川廣忠
同家康
同秀忠
同家光
同家綱
同綱吉
同家宣
同家継
同吉宗
同家重
同家治

徳川家齊
同家慶
同家定
同家茂
橘正成
源義貞

正一位ニ叙セラレシ人名取調

歐洲參考書類

現行ノ罪ヲ犯シタル皇族ヲ直ニ逮捕シ得ル乎ノ問ニ對スル答

獨逸國法ノ原則ニ依レバ皇族ハ特別ノ裁判管轄及ビ裁判待遇ヲ享クルモノニシテ、刑事ニ關シテモ亦千八百七十七年獨逸治罪法施行規則第四條ニ於テ各邦ノ家憲及ビ國法ヲ以テ之ヲ維持セシメタリ。

孛國ニ於テハ舊治罪法第二百五十一條ノ規定ニ曰ハク、刑事ニ在リテ皇子又ハ皇女ニ對シテハ國君ヨリ裁判所又ハ司法官吏ニ命令ヲ與ヘタル場合ニ非ザレバ豫審ヲ開キ又ハ逮捕ヲ爲スヲ得ズト、而シテ其ノ裁判管轄ハ在伯爾林皇室裁判所〔上等地方裁判所〕內ニ設ケタル樞密司法顧問ナリ。

巴威爾ニ於テハ總ベテ皇族ノ身上ニ關スル裁判事件ノ命令及ビ裁決ハ國王ノ權內ニ在リ、然リ而シテ國王ハ其ノ意見ニ依リ重大ノ事件ノ爲メ親族會議ヲ開クヲ得ベシ〔千八百十九年ノ家憲第十章第二條第四條第六條〕蓋シ此ノ規定シタル事ニモ適用スベク、而シテ國王獨リ豫審及ビ逮捕ヲ命令シ得ルヤ疑ヲ容レザル所ナリ〔ピヨーツル氏巴威爾國法論第八十條第二百十三丁第十一備考〕

瓦敦堡ニ於テハ獨逸治罪法施行規則第一條ニ依リ皇族ノ裁判管轄ハ上等地方裁判所ナリ。而シテ裁判手續ノ開始ハ單ニ國王ノ裁判ヲ以テ命令スルヲ得ベシ。〔ザルウエー氏瓦敦堡國法論第一卷第六十四條第四項ノ四〕

索遜ニ於テモ皇族ニ對スル刑事裁判ハ上等地方裁判所ノ意見ヲ聽キタル後國王之レヲ爲ス、又皇族ニ對シテ財產差押家宅搜索及ビ逮捕ヲ爲スニハ必ズ國王ノ裁可ヲ受クベシ〔孛遜治罪法第九十八條第百二條第百十二條第百二十七條第百三十一條オキシツ氏孛遜國法論第一卷第二百二十四丁〕

其ノ他ノ獨逸各邦ニ於テモ以上同一ノ原則行ハル。

是レニ由リテ觀レバ予ハ皇族ノ現行犯ニ在リテモ特ニ國王ノ命令アルニ非ザレバ逮捕スルヲ得ズ隨テ裁判所檢察官又ハ警察官ハ其ノ職權ヲ以テ其ノ處分ヲ施スヲ許サズト信ズ。何ニトナレバ千八百七十七年ノ獨逸治罪法第百二十七條ニ依レバ斯クノ如キ場合ニ於ケル逮捕モ亦刑事裁判ノ手續ニ屬スレバナリ。

然レドモ予ハ實際ノ干涉ニ依リ裁判所及ビ警察官ニ於テ犯罪ヲ防遏シ、斯ル場合ニ依リテハ皇族ニ對シテモ其ノ一般ノ職權ヲ行フヲ許スベシト認ム。但シ皇族ノ一身ニ對シ其ノ職權ヲ行フニハ必ズ國王ノ命令アルヲ要スルノミ。

ロイスレル　再拜

皇族席次ノ事

華諾兒家憲　第一編　第六條

國王ノ配偶タル王后ハ國王ト同等ノ位ヲ有シ、王家ノ寡后之ニ次ギ、寡后中ノ序列ハ王太后太王太后トシ、其他ノ王家ノ寡后之ニ次ギ、最近ニ寡婦トナリタルモノヲ上位トス。其他王家ノ王子王女ノ序列ハ王位繼承權ノ順序ニ依ル其疑議ニ渉ルモノ及定規ナキモノハ王之ヲ決定ス。

索遜家憲　第三條

王子王女ノ階級ハ繼承權利ノ順序ニ依リ之ヲ定ム未婚王女ノ階級ヲ定ムルモ亦此ニ準據ス、但或場合ニ際シ其階級ヲ定ムルハ王ノ權ニ屬ス。

魯法律全書　百五條

集會及ビ總テ集會ニ類シタル時宜ニ於テ親王及內親王竝ニ皇帝王及女王ハ皇帝及皇后ノ次ニ上席ヲ占メ互相ノ間ニ於テハ族長族中ニ於テハ長者上席スルノ序次ヲ守ルベシ。

孛漏西

宮內省屬モール氏ニ質問スルニ皇族席次ハ都テ王位繼承ノ順序ニ依ル。

佛國貴族ニ關スル法令及ビ其沿革

佛國貴族ハ古ヨリ頗ル多ク、其貴號モ十有餘種アリシガ、皆人民ノ上ニ在テ許多ノ特權ヲ有シタルモノナリ。千七百八十九年大革命起リ同年八月四日佛蘭西人ハ平等ナリト布告シテ悉ク貴族ノ特權ヲ廢シ、千九百九十年三月十五日貴族ノ相續權モ平等ニ分派スベシト布告シ同年六月十九日ニ至ツテ全ク貴族ヲ廢シ、以來何人ト雖親族ノ姓ニ非ズンバ名乘ル事ヲ得ズト定メタリ。佛國貴族是ニ於テ一時消滅セリ。

佛國ノ帝王政體ト爲リシ後、千八百六年ニ至テ數個ノ世襲貴族ヲ設ケ、千八百八年三月一日更ニ二個ノ勅令ヲ發シテ大ニ貴族ヲ起シ其世襲產ヲ立ツルノ法ヲ定メタリ。

此二個ノ勅令ハ左ノ如シ。

千八百八年三月一日ノ勅令

第一條　佛蘭西帝國ノ高官在職者ハ公（プランス）及ビ侯（アルテュス）ノ貴號ヲ有スベシ。

第二條　高官吏ノ長男ニシテ父ヨリ二十萬フランノ入額ヲ生ズベキ世襲產ヲ授カリタル者ハ帝國ノ伯ト稱スルノ權アリ。

此貴號及ビ世襲產ハ嫡子タルト庶子タルトヲ問ハズ男ヨリ男ト生產ノ順序ニ從テ子孫ニ傳ハルベシ。

第三條　高官吏ハ長男又ハ次男ノ爲メ後文ノ方法ニ從テ子又ハ男ノ貴號ノ附屬スベキ世襲產ヲ設クルヲ得ベシ。

第四條　宰相、元老、終身參議官民撰院長大敎正ハ畢生間子ノ貴號ヲ有スベシ。

因テ大印章ヲ押記シタル特許狀ヲ下附スベキモノトス。

第五條　此貴號ハ司法卿ノ面前ニ出テ特許狀ヲ受ケ且ツ後文ノ方法ヲ行フ上ハ嫡子タルト庶子タルト養子タルトヲ問ハズ、男ヨリ男ト生產ノ順序ニ從テ之ヲ有スル者ノ子孫ニ傳ハルベシ。

但シ大敎正ハ姪ノ中ニテ適當ナル者ヲ撰ミ同一ノ手續ヲ爲スヲ得ベシ。

第六條　各在職者ハ追テ定ムル方式ニ因リ世襲產ヲ組織スベキ財產ヨリ物件ニテ三萬フランノ純粹ノ入額ノ生ズル事ヲ證明スベシ。

此財產ノ三分一ハ第四條ニ記載シタル貴號ノ附屬產トシテ其貴號ヲ承繼スル者ニ傳ハルベシ。

第七條　第四條ニ記載シタル在職者ハ長男又ハ次男ノ爲メ後文ノ方法ニ從ヒ男ノ貴號ノ附屬スベキ世襲產ヲ設クルヲ得ベシ。

第八條　州撰擧會ノ會長大審院ノ大院長及ビ大檢事控訴院ノ大院長及ビ大檢事、敎正、皇帝ノ卽位式ニ參會スル權アル三十七屬ノ屬長ハ畢生間男ノ貴號ヲ有スベシ。但撰擧會々長ハ三度其會長タリシ者ニ限ルベク大院長大檢事及ビ屬長ハ十年間其職ヲ行ヒシ者ニ限ルベク而シテ何レモ滿足ニ職務ヲ行ヒシ者タルヲ要ス。

第九條　第五條第六條ノ規則ハ畢生間男ノ貴號ヲ有スベキ者ニ適用スルヲ得ベシ但シ二萬五千フランノ入額アルヲ證セシメテ足リ而シテ其三分一ハ貴號ノ附屬產トシテ其貴號ヲ承繼スル者ニ傳ハルベシ。

第十條　州選擧會ノ會員三度其會員トナリテ滿足ニ職務ヲ行ヒタルモノハ司法卿ノ面前ニ出テ男ノ貴ヲ得ント請願スルヲ得ベシ。

然レドモ年金一萬五千フランノ入額アルヲ證セズンバ嫡子タルト庶子タルト養子タルトヲ問ハズ男ヨリ男ト生產ノ順序ニ從テ之ヲ傳ウルヲ得ズ其特許狀ヲ得タル時ハ其入額ノ三分一ハ此貴號ニ屬附シテ之ヲ承繼スル者ニ傳ハルベシ。

第十一條　勳章局ノ人員及ビ將來勳章局ノ人員タル光榮ヲ有スル者ハシユバリエーノ貴號ヲ有スベシ。

第十二條　此貴號モ特許狀ヲ受クル爲メ司法卿ノ面前ニ出テ且ツ三千フランノ純粹ノ入額アルヲ證スル後ハ嫡子タルト庶子タルト養子タルトヲ問ハズ男ヨリ男ト生產ノ順序ニ從テ子孫ニ傳ハルベ

シ。

第十三條　將官、州長、文武ノ官吏及ビ其他ノ臣民ノ中國家ノ爲メ勳功ヲ立テタル者ハ適當ナリト見認ムル貴號ヲ附與スルコトアルベシ。

第十四條　帝國ノ臣民ニテ貴號ヲ附與セラレシ者ハ貴號ノ特許狀ニ記シタルモノノ外他ノ紋章及ビ儀服ヲ用ユルヲ許サズ。

第十五條　帝國ノ臣民ハ附與セラレシコトナキ貴號及ビ格式ヲ濫用スルヲ禁止ス民生官吏公證人及ビ其他ノ者モ犯者ノ之ヲ濫用スルニ任スベカラズ又現行法モ宜シク時勢ニ應ジ改正シテ以テ犯者ヲ罰スベシ。

千八百八年三月一日ノ勅令ノ要旨

世襲產ハ先取リノ特權及ビ書入質ノ權ヲ負ハズシテ他人ヨリ取戻サルヽコトナキ不動產ニ非ザレバ組成スルヲ得ザルモノトス。

但シ政府ヨリ得ベキ年金佛蘭西銀行ノ株券ハ不動產ト爲シタル後其中ニ組入ルヽヲ得ベシ。

世襲產ニ二種アリ、一ハ國長ノ賜フ所ニシテ一ハ本人ノ請願ニ因テ許可ヲ受クベキモノトス。

世襲產ハ貴號ト共ニ嫡子タルト庶子タルト養子タルトヲ問ハズ男ヨリ男ト生產ノ順序ニ從テ子孫ニ傳ハルベシ

世襲產ニ屬スル貨財ハ讓與シ及ビ書入スルヲ得ズ故ニ之ヲ賣拂ヒ贈遺シタル契約及ビ其契約ヲ確定シタル裁判言渡ハ總テ無効ナリトス。

世襲產及ビ其入額ハ其原因タル貴號ヲ有スル本人ノ外利用スルヲ得ズ。

世襲產ヲ有スル者ノ死スル時ハ其存立スルト否トニ從テ其額ノ三分一又ハ半分ヲ死者ノ寡婦ニ給スベシ。

世襲產ノ財產モ政府ノ允許ヲ得タル上ハ賣却シテ他ノ財產ト易ユルヲ得ベシ。

但シ其手續極メテ鄭重ニシテ他ノ財產ト交換スル時迄常ニ官吏ノ監督ヲ受ケザルヲ得ズ。

千八百十四年王政復古ニ復スルニ至リテ新ニ憲法ヲ制定シタリ。此憲法ハ第一條ニテ佛蘭西人ハ貴號ト等級トニ論ナク法律上同等タルベシト云ヒ、第二條ニテ佛蘭西人ハ各自ノ財產ニ應ジテ等シク國家ノ任務ヲ擔當スベシト云ヒ、又第三條ニテ佛蘭西人ハ區別ナク文武ノ官職ニ愛用スルヲ得ベシト述ベ、第七十二條ニ至テ更ニ左ノ如ク記載セリ。曰ク舊貴族ハ從前ノ貴號ヲ復シ新貴族モ其貴號ヲ保有スベシ。王ハ隨意ニ人ヲ貴族ニ封ズルノ權アリト雖等級ト榮譽ヲ與フルニ止マリ、敢テ社會ニ對スル任務及ビ職分ヲ免除スルコトナカルベシト、於是乎古昔ノ許多ノ貴號再ビ行ハレ從テ貴族ノ稱號大ニ增加スルニ至レリ。

第一帝國ノ時貴族ノ稱號ヲ借用シタル者ヲ罰スルノ法律アリシガ、其法律ハ毫モ執行力ヲ失ハザ

ルノミナラズ、却テ之ヲ增加シタリ。舊貴族ノ貴號ヲ僭用シタル者モ之ニ照準シテ處分セザルベカラザルニ至リタレバナリ。

千八百三十年改革再ビ起リ貴族ノ貴號ハ唯纔カニ榮譽ヲ表スルニ過ギザルノ具トナレリ。蓋千八百三十年ノ憲法ハ第六十二條ニテ千八百十四年ノ憲法第七十一條ノ全文ヲ登記シタリト雖ドモ、貴族ノ貴號ヲ保護スル罰則（貴族ノ貴號ヲ僭用シタル者ヲ罰スル法律）ハ全ク消滅シ、貴族ニ非ザル者ト雖罰ヲ受クルノ畏ナク、自由ニ貴族ノ稱號ヲ冒スヲ得ベクシテ敢テ其由來ヲ證明スルニ及バズ、故ニ常人モ公ト稱シ伯ト唱フルモ可ナリ、唯世人ノ笑ヲ招クニ過ギザルノミ。

千八百三十五年三月世襲產ヲ廢シタルヨリ貴族ハ猶ホ一層勢力ヲ失フニ至レリ。

然リト雖當時國王ヨリ國家ノ爲メ拔群ノ功ヲ建テシ者ニ貴族ノ貴號ヲ與ヘタルノ例ナキニ非ズ。

千八百四十八年二月佛國ハ亂アリテ再ビ共和政體ニ復シ、其假政府ハ翌月勅令ヲ出シテ同等ハ佛蘭西共和政體ノ三大原則ノ一ナリトシテ、更ニ貴族ノ貴號ヲ廢シ而シテ之ニ屬スル格式ハ公ケニ行フベカラズト禁ジ、後チ憲法ヲ定ムルニ及ンデ重ネテ之ヲ確定シタリ（四十年ノ憲法第十條）

然レドモ三世拿破列翁大統領トナリシ後、千八百五十一年十二月二日ノ勅令ニテ憲法ヲ廢シタルヨリ、其第十條モ自ラ消滅セリ。將タ貴族ノ貴號ヲ廢シタリシ四十八年三月勅令（前文ニアリ）ハ五十二年一月ノ勅令ノ廢スル所トナレリ、是於テ貴族ハ再ビ舊ニ復スルヲ得タリシガ、其有樣ハ四

十八年前ト同一ニシテ徒ラニ虛榮ヲ有スルニ過ギズ、又三世拿破列翁ノ帝位ヲ踏ミシ後モ其特權トテハ一モ制定シタルモノナク唯纔カニ其貴號ノ濫用ヲ禁ジタルノミ。

拿破列翁貴族ヲ創設シタル旨意及顚末

拿破列翁ハ志ヲ得タル後絕ヘズ貴族政體ヲ確立セントセリ。是レ啻ニ政略ノ然ラシメシ所ニ非ズ、其性質ヨリ湧出シタル所ナリ。リユシヤン（拿ノ兄）曾テ豪商ノ女ヲ娶ル、拿破列翁之ヲ聞テ大ニ怒リ、兄弟ノ間是ヨリ睦シカラズシテ止ヌ、是レ商人ト親戚タルヲ惡ムニ因レリ。舊名家ノ貴族某心ヲ飜シテ來リ事フ、拿破列翁此ヲ見テ喜色面ニ溢ルヽト云フ。其他之ニ類スルノ事蹟得テ枚擧スルニ遑アラザルナリ。

貴族政體ハ彼ノ愛スル所ナリ、況ヤ當時ノ社會ヲ治ムルニ必要ナリト見認タルニ於テヲヤ。曾テ云ヘルアリ、曰勇壯ナル貴族ニ據レル憲法ハ猶ホ海船ノ如ク、貴族ニ據ラザル憲法ハ猶ホ空中ノ風船ノ如ク、海船ハ二個ノ重力アルガ爲メ運轉スルヲ得ベクシテ、其揖ニ據ル所アリ、然レドモ風船ハ一個ノ重力之ヲ專ラニシテ據ル所アルナシ、一タビ風アラバ飛搖シテ去ル、安ンゾ運轉スルヲ得ンヤ。ト是レ以テ其意ノ存スル所ヲ知ルナリ。

然レドモ名實相通ズルノ貴族ハ人力ノ得テ起スベキニ非ザル事其曾テ感覺シタル所ナリ。曰ク貴

族ハ余ト雖一時ニ起ス能ハズ、其生ズルノ原因ハ夫レ唯經舊ノ事蹟ナルノミト。門閥大功民望鉅産ナキ者ハ以テ國家ノ神髓タル貴族ト爲スニ足ラザルコトモ亦元老院ノ組織ヲ論ズルニ當テ暗ニ見認メタル所ナリ。曰ク世襲元老ヲ設クルハ現今ノ民心ト背馳スル所ニシテ、軍隊ノ榮譽ヲ傷ケ同等論者ノ持論ヲ扞テ、余ヲシテ私人ノ請願ヲ受クル煩ニ堪ヘザラシムルニ至ルベシ。當今世襲元老ヲ要スル貴族政ノ元素ハ何レニ在リトスル乎、舊紳士ハ人民ノ仇敵トスル所ニシテ、新紳士モ卑賤ナル者多シ。五六ノ名聲アルモノアルモ豈ニ足レリトスベケンヤ。仰グベキノ經歷ナク、見ルベキノ功勳ナク又鉅大ノ所有地ナキ者ハ何ヲ以テ世襲元老ト爲スニ足ランヤ。英國ノ世襲元老ハ之ト異ニシテ人民ノ上ニ居リ而シテ其敵ニ非ラザルナク、是レ英國ニ自由ヲ與ヘタル貴族ニシテ大憲法モ之ニ因テ生ジ憲法モ之ト進歩シテ共ニ一體ヲ爲スモノナリ云々ト。

其他拿破列翁ノ所爲及ビ政略ヲ見ルニ、貴族ヲ得テ國家ノ柱石ト爲サントスルニ切ナリシ事殆ンド豫想外ニ出ヅベシ。然レドモ其志ハ絶ヘズ時勢ノ妨グル所トナリ、窃カニ嘆息シタル事勘ナカラザルガ如シ。而シテ其此ノ如キ志ヲ起シタルハ已ニ久シ、敢テ帝位ニ登リシ後ニ非ズ。初メ第一等領事ノ官職ニ登ルヤ忽然トシテ大望ヲ發シ、豫メ帝位ヲ蹈ムノ備ヲ設ケタリ。於是乎百方貴族ヲ得テ他日ノ用ニ供センコトシタリシガ、如何セン舊貴族ハ皆力ヲ極メテ政府ニ抗敵シ、拿破列翁ニ從フ者甚ダ尠ク偶々之ニ心ヲ委タル者ナキニ非ザリシガ、是レ亦國民ノ惡ム所ニ非ズンバ柔弱用スルニ足ラザルノ徒ニシテ、到底得テ以テ國家ノ神髓ト爲ス能ハザル者ナレバ、拿破列翁モ遂ニ望ヲ此ニ絶チ、乃チ功臣ヲ封シテ舊貴族ト拮抗スルニ足ルノ貴族ト爲サントセリ。高官ノ如キ羅馬風ノ官位ヲ設ケ、共和立國十二年貴族風ノ大禮ノ儀式及ビ席順ヲ定メタル等ハ皆其準備ナリト謂フベシ。其後共和政體ノ廢レテ帝王政體トナリ、而シテ帝位ヲ蹈ミシヨリ益〻其志ヲ遂ゲントセリ。然レドモ當時平等論頗ル盛ンニ、功臣モ出處多クハ卑賤ニシテ未ダ久キヲ經ズ、故ニ卒然封シテ貴族ト爲スモ只有名無實ノ貴族ヲ創設シテ徒ラニ民心ヲ動スニ過ギズトシテ暫ク時ノ來ルヲ待チシガ、更ニ一機會アツテ其志ヲ助クル事トナレリ。蓋シ當時外國ヨリ土地ヲ割讓セシメタル事勘カラズ、而シテ其土地ノ中帝國ノ直轄ト爲スニ便ナルモノアリ、不便ナルモノアリ、不便ナルモノハ藩屬地ト爲スヲ得ベシト雖、其不便ナルモノハ直ニ州郡ニ編入スルヲ善トス。是ニ於テ拿破列翁ハ勅令ヲ出シ、之ヲ免稅地ト爲シ、其民ト共ニ之ヲ附與シ、數名ノ功臣ヲ貴族ニ封シ、此ノ如クニシテ一ハ新貴族ヲ創設シ、一ハ他ノ功臣ヲ貴族ニ封ゼザルベカラザルノ勢ヲ養生セリ。又外國ノ王侯ボルゼーズ伊國ニ封土ヲ割讓シタル時、其償トシテ他ノ土地ヲ與フルニ當リ其割讓ノ代金ニテ佛國内ノ土地ヲ買得シ之ヲ免稅地ト定メテボルゼーズニ附與セリ。而シテ元老院ニ其令ヲ議セシムルニ際シ、帝國ノ臣民中拔群ノ功勳ヲ立ツル者ハ財産ヲ附與シテ世襲貴族ニ封ズル事アルベシト云フ條件ヲ巧ニ挿入セシメ之ヲ頒布シタリ。然レドモ是レ敢テ佛國ニ他ノ免稅地ヲ定メントシタルニ非ズ、唯財産ヲ與ヘ

テ貴族ニ封ズル事アルベシト云フニ過ギザルナリ。

是ヨリ貴族ヲ設クルノ端緒益〻開ケ、世人モ甚ダシク之ヲ爭ムノ色ヲ顯ハサザリシガ如シ。貴族ヲ創設スルノ時殆ンド至レリト謂フベシ。唯惜ムベキハ貴族タルノ資格ヲ全備スル者未ダ甚ダ多カラザルニ在ルノミ。然リト雖拿破列翁ハ貴族ノ權力ハ帝位ヲ保庇スルニ最モ缺クベカラザルヲ洞察シ、之ヲ創設スルニ急ナルヨリ千八百八年三月一日遂ニ二個ノ勅令ヲ出シ以テ貴族ト其世襲産ヲ設定スル事トシタリ。

贈位者取調

水戸支藩宍戸　松平大炊頭

右從三位ノ見込

寶暦明和年間王政復古ヲ策議セシモノ　徳大寺家　家來

甲州　竹内式部

京都　山縣大貳

藤井右門

右正四位ノ見込

正四位ノ見込

水戸　藤田次郎左衛門

武田伊賀守

茅根伊豫之介

山國兵部

従四位ノ見込

長門　金子孫二郎
　　高橋多一郎
　　清水清太郎
　　毛利登人
　　山田亦助
　　竹内正兵衛
　　中村九郎
京都　佐久間佐兵衛
　　大和國之助
　　楢崎彌八郎
　　渡邊内藏太
　　松島剛藏
田原　賴久太郎
渡邊　登

水戸　鵜飼吉左衛門
　　鵜飼幸吉
　　櫻任藏
　　勝野豊作
　　關鐵之介
　　由丸稻之衛門
　　藤田小四郎
　　鮎澤伊太夫
　　齋藤留次郎
長門　吉田稔麿
　　杉山松助
　　河上彌市
　　來原良藏
薩摩　有馬新七
　　柴山愛次郎

聖護院宮　家來　橋口壯助
有栖川宮　家來　橋口傳藏
中宮寺宮　家來　弟子丸龍助
三條家　諸太夫　田中謙助
京都畫師　西田直五郎
森山新五左衞門
是枝柳右衞門
山本四郎
森山新藏
美玉三平
河瀨太宰
飯田左馬
伴林六郎
丹羽出雲守
宇喜多一蕙

江戸儒者　藤森恭助
土浦　大久保要
岡山　藤本津之助
苅屋　松本謙三郎
高知　平井收二郎
大橋順藏
間崎誓馬
弘瀨健太
出石　多田彌太郎
姫路　河合惣兵衞
熊本　松田重助
福岡　中村圓太
大村　松林康之助

正五位ノ見込
長門　有吉熊次郎

昆沙門堂門跡家來　弘勝之助
膳所　古高俊太郎
保田信解
森喜右衞門
高橋作也
本田小太郎
豐田謙次
宇都宮　廣田精一
秋月　海賀宮門
藏人所衆　村井修理少進
京都商人　長尾都三郎
仙臺　三好監物
天童　吉田大八
盛岡　目時隆之進
中島源藏

從四位ノ見込　三條家家來　富田織部
正五位ノ見込
京都清水寺僧　成就院忍向
周防僧　妙圓寺月性
近衞家老女　津崎村岡
福岡野村新太郎妻　浦野望東尼
河瀨太宰妻　池田幸

日本帝室

獨逸皇帝普魯西王陛下侍從官現任公使館參事官
オツトマール、フオン、モール著

伯林千九百四年

遠き旅路の眞心こめし同伴者
吾が妻
の千九百四年一月十七日の記念と
謝意を表せんが爲めの編纂

緒言

そも此一編は鳥が鳴く東の都に遠く召されて宮仕へしける明治二十年の春より、同じく二十二年の春迄、予が物しつる日記を經とし編み出したる小冊なればかしこくも今のすめらぎ。

（御名）天皇の知ろしめさるゝ、現百年紀の八十年紀に、歐化し行ける大和の國の、文明史の一部なるかも。しかも世界の目とし云ふ目は今や極東の大島帝國（ダイタウテイコク）日本に注ぎて彼の尨大なる露國と戈を交へながらも、太平洋の泰然として、若き盛りの其勢の、愈增し行く國の力を見んことを願ふの時なり。さあれ、われ今此機に於て、彼の舊記を新に出すも亦興なしと云ふべき事かは。

千九百四年三月

伯林に於て

著者しるす

上卷目錄

出發
日本に於ける獨國の影響
東京
教會の情況
芝
御所
天皇陛下
皇后陛下
公務
ヘッセン伯爵
地久節
雅樂部及劇場
官等及爵位

フレキサンダル、ミヒエロウイツチ公爵の來朝
公務
散歩及遊覽
内閣交迭
京都旅行
奈良
京都
皇城
京都の近郊
琵琶湖
琵琶湖出發
東海道
將軍
東京への歸路
明宮殿下皇儲
日本帝室

出發

千八百八十六年（明治十九年）余は聖彼得堡に在りて獨逸帝國の領事官たりしが、忽ち此有望なる職を擲ち、且歐洲の首府に住する愉快なる地位を去りて、遠く東方亞細亞に赴き、帝（みかど）の宮中に召し入れられて宮内の官吏たらんことは夢にも想ひ及ばざりき。

然るに今ゆくりなくも樞密顧問官フムベルト氏より、伯林外交方面に於ける半官半私の書を贈られしが、書中日本の帝室に於ては歐洲朝廷の事情に通せる外人顧問官を招聘して、宮内の組織を調査せしめ、充分事情に通曉せる後、之が改良を謀らしめんとの心ある趣を述べ、且此顧問官は一面式部長の任に當り（正式の式部長には非ざれど）其夫人も亦歐洲の宮中の事情に通じて、女官長の代理を勤め、又顧問官は宮中に在りて侍從と同等なる待遇を受くるものなる事を告げ、其詳細なる事柄に至りては先づ此招聘に應ずるの意あるを慥めたる後、伯林の日本公使館に於て其筋の者より口づから說明し、且相當なる條約をも取結ぶべしと。而して此等の條件は恰も予等の身上に合したるが故、此人選は遂に予等の肩上に落ち、既にして猶種々なる注意は遙々東京より時の外務次官青木子爵及東京駐在獨國公使ホルレーベン君によりて申し送られたり。

予は今此選に當れる理由を說かんが爲め、茲に數言を述べんに、予は千八百七十三年（明治六年）

より七年間アウゴスタ女帝（兼女王）陛下の内閣書記官を勤め、時恰も伯林に駐在せる日本公使青木君と相知りしが、後余は普爾西亞王の侍從試補となり、又余が妻ワンダはグローベン伯爵の女にして、始めは普國のフリードリーカール王と同妃殿下の御間にましませる第一の王女マリー殿下（和蘭國のハインリツヒ宮殿下に婚嫁し給ひしが、今は薨去し給へり）に宮仕へし、後又直の御妹にあたれるエリザベット王女（同じく失せ給ひしが、オルデンブルグ大公爵に嫁ぎ給へり）に仕へたる經歷ある者なり。

偖余等夫妻は今かく要求されたる職に就かんものと決心せる後、伯林駐在の日本事務官姉小路伯と數回交涉したる末、千八百八十七年の始め余等が條約は整ひぬ。斯く滿足に事の運びしは内閣書記官長ヘルバルト、ビスマーク伯と、内閣書記官ベルヒェム伯の力を添え給ひしによるものにして、兩伯は此度の任命をいと喜ばしく思ひ居られしなり。加之、余は又之によりて、獨逸帝國の顯職に就くの榮譽を得、且亦普國王室の侍從官たる官名を冐すを得しも、皆全く兩國政府の間に、結ばれたる條約の結果より生ぜる賜ものと云ふべし。

千八百八十七年三月、伯林の宮中に參内せしが、皇帝皇后兩陛下には優渥なる御思召によりて予等に拜謁の榮を賜はり、茲に拜別を聞え上げしは余等のこよなき名譽なりき。殊にウイルヘルム第一世陛下は、さも御氣象其まゝなる御言葉つきにて「朕は、日本天皇陛下が新に憲政を布き給はん

とし給ふ由傳承せるが、陛下の此御考へは誠に朕が解し能はざる所にして、殷鑑遠からず、此普國及獨國に於て憲法を布きたる失敗の歴史を、日本天皇陛下には、しか思召し給はざるにや」など宣ひ、又アウゴスタ皇后陛下は、日本皇后陛下に對していと懇ろなる御言づてに添へて、御心ごめの御贈物ありき。又内閣總理大臣ビスマルク侯は、會々日本より特派せられ、當時伯林府に滯在中なる日本陸軍大臣西郷伯の爲めに饗宴を催し、余も亦宴席に招かれこゝに送別の意を表されしは、余が特に榮譽とする所なり。

偖余等が一行は妻及び余と、余等の四子イレネ、ハンス、ヘードウツヒ、ワルデマルにして、最も幼きは一歳半にて、六歳なるを年頭とし、又此四子の保姆スウドマン（瑞西グンフの人）子守女ルイゼハンメル（ハイデルベルヒ出生）侍婢ベルタ、フレータル（伯林出生）等同伴にて、三月中旬トリエストに向つて出發し、墺國の首都維也納を經てクラーゲンホルトに至り、同地の地主シユミツト、ツアジロー男爵に嫁したる、余が妹を問ひたり。同地は甚だ風景に富める處なるが、雪未だ深くして四面唯玲瓏たりき。

千八百八十七年三月廿二日、墺國ロイド會社の汽船に便乘してトリエスト港を出發し、僅時埃及に寄港し、瑞西にて北獨逸ロイド會社の汽船ヲーデルに移乘し、是よりして漸々地球の總ての氣候を通過するに至れり。余等は尤も健康にして紅海を經て亞典に著し、それより進んで風景うるはしき錫蘭島の勝地コロンボーに寄り、次いでシンガポール港に到達せり。此地は曾て余が未だ若年の領事館官吏たりし頃（千八百七十三年）始めて此處に獨國領事を置かんが爲め領事館を建設するに盡力せし處にして、余は此度勤勉なる獨逸商人の中に數多の舊知を見ることを得たり。彼等は此地の蒸熱き氣候と戰ひて能く其苦難に堪へ、獨逸の商權を擴張して今や大に獨逸商人の名聲を揚げ得たるものの如し。

船の港に入る時は余等は多くは上陸して旅館に投宿し、以て石炭を積み入るゝが爲めに船の室内に入り込み來る煤塵を避くるを常とせり。余等は此時余等の生命を托せる此大船オーデルが、其歸航の途次印度洋中のソマトラ島の近傍にて難船し、遂に其北方の鄉里たるブレーメン港に再還し能はざるに至らんとは夢想だにも思はざりき。猶シンガポール及香港間は炎暑最も甚しくして、數日間の航程一も此苦熱を慰むるに足るの景勝なし。香港は風色佳麗に帆檣林立し、實に繁華なる港にして、歐洲風なる外觀の家屋を以て山麓を帶の如くに圍繞せる市街あり、當時猶六週間を要する航路にありては、實に旅客に取りて一の光明點たりと云ふべし。北獨逸ロイド會社の汽船は猶其航路を上海迄繼續し、こゝを以て東方の終點とし、當港より横濱に至るには別の支航路ありて當時はゼネラルウエルダー號と云へる老船此航路の旅客及び郵便物を搭載せり。然るに旅客はオーデル號に於て清く廣やかなる室と、空氣の流通宜しくして且新設の浴室をも備へ、殊に食事の調理巧に人を